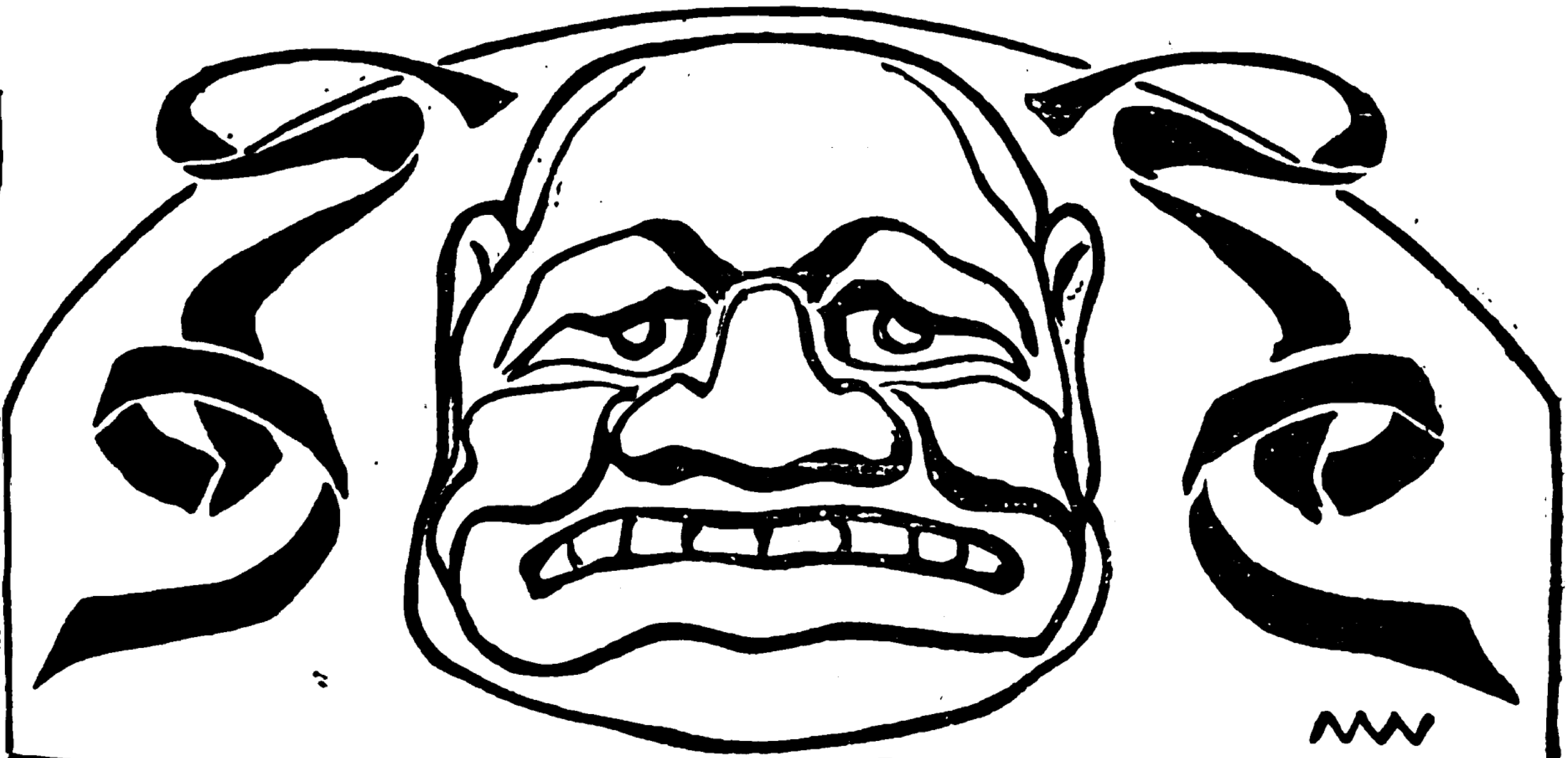
THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿五年　第五號

第二百五十四號



中央公論第廿五年第五號目次

▲公論

▲說苑

新綠



中央公論



第二十五年
第五號
第二百五十四號

北守南進論

(一)

北守南進乎、南守北進乎、抑もまた南北併進乎、併進は蓋し最も人氣を得べき主義ならんも、二兎を追ふもの竟に一兎を得ずとせば、孰れか一方を守りて而して一方に進むを智とすべし

日露戰役の後、國勢は實に一變したり、韓國を我が保護國と爲し、近く合邦を行はんとする以上、幾多煩雜なる問題の發生することを豫想せざる可らず、且つ斯の如き關係を生ぜずんば則ち止む、苟くも生ずる以上、我れは退嬰せんと欲するも得べからず、若し一び之を收めて而して之を喪ふと、猶ほ上代神功后の征討以來、皇極の失墜に至れるを再びするが如きあらば、帝國の羞辱たるや大にして、或は全く

列國間に權威を失ふもまた測る可らず、是れ豈忍ぶ可けんや、露國と媾和して得たりし旅順大連の租借權を始め、南滿洲鐵道の一線また容易に捨つ可らざるのみならず、淸國との協約に由て安奉及び吉長の二線を得、更らに吉會線の敷設權を收め得、凡そ之に由て滿韓に樹立すべき利權は重大也。此の利權を擁護し增殖するがためには、我が官民實に全力を之に集中せざる可らず、乃ち南守北進の外ある可らざる也

是れ識者の往々唱ふる所、また一半の理なきにあらず、然れども帝國果して全力を之に盡すべき乎、凡そ勢ひは進んで止まる所あらず、帝國の北進は知らず其の止まる所那邊ぞや、或は所謂バイカル以東か、是れ實に大に考慮せざる可らざる也

（二）

一び韓國を收めたる以上、再び之を喪ふ可らざるや素より論莫し、然れども韓國を收めたる眞の目的は如何、强勁なる敵をして之に據らしむるときは、我が對馬水道守りを失ひ、境上の安全得て保す可らざるが故ならずや、即ち之を收めたる主要の目的は我が四境保全に在り、然かも韓國を强勁なる敵人に委せざるの道は、國を擧げて我に收むるに在るが爲めに、乃ち之を保護國と爲したるのみ、言を換ていへば保護國と爲したるは目的の從也、主に非ざる也、倘ほ進んで更らに多く自から勞せんとするが如き、未だ必らずしも智なりとはす可らず

韓國の閣臣は、我が統監の認諾を得るに非ざれば任免す可らず、其の司法、警察、財政の諸權は旣に

悉く之を我が手に收めたるのみならず、鐵道の全線は夙くより我が有たり、而して陸海軍の我が掌裏にあるや論なき也、故に我れ苟くも仁義の心を推して韓民を統治せん乎、彼等皆悅服して我が民たるを誇るべし、之を導びくに文明の主義を以てし、知德を啓發せしめ、其の生命財產の安全を保證して以て產を興し業を營ましめば、彼等我が恩に感じて子來すべし、韓民は多年李朝の惡政に虐せられて、曾て粲然たりし文化地を掃ひ、貧窮鈍愚、實に憫むに堪たるものとなりて、政治學者が惡政の結果として想像せる所を極度まで發現するに至りし也、素より獨立國の名分を悅ぶが如きものに非ず、之を治むるの容易なる、猶ほ渴者に水を與ふるが如し、僅かに水を與ふるも拜跪すべし、必らずしも美酒醇釀を要せざる也、然るに近時韓民の漸く我を怨嗟するものあるに至りしは何ぞや、統監政治開始以來、我が韓國のために糜せし國帑實に億を超ゆ、而して其の人民を悅服せしむるに至らずして、却つて動もすれば怨嗟の聲を放たしむるは何ぞや、所謂文明政治と稱して、諸種の繁文縟禮を彼等に加ふるが故ならずや、秦の苛政に苦めるものを治むるには、法三章を以て足れりとす、未開貧寒の民に臨むに堂々たる文明の法治を以てす、嬰兒に與ふるに太牢の滋味を以てするに齊し、乳を與へずして多くの滋味を口にせしむ、泣かざらんと欲するも得ざるべき也、然かも彼等の怨嗟するや、討伐に次ぐに討伐を以てし、竟に合邦の外なしといふ、果して何の心ぞや

合邦必らずしも非ならず、然れども今日何の必要ありて急に之を實行する乎、論者或は曰く、合邦すれば則ち反抗者を問ふに叛逆罪を以てすべし、斯くして極力討盡せば、韓民等竟に歸服してまた起たゞ

るべし、今の如く我に反抗するもの名を李朝の回復を圖るに藉るに於て、我れ意の如く討盡する能はざるを患ふと、果して然らば其の心の不仁なる怖るべし、凡そ韓民の反抗する唯だ文明の苛政を悦ばざる者、不逞の徒に煽せられて然るのみ、李朝の回復といふは口實のみ、若し所謂文明の苛政を止め、施すに簡易の治を以てせば、彼等直ちに悦服せん、之を改めずんば合邦の後また相續いて叛くと毫も今に異ならず、更に口を韓國獨立の回復に藉るや必せり、故に簡易の治を布くは本也、合邦は末也、且つ合邦に由て、韓國の王室及び兩班を治むるため、少からざる費用を要するに止まらず、所謂合邦の實を擧ぐるがためにも、亦測る可らざる巨資を要すべし、帝國今日の地位を以てして、更に大に巨資を韓國に投ず、果して智なりと謂べき乎、吾人頗ぶる惑なき能はず

韓國の土地の貧寒なる、亦意料の外にあるは、識者の齊しく驚ろく所、其の利源を開かんとせば、先づ樹木を植ゆるを最急務とす、乃ち少くも五十年を期せざる可らず、然るに遠く會寧より山間を串きて吉林までも鐵道を布設せんとす、內地に在ては鐵道の普及到らざるがため、往々怨望する處あるに拘らず、却つて不利不急の鐵道を滿韓方面に布く、是れも亦本末を顚倒するものに非ざる莫からんや

對韓の要は漸進にあり、漸次仁義の心を推して以て之を統治すべし、急進して自から煩累を招くが如き、吾人の斷じて取らざる所也、我が全力を傾注すべきは、寧ろ却つて南方にあらずや、北方は略々現狀維持、少くも漸次主義にして足る

満洲に利權を立つと謂ふ、敢て問ふ、畢竟幾何の利益ぞや韓國を我が藩屛とする以上、之と境壤相接する滿洲方面を疎略にす可らざると言を俟たず、然れども南滿洲鐵道の幹線と、安奉支線とを併有し、更に吉長線を有し、且つ撫順其の他の炭坑を有する以上、尙ほ何等の利權を保持せんとするや、滿洲に於ける現在隨一の產物は大豆のみ、然かも滿洲の如き廣漠たる土地に在てこそ大豆作は有利なれ、相當の價を有する土地に大豆作を爲すが如きは、到底引合ふものに非ず、且つ我が國の農夫滿洲に至りて大豆作を自からすとする乎、淸國の農夫と競爭するに耐えざるを奈何せん、或は高粱より燒酎を得べしといひ、或は柞蠶絲に改良を加ふるといひ、或は硝子の原料たるべき土壤あるが故に、大に此の業を興すべしといふも、此の數者を除きて更らに有望なるもの何かある、商賣は小賣に至るまで日本人は到底淸人と競爭し得ざるに非ずや、棉布雜貨等を販ぐ素より可なるも是は淸國全般に涉るべし、必らずしも滿洲に利權を立てざるも可也

且つ旅順大連の租借にも期限あり、鐵道も或る時期に至らば、淸國政府の希望に應じて之を賣却せざる可らず、假令租借期限を延長すとするも、鐵道賣却を不可能事たらしむべしとするも、後者は格別、前者には必らず一場の紛擾を生じ、甚だしきは列國の容喙を招くも亦測る可らず、記せよ、米國政府は既に滿州鐵道中立案を提起したりしとを、米國を第一として、獨逸また必らず此の問題を雲煙過眼に附せざるべし

滿洲に於ても、亦現狀を維持するは可也、更らに一歩二歩數歩數十歩を進めんと欲するが如きは、所

に我が帝國の前途を累するもの也、日本の移民を滿洲に集注せんといふが如きは、滿洲の實狀に迂遠なる者也。他年若し帝國をして厭ふべき紛累を受けしむるものあらば、其は必らず滿洲問題ならん、吾人實に寒心に耐えざる也

我れ滿州に利權を立つるに鋭意し、進んで而して止まる所莫くんば、竟に露國と衝突せざるを得ざるべし、露は寧ろ好愛すべき國にして、又其の陸軍の强大なる、而して執着力に强き、却つて往々畏怖すべきものあり、之を宿敵として、結んで釋けざる怨みを構ふるが如きは、決して我國百年の大計にあらず、宜しく之と相同盟して、以て北方の平和を策し、全力を南方に注ぐべし、時に露國と相角するがため、平素百萬の大兵を養ふが如きは、幾んど思はざるの甚だしき也

（四）

試みに臺灣を看よ、樹木蓊欝として而して土地の豐饒なる、到底滿韓の瘠鹵なると同日に語る可らず、同一の淸國に於ても、北方は多く荒寥なるも、南するに隨つて殷富を增加す、單に土壤の豐肥なるのみに非ざる也

更に南方太平洋中の群島を看よ、氣候素より酷熱なりと雖も、凌霄の樹木相茂りて其の豐饒なる、一見して明白に、千古未だ斧を入れず鋤犂を投ぜざる土地甚だ多く、其の富源幾んど測る可らず

吾人の聞く所によれば、歐米人の此等熱帶圈内の群島に在るもの、十數年にして其の體贏れ腦鈍りて漸く用ゆるに堪えず、而して其の生む所の子に至ては全く白痴なり、現に蘭邊政府は、健剛有爲なる子

弟を選び、教ゆるに此等地方の語言と、其の特殊事實に當る所以の方法とを以てし、推奬して其の地方に至らしむるに、成績極めて佳良なりしも、十數年を經れば、彼等羸弱して事に當る能はず、其の子は全く白痴にして用ゆる能はざるを以て、白晳人の竟に其の土地に適せざることを看取せりといふ、此等地方に在る歐米人は、二年又は三年毎に、本國又は他の溫帶地方に轉じて、少くも半ヶ年の休養を爲すを通例とす、然らざれば其の健康之に耐ゆる能はざれば也　然るに我が日本人と淸國人とは、曾て斯の如きことあらず、居ること二十幾年なるも健康に異常なく、其の生子また活潑にして怜悧也、應さに知る、此等南太平洋の諸群島は、日本人の經營すべきものにして、實は天の命ずる所なることを

瓜哇は渺たる一島嶼のみ、然かも其の産する所の砂糖は、世界の相場を左右するに足るに非ずや、諸群島多くは歐洲列國の領有に歸せりと雖も、其の開發未だ十分ならず、我が日本人の經營に待つもの甚だ多し、列國或は日本人を猜忌するも、我れに他の野心なく、單に其の利源を開發するに在りて、而して其の結果の自他兩つながら相利することを悟らば、寧ろ日本人の群來を歡迎すべく、而して其の期また甚だ遠からざることを、吾人の敢て疑はざる所とす

有體にいへば、吾人は非律賓を米國の領有に歸せしめたるを遺憾とす、彼等は茲に於てまた米國本土の西部に於けるが如く、日本人に對して門戸を閉鎖するの虞あるのみならず、生中に此の一群島を領有したるがために、此の方面に於て亦我れを嫉視し、我が發展を妨害せんとする掛念あれば也、布哇をして竟に米國の領屬たらしめたるは、寧ろ自然に近しと雖も、經世家は我れに取て妙ならずとす、況んや

非律賓の如き、彼に遠くして而して我に近く、臺灣と殆んど相呼應する地位に在るものをや、袖手して之を米國の手に入れたるは、我が千秋の失策ならずんばあらず

清國の廣東福建地方、また殷富豐饒にして、我が商工の市場として最も有望也、玆に鐵道を布設し、居留地を設けて、大に發展の地を爲すは、蓋し活識者の應さに急と認むる所なるべし、唯だ瘠鹵貧寒なる北方にのみ力を集注して、此の方面を疎略にするは、愚の極也、思はざるの甚だしき也

（五）

或は曰く、我れ北進せば、衝突の虞あるもの僅かに露の一國のみ、若し南進せば、獨逸、佛蘭西、西班牙、和蘭皆危惧すべく、米國は勿論、或は我が同盟國たる英國と雖も之を悅ばざるべく、隨つて多く列國と角する掛念ありと、然れども我が南進の目的は全く利源の開發に在り、移民の獎勵にあり、領土所有は素より望む所なるも、既に明確に領有者ある所は、寸毫も之を爭ふ野心を有せず、唯だ歐米人が經營するに適せざる所に於て、我が日本人の適當なる農工諸業を營まんと欲するのみ、日本人の勞力を以て、熱帶國中の遺利を收拾し、地力を開發して以て文明に貢献せんと欲するのみ、故に歐米人始め或は之を猜忌するとなきを保せざるも、竟に釋然として進んで我れを歡迎するに至るや必然のみ

我れ若し北進して止まる所莫くんば、露國之を悅ばざるのみならず、清廷も亦之を欲せざるべし、而して少くも獨米兩國亦我を敵視するに至らん、米國が滿洲鐵道中立案を提議したりしを看よ、若し外國

を掛念すといはゞ、北進すると南進すると一のみ、北進して露清と相敵視するは、我に於て却つて困難にして且つ危險也

我が臺灣全島を領有したるは、之を基礎として、南清及び南洋方面に發展すべき天の使命を得たる所以ならざらんや、南洋の土人は日本人と親みて相用ゆるを悦ぶ色あり、彼の暹羅の如き、また多く日本人に依賴せんとする心あり、我が南進は幾んど天の命ずる所にあらずして何ぞや

（六）

一言にして之を蔽へば、南進は主として海洋に伸る所以也、唯だ南清を除けば、他は悉く洋中の島嶼なれば也、北進は大陸に伸る所以にして、必らずしも我が祖先以來不適任とする所ならざるも、北方は暫らく現狀維持にて可也、寧ろ海國として立てる帝國の本分としては、大に海洋に伸ぶるを自然とすべき也

已に海洋に伸んとす、之がため海軍擴張の必要ある辯を俟たず、日本人の利源を追ふて進む背後には、必らず之を保護すべき勢力を缺く可らざれば也、經世の士深く之を思へ

我が建國史と櫻花

(一)

「櫻散るこの下蔭はさむからで、そらにしられぬ雪ぞ降りける」落花の霏々たる雪の如き處、欄に凭て我が古史を讀むに、坐ろに多大の興趣を覺ゆ

本草學者は櫻をプルヌス科に屬し、杏、桃、李と同科とするも、櫻は實に我帝國特有の名花にして、昔は單に花といへば櫻花の謂なりき、美人を花に喩ふるは古今東西同一轍にして、我が神代に在て此の花に因める美人は此華咲之耶姫とす、即ち櫻花の神にして、田守神社(伊賀)、宇遲櫻神社(伊勢)、櫻崎神社(近江)、富士淺間神社(駿河)、后神社(佐渡)等は實に姫を祀れるもの也、姫は大山祇の女にして天孫瓊々杵尊の后となり、火々出見尊を生めり、而して此の結婚が日本帝國の發達に重大なる關係あるとは、吾人の殊に興味を感ずる所とす

(二)

神代に於て、夙くより日本の國土に分布せる種族は、天照大神派、出雲大社派、大山祇派、熊襲族、蝦夷族、土蜘蛛族等とす、天照、出雲兩派が滿韓と同種なるとは略々推知せらる、大山祇派は之と同種なるや否や未だ明かならず、一説にマレイ種族なりともいへり、熊襲族は南洋人種なりといひ、或は漢人種ともいふ、土蜘蛛族はマレイ種の一なる可く、蝦夷族は目今他に類なく、唯だエスキモー人のみ類

ぶる相似たる點ありといふ、一説に天照派出雲派は印度の釋迦族なりといへり、斯く主張する者は、第一高天ヶ原は梵語帝釋の名ダカム(漢譯に天とす)と天の運行に名けたるハラカキヤとを略したるにて、最上天神の居る天界といふの意義なり、第二大祓の辭「天津祝太諄辭」は、梵語のアムノリツト、リノト(涅槃寂滅の義)フト(漢譯に眞とす)にして、即ち無上寂滅眞寂滅の義なり、第三大己貴命は印度の摩訶迦羅神にして、天孫(瓊々杵尊)降臨以前日本に來りしなり、久しく出雲大社を管せし鰐淵寺に於て、神體としてマダラ神(即ち摩訶迦羅神)を祀り、且つ大社と同じく拜殿を南面にし、神體を西向せしむるは、大己貴命が印度より渡來したりし一證なり、第四大己貴の名は梵語のマカナハチの略なるべし、第五神なる語は、釋迦牟尼なる語の轉訛したるものなりといふに在り

然れども斯の如きは人類學者の研究問題のみ、今史に由て考ふるに、土蜘蛛種は畿内より東北及び九州に散在せるも、本來武器をすら有せざる者ありし程にて、最も劣等なる種族にして、東は蝦夷種の壓迫を受け、西は出雲派大山派等より蠶食せられて、最も早く勢力を失へるが如し、蝦夷種は東北より北海道に渉りて蔓延し、熊襲族は薩摩、大隅、日向、肥後等に盤據し、大山祇派は九州の一部より四國中國の間に跨り、伊勢、尾張等の海岸に沿ふて繁殖し、而して出雲派は、出雲より海を越て韓土に往來し、内地に在ては山陰道北陸道東山道に勢力を張り、最も優勝の地位に立てるが、天照派降臨するに及び、以上の諸族を征服し、綏撫し、同化せしめて、竟に帝國の經營を全くせられたり

(三)

素盞雄尊の天照大神に逐はれて出雲に至るや、足名椎の女櫛名田姫を娶り玉へり、八股大蛇を退治し玉へるは此の時にして、『やくもたつ出雲八重垣つまごめに、妻もこもれり我もこもれり』と咏じ玉へり、足名椎は大山祇の子にして、姫は即ち其の孫女なり、大山祇の一派（大山祇といふは氏族の名稱なりと久米博士は說けり）は彼の猿田彥と共に、神代史に所謂地祇也、天孫降臨以前の土着人にして、殆んど出雲派よりも早く日本に蔓延し居たりしものゝ如し、大己貴（又大國主とも稱す）は素盞雄尊と櫛名田姫の間に生れし神にて、大己貴も亦茅渟縣に航し到り、大陶祇の女活玉依姫を娶れりといふ、大陶祇は素より大山祇派也

大己貴の出雲に在るや、高皇產靈神の子少名彥海外より來り、大己貴を助けて諸方を經略し、大己貴の子事代主、建御名方、味鋤高彥、加夜奈流美等をして諸處に殖民せしめ、又河川を修理し、田畑を開墾することを敎へ、家畜の病を癒し、鳥獸昆虫の害を除く爲め禁厭の法をも傳へたれば、恩化大に行はれて、頗ぶる勢力ありき

天照大神派は日本經營のため、大神の御子天忍穗耳尊を下さんとしたるも、出雲派の勢ひ盛なるを視て、先づ天穗日を遣して之を圖らしめしに、穗日久しく出雲に留まりしかば、更に其の子大背飯三熊大人を遣はしたるも亦要領を得ず、依て天稚彥に弓矢を授けて派遣したるに、稚彥は大己貴の女下照姬と婚して却つて自から中國を謀るの機鋒を現はせしかば、更に鳴女を遣はせしに、出雲派に殺されたり、茲に於て密かに刺客を放ちて稚彥を殺さしめ、尙ほ勇將經津主、武甕槌の二神をして、兵船を率ひて出

雲に至らしむ、二神大己貴に就て國を避けんことを勸む、大己貴其の子事代主と共に命を奉じて曰く『天孫既に天日嗣たり、我が子孫應さに相率ひて奉事すべし、天下誰か違戻せんや』後世天子を天日嗣と謂ふは之に基づけり、獨り建御名方（事代主の弟）のみ之に反對して二神と戰ひ、敗れて科野（今の信濃）に走り、洲羽（即ち諏訪）に於て武甕槌に降れり（建御名方は科野に止まりて此の附近を開拓し、諏訪明神となれり）

當時大己貴は、媾和の條件として其の居室を天照大神派の元首の宮居と略々齊しくせんことを要求せり、天照派の出征大將たりし武甕槌之を容れ、爲めに神宮を杵築に作りて天孫の宮と異なることを莫らしむ、是れ出雲大社の起原也、高皇產靈神始め其の女栲幡千々姬を忍穗耳尊に配し、彥火瓊々杵尊（即ち天孫なり）を生ましむ、玆に至て又其の女三穗姬を大己貴に嫁せしむ、蓋し一夫多妻は當時より貴人の風習にして、且つ大陸の習俗と同じく、叔姪相婚し、異母の同胞相娶るを常としたりき、而して大己貴は忍穗耳尊と相婿となり、天孫には義叔父に當ることとなれり

大己貴は此の優待に甘んじて國土を獻じ、其の子事代主をして天孫瓊々杵尊に奉仕せしむ、而して天穗日は天照派の承認を經て永く出雲派に事ふることとなれり、今の千家男爵家は實に此の裔なりといふ

（四）

出雲派との妥協既に成りしかば、天照大神は天孫瓊々杵尊を召し、賜ふに神鏡及び勾玉、神劒を以てして宣はく『豐葦原の瑞穗國は我が子孫世々統治すべきの地也、此の鏡は朕が魂として朕が前に拜す

素盞雄尊の天照大神に逐はれて出雲に至るや、足名槌の女櫛名田姫を娶り玉へり、八股大蛇を退治し玉へるは此の時にして、『やくもたつ出雲八重垣つまごめに、妻もこもれり我もこもれり』と咏じ玉へり、足名槌は大山祇の子にして、姫は即ち其の孫女なり、大山祇の一派（大山祇といふは氏族の名稱なりと久米博士は說けり）は彼の猿田彥と共に、神代史に所謂地祇也、天孫降臨以前の土着人にして、幾んど出雲派よりも早く日本に蔓延し居たりしものゝ如し、大己貴（又大國主とも稱す）は素盞雄尊と櫛名田姫の間に生れし神にて、大己貴も亦茅渟縣に航し到り、大陶祇の女活玉依姫を娶れりといふ、大陶祇は素より大山祇派也

大己貴の出雲に在るや、高皇產靈神の子少名彥海外より來り、大己貴を助けて諸方を經略し、大己貴の子事代主、建御名方、味鉏高彥、加夜奈流美等をして諸處に殖民せしめ、又河川を修理し、田畑を開墾することを敎へ、家畜の病を癒し、鳥獸昆虫の害を除く爲め禁厭の法をも傳へたれば、恩化大に行はれて、頗ぶる勢力ありき

天照大神派は日本經營のため、大神の御子天忍穗耳尊を下さんとしたるも、出雲派の勢ひ盛なるを視て、先づ天穗日を遣して之を圖らしめしに、穗日久しく出雲に留まりしかば、更に其の子大背飯三熊大人を遣はしたるも亦要領を得ず、依て天稚彥に弓矢を授けて派遣したるに、稚彥は大己貴の女下照姫と婚して却つて自から中國を謀るの機鋒を現はせしかば、更に鳴女を遣はせしに、出雲派に殺されたり、茲に於て密かに刺客を放ちて稚彥を殺さしめ、尙ほ勇將經津主、武甕槌の二神をして、兵船を率ひて出

雲に至らしむ、二神大己貴に就て國を避けんことを勸む、大己貴其の子事代主と共に命を奉じて曰く『天孫既に天日嗣たり、我が子孫應さに相率ひて奉事すべし、天下誰か違戻せんや』後世天子を天日嗣と謂ふは之に基づけり、獨り建御名方(事代主の弟)のみ之に反對して二神と戰ひ、敗れて科野(今の信濃)に走り、洲羽(即ち諏訪)に於て武甕槌に降れり(建御名方は科野に止まりて此の附近を開拓し、諏訪明神となれり)

當時大己貴は、媾和の條件として其の居室を天照大神派の元首の宮居と略々齊しくせんことを要求せり、天照派の出征大將たりし武甕槌之を容れ、爲めに神宮を杵築に作りて天孫の宮と異なることを莫らしむ、是れ出雲大社の起原也、高皇產靈神始め其の女栲幡千々姬を忍穗耳尊に配し、彥火瓊々杵尊(即ち天孫なり)を生ましむ、玆に至て又其の女三穗姬を大己貴に嫁せしむ、蓋し一夫多妻は當時より貴人の風習にして、且つ大陸の習俗と同じく、叔姪相婚し、異母の同胞相娶るを常としたりき、而して大己貴は忍穗耳尊と相婿となり、天孫には義叔父に當ることとなれり

大己貴は此の優待に甘んじて國土を献じ、其の子事代主をして天孫瓊々杵尊に奉仕せしむ、而して天穗日は天照派の承認を經て永く出雲派に事ふることとなれり、今の千家男爵家は實に此の裔なりといふ

(四)

出雲派との妥協既に成りしかば、天照大神は天孫瓊々杵尊を召し、賜ふに神鏡及び勾玉、神劍を以てして宣はく『豐葦原の瑞穗國は我が子孫世々統治すべきの地也、此の鏡は朕が魂として朕が前に拜する

が如くせよ』と、天津兒屋根を相とし、天忍日、天津久米を將として高千穗に降臨し、吾田の笠狹岬に治す、今の薩摩の加世田是なりといふ、尊が大山祇の女此華咲之耶姫を娶り玉へるは此の時にして、姫の御腹に彦火々出見尊は生れさせ玉へり、玆に於て大山祇は出雲派の外戚にして、同時にまた天照派の舅家ともなれる也、高皇産靈神が兩派の外戚となれるが如く、櫻花の名を取れる美人此華咲之耶姫の結婚が、有力なる出雲派と、土着の大山祇派と天孫との楔子となりて、其の融和統一に資せるの大なるを知るべきのみ、吾人故に曰ふ、此の結婚は日本帝國の發達に重大なる關係を有すと、櫻花が天孫降臨の以前より既に我が特有の名花たりし事と、此の名花に喩へらるゝ美人の結婚が斯く重大なる意味あるとは、豈興味多き問題ならずや、吾人今櫻花に對して多大の興趣を感ぜざらんとするも能はざるのみ

大山祇の女岩永姫も亦此華咲之耶姫と共に瓊々杵尊の妃となりき、後に神武天皇の東征し玉ふや、大山祇の裔鴨建津見其の地理に精通せるの故を以て天皇の嚮導たりき、大山祇は始め攝津の國三島に祀られ、後伊豫國大三島に遷し祀られ、崇峻天皇の御宇に、伊豫より伊豆の三島に祀られて今日に至る

（五）

天孫瓊々杵尊と、櫻花の如き此華咲之耶姫の御間に生れさせ玉へる火々出見尊は、海神豐玉彦の女豐玉姫を娶り玉ひ、其の御子鸕鷀草葺不合尊亦豐玉彦の女玉依姫を娶り、四子を生ませ玉ふ、長を五瀬尊といひ、次を稻氷尊といひ、次を御毛沼尊といひ、季を磐余彦尊といふ、稻氷尊は母后の國に居て新良國の祖となり、御毛沼尊は海を航して常世國に居る、磐余彦尊は即ち神武天皇也

神武天皇は始め吾田の小椅君（彦火々出見尊の兄と稱せらるゝ火闌降尊の子）の妹吾平津姫を娶り玉へるが、既に中州を平定し、辛酉の歳（今より二千五百七十年前）御即位の前年を以て、更に媛蹈鞴五十鈴姫を册立して皇后とし玉へり、姫の父は出雲派の嫡流たる事代主にして、母は大山祇派の嫡流なる三島溝橛耳の女玉櫛姫也、時人五十鈴姫を『神の御子』と稱へて深く之を敬重したりといふ、天皇が之を立てゝ正后とし玉へるは、また出雲派大山派を融合せしめて益々帝業を固め玉ふ御趣意なるべく、遙かに天孫が櫻花を名とせる美人と婚し玉へる大御心に則らせ玉へるものなるべし

神武天皇の崩後、吾平津姫の出なる手研耳尊年既に長じ、且つ父皇に随つて多く戰功あるの故を以て、頗ぶる權力を振ひ玉へり、五十鈴依姫皇后咏じて宣はく

さゐ川よ雲たちわたりうねびやま木の葉さわぎぬ風吹かんとす

畝傍山ひるはくもとゐ夕さればかぜ吹かむとぞ木の葉さやげる

皇后の生み玉へる皇子神八井耳、神渟名川耳の兩尊竟に手研耳を殺し、神渟名川耳帝位を繼がせ玉ふ、綏靖天皇是れ也

綏靖天皇、安寧天皇も亦神武天皇の如く出雲派の女を納て皇后とし玉へり、天照派と出雲派との結合は彌よ鞏固となりしなるべし、當時結婚の重要なりしと想ふべく、殊に天孫と櫻花に因める美人との大婚の最も重要なりしと亦推知すべき也

櫻花の形容、色彩共に粹然として雄渾又精美を極む、其の國民性代表となれる、啻だに歷史の因緣に由るのみに非ざる也

公論

人種的感情の勃興

法學博士 戸田海市

一

人種的感情の勃興は前世紀末より世界各國に通ずる最大事件の一つであつて、之を現代文明の一特色と云ふことが出來る。米國や濠洲の黃色人種排斥運動の爲め現に吾人は非常の迷惑を蒙つて居るが、此外歐洲諸國の有樣を見ても人種的反感は到る處に勃興して居る。先づ英國に於て愛蘭自治案は益難問題となりつゝある。獨逸では益波蘭を持て餘して居る、精神上には波蘭人に獨逸語を强制して固有の思想を根蒂より破壞せんとし、物質上には波蘭人の土地を强制に買上げて獨逸の農民を移植せんとし、之が爲め既に數億の資金を投じたが其効果は寧ろ微々たるもので、波蘭主義は益旺盛となりつゝある。老帝國墺地利に於ては匈牙利人の獨立運動は益强くなり、其分離は只だ時間の問題に過ぎずと迄認められ、一面にはボヘミヤ人の反抗は日に益甚しくなり、南部の伊太利人も少數ながら分離的傾向を示しつゝある。瑞典と諾威とは既に分離して仕舞ひ、露國では芬蘭人と猶太人波蘭人の同化に益困難を感じ。バルカン諸國は次第に土耳其の羈絆を脫して獨立し、現在の土耳其領も人種別に由て益統一が困難となりつゝある。是迄英國の賢明寛大なる政治に悅服又は盲從して居た埃及や印度も近頃は形勢日に不穩

てある。支那の利權回收運動も全く同一の性質を帶ぶるものであつて、支那人の自覺に伴ひ佛領印度も將來人種問題の爲めに大なる困難に陷るであらう。見渡す限り異人種を以て組織した國で割合平穩に調和の行はれて居るのは、國家として大なる發展を爲すの望を有せざる永世中立の瑞西と白耳義丈けであつて、其他は何れも民族的反感に由て苦しみつゝある。此度獨逸がアルサス、ローレンス二州に自治を與へる計畫があると云ふことであるが、元と此二州は日耳曼人の國であつて現在其人口の大部分は同人種で以て占めて居るから、此事は敢て世界の通勢に例外を爲すものではない。

現代文明の樂屋の準備は久しいものであるが、愈舞臺の幕を切て墜したのは佛蘭西革命の時であると云ふことが出來る。然し乍ら此十九世紀の始と終とを比較すれば非常な相違がある。其始は佛蘭西革命に由て確立せられた自由平等の思想が萬事を支配し、政治の方針は成るべく自由放任とし、政府は國防司法の外何事にも手を出すべきものでないとし、又國際間にも自由に平等に交通すると云ふ平和主義が理想であつた。內に向ふて個人主義の考は必然外に向ふて世界主義となるものであつて、當時の學者は世界統一國の成立も遠からず成就するであらうと信ずる者が少なくなかつた。個人の自覺向上に伴つて政府の爲すべき仕事が益減少するものであるとすれば、政府を建てる必要も人類の進歩に伴ふて益減少し、從ふて各國民が獨立に國家を組織する必要も漸々減少すべき譯である。我國でも憲法發布前自由思想の勃興した時代には「國を建つるの價幾何ぞ」と云ふ樣な問題を提出した學者もあつた。然るに此一世紀の間個人の能力は大發展を爲すに從つて政府の仕事は減少せず、却つて日に益增加して來た、將に中央政府斗りでは仕事が仕切れぬ所から地方自治體の發達して其事務は驚くべき勢を以て增加しつゝある。是と同時に世界の交通も非常に頻繁となり、千里の異域も昔時の隣郡の如く交通するやうになつたけれども、之に伴ふて世界的思想は盛とならず、却つて國民的思想や民族的思想が益盛となつて來る。一見

奇異なる此現象は果して如何なる原因に出づるか、又將來此現象は如何に發展するてあらう乎。

二

人種的感情の勃興は一口に云へば現代文明の自然の結果てある、決して異常なる一時的流行物てはない。此事は現代文明の特性を解剖して見れば明白てある。第一現代文明は個人の孤立生活よりして益交通的共同生活に移りつゝある。先づ物質的生活の上から見るに人々分業的に生産して互に之を交換し、相賴り相扶けて生活する、生産の組織も以前は各人各家族小規模に生産したけれども、今日は會社も合同に由り多數の資本家勞働者相集まり、大々的企業に由て生産する。鐵道の如きは國有として國民全體の力に由り經營する。消費の方面を見ても共同に大家屋を建てゝ住ひ、汽車汽船や電車を設けて共同に往復する、道路學校病院公園等の公共使用物は日に益增加する。是迄人口の多數は田舍に散在して居たが、今日は益大都會に集中して共同生活をする。更に精神的生活の方面を見るに第一學校を設けて幼少より共同に教育せられ、交通々信機關の發達に由て思想の交換は益盛となり、印刷物特に新聞紙なるものは社會共同思想の重要な機關となつた、以前の新聞は持主主筆又は政黨の主義發表機關と云ふ主觀的性質を帶びた一種の文學てあつたが、今日は社會の出來事と思想の變化を反影する客觀的のものとなつて來た。其他各般の集會結社は盛となり、中央地方の政治も一般人民の參與に由て行はれる樣になつた。

此の如き物質的精神的の交通共同生活が盛となれば此共同生活の全般的機關として國家自治體が益多く利用せらるゝに至るは當然てある。又共同生活が盛となれば社交性が發達し、共同意識就中國民的民族的意識が旺盛となるは自然の勢てある。一面より云へば社交性の發展が共同生活を盛ならしむる原因と云ひ得る。共同生活の日に親密となれる今日に於て個人主義や個人主義を基本とする無政府主義が勢力を失ふて、國家主義や國家社會主義と云ふ團體思想が獨り盛なるは敢

て怪むに足らぬ。而して斯く共同生活が盛となり孤立生活の範圍が狹少となることは、昔し風に考へれば個人の自由を奪ふて人格の價値を減ずるものである。又今日實際斯の如く考へて共同生活や團體思想に反對する復古主義者も多少はある。然し今日の文明國民は一般に社交性が非常に發達して居るから、此の如き自由の制限を當然のことゝ見做し、意識的積極的に之に服從して更に窮屈を感ぜず、寧ろ共同生活の利便の非常に大なることを感ずるのである。只だ本來の思想慣習に根本の差異ある異人種異民族は交通生活の發達するに從つて非常の窮屈壓迫を感ぜざるを得ない、從て異人種異民族は別に相集つて自己に利便なる團體生活を起さんとするに至るは當然である。

交通機關の幼稚な十九世紀の初めには歐洲先進國に於ても、僅か數十里に運搬し旅行する費用と時間は今日の數百里乃至數千里に對する費用時間と同一である。故に昔は一國を組織するとは云へ各地の交通は極めて疎遠であつて今日の如き共同生活の實は存在しなかつた。尤も少數の貴族や商人の間には相當の交通共同はあつたけれども、此等の階級の思想は一般民衆の思想とは頗る異なり、寧ろ甚だ世界的のものであつた。例へば佛蘭西の文明が歐洲大陸を支配した時代には、各國の貴族即ち治者階級は全く佛蘭西の摸倣を是れ事とし、日常語までも佛語を使ふて泣いたり笑つたりして居た。又當時經濟上の交通と云へば高價にして運搬に便利な物品就中美術工業品が主要な部分を占めて、之を需用する者は貴族富者の少數階級に止まり、一般民衆は尙ほ大部分自給自足の孤立生活を脫し得なかつた。然るに交通生活が大に進歩し、特に一般民衆が向上して此共同生活に加はるに至つて初めて各國に國民文學が盛となり、又國民的民族的自覺が强大となつて來るのである。國民的又は民族的自覺と云ふことは民衆の進歩向上を待て初めて起るものであるが、一面に於て民衆の向上と云ふことは共同生活の發達と因果關係を爲して進むものである。少數の貴族階級の交通のみては到底今日の如き偉大なる共同生活は發達するこ

とが出來ぬと同時に、共同生活が發達すれば有形無形の文化は國民の各階級に普及するから必然民衆の自覺向上を來たすのである。

獨逸が大國佛蘭西より奪取つたアルザス、ローレンス二州の處分に付ては、佛國の敵意あるに係はらず割合に困難を感ぜず、結局此二州は確乎たる帝國の一部分を爲すであらうと云ふ自信を有て居る所以は、此二州に於ける佛蘭西分子は少數の上級者に止まり、一般民衆は依然たる獨逸民族なるが爲め、所謂此二州の佛蘭西文明なるものは根無し草だからである。然るに同し獨逸が貧弱なる亡國波蘭の三分の一を獲得して二世紀を經た今日益之を持て餘して居る所以は、其上級者をば獨逸化しても一般民衆は依然たる波蘭人だからである。獨逸が波蘭より起る內憂を除くには極力同化政策を强行して、其民衆の間に於ける獨逸分子を波蘭分子よりも優勢ならしめるの外はないであらう。

次に現代文明の一特色は進歩發展と云ふことてある。進歩と云へば個人たると團體たるとを問はず物質上精神上に自我を擴張することである。各國民各民族が互に發展せんとすれば勢ひ衝突を生ずる、特に今日各國民の發展は主として物質的方面に向ふて居るから此衝突は到る處に起らざるを得ない。十九世紀の初めには英國を除くの外他の各國は皆內治に急にして外に發展するの餘力はなく、只だ外部から侵擊を受ければ消極的に之に反抗するに止まつて居た。然るに今日は新開の米國すら到底內地丈けては發展が六ヶ敷くなつて世界の各方面に發展の策を立てる樣になつた。今日各國の採用しつゝある帝國主義なるものは畢竟國民的民族的自我の發展に向ふ所から起つたものである。

最後に各國民民族の平等的發達と云ふことも現代の特色である。由來平等的發達と云ふことは交通共同生活の進歩に伴ふて必然に起り來る現象である。一國內に於ける共同生活の進歩は民衆の向上を來たすことは旣に說いた所であるが、國際間に於ても交通繁るが如く頻繁となれば先進國の文物は盛に後進國に輸入せられ、其結果後者と前者との發達の距離が次第に接近し、

従つて後者は是迄の如く前者の同化擴張作用を消極的に甘受せず、自我を主張して對等の交通を要求するに至るは當然である。輓近人種的感情昂進の最も顯著なるものは實に後進國の先進國に對する反抗運動てある。

三

以上を以て明かなるが如く現今の人種的感情の勃興は國家主義や帝國主義や國家社會主義と結局同一根源より起り、只だ其對象を異にするに過ぎぬものてあつて、其根蒂は深く現代文明の内に存し、決して一時的流行現象てはない。印度が英人の支配に反抗し、若くは支那の利權回收熱の盛となつたのは決して日露戰爭に於ける我國の大勝に由て初めて亞細亞人の自負心が高まつたからてはない。然らば次に吾々の研究を要するは此人種的感情は將來益昂進し、從つて各人種各民族は互に相排斥して孤立生活を營むに至るべきや否と云ふ問題てある。既に述べた如く文明の進歩は主として交通共同に由て起るものてある。然らば各民族が排他孤立するに至れば世界の人類は退歩せざるを得ない譯てある。

此問題に答へるには先づ例を個人に援て考へるが捷徑てある。個人が自覺して十八世紀末より盛んに自我を主義するに至つた時代を見るに、人々利己を專一とするが爲め社交性公共心の衰退を來たしはせぬかと云ふ虞があつた、實際一時は反動として此の如き傾向が往々現はれた。當時の學者は利己心を只一の基本として社會組織を説明する者が多かつた。然るに社會の進歩するに從つて社交性は益發達し、共同生活は益親厚となり、個人の自意識は益強大となると同時に、國家主義や國家社會主義と云ふ團體思想が益盛んとなつて來たのてある。世人は往々自我の主張を以て利己排他と同視するの傾がある、又一時は反動的に此の如き事實も現はれたには相違ないが、大體より見れば自我の主義は是まて無意識に盲從した時勢後れの偏狭な風俗慣習や制度に反抗すると同時に、一面には獨立の判斷を以て即ち意識的に新なる共同生活を形成せんとする

とが出來ぬと同時に、共同生活が發達すれば有形無形の文化は國民の各階級に普及するから必然民衆の自覺向上を來たすのてある。

獨逸が大國佛蘭西より奪取つたアルザス、ローレンス二州の處分に付ては、佛國の敵意あるに係はらず割合に困難を感ぜず、結局此二州は確乎たる帝國の一部分を爲すであらうと云ふ自信を有て居る所以は、此二州に於ける佛蘭西分子は少數の上級者に止まり、一般民衆は依然たる獨逸民族なるが爲め、所謂此二州の佛蘭西文明なるものは根無し草だからてある。然るに同し獨逸が貧弱なる亡國波蘭の三分の一を獲得して二世紀を經た今日益之を持て餘して居る所以は、其上級者をば獨逸化しても一般民衆は依然たる波蘭人だからてある。獨逸が波蘭より起る內憂を除くには極力同化政策を强行して、其民衆の間に於ける獨逸分子を波蘭分子よりも優勢ならしめるの外はないてあらう。

次に現代文明の一特色は進步發展と云ふことてある。進步と云へば個人たると團體たるとを問はず物質上精神上に自我を擴張することてある。各國民各民族が互に發展せんとすれば勢ひ衝突を生ずる、特に今日各國民の發展は主として物質的方面に向ふて居るから此衝突は到る處に起らざるを得ない。十九世紀の初めには英國を除くの外他の各國は皆內治に急にして外に發展するの餘力はなく、只だ外部から侵擊を受ければ消極的に之に反抗するに止まつて居た。然るに今日は新開の米國すら到底內地丈けては發展が六ヶ敷くなつて世界の各方面に發展の策を立てる樣になつた。今日各國の採用しつゝある帝國主義なるものは畢竟國民的民族的自我の發展に向ふ所から起つたものてある。

最後に各國民民族の平等的發達と云ふことも現代の特色てある。由來平等的發達と云ふことは交通共同生活の進步に伴ふて必然に起り來る現象てある。一國內に於ける共同生活の進步は民衆の向上を來たすことは既に說いた所てあるが、國際間に於ても交通織るが如く頻繁となれば先進國の文物は盛に後進國に輸入せられ、其結果後者と前者との發達の距離が次第に接近し、

從つて後者は是迄の如く前者の同化擴張作用を消極的に甘受せず、自我を主張して對等の交通を要求するに至るは當然てある。輓近人種的感情昂進の最も顯著なるものは實に後進國の先進國に對する反抗運動てある。

三

以上を以て明かなるが如く現今の人種的感情の勃興は國家主義や帝國主義や國家社會主義と結局同一根源より起り、只だ其對象を異にするに過ぎぬものてあつて、其根蔕は深く現代文明の內に存し、決して一時的流行現象てはない。印度が英人の支配に反抗し、若くは支那の利權回收熱の盛となつたのは決して日露戰爭に於ける我國の大勝に由て初めて亞細亞人の自負心が高まつたからてはない。然らば次に吾々の研究を要するは此人種的感情は將來益昂進し、從つて各人種各民族は互に相排斥して孤立生活を營むに至るべきや否と云ふ問題てある。既に述べた如く文明の進步は主として交通共同に由て起るものてある。然らば各民族が排他孤立するに至れば世界の人類は退步せざるを得ない譯てある。

此問題に答へるには先づ例を個人に援て考へるが捷徑てある。個人が自覺して十八世紀末より盛んに自我を主義するに至つた時代を見るに、人々利己を專一とするが爲め社交性公共心の衰退を來たしはせぬかと云ふ虞があつた、實際一時は反動として此の如き傾向が往々現はれた。當時の學者は利己心を只一の基本として社會組織を說明する者が多かつた。然るに社會の進步するに從つて社交性は益發達し、共同生活は益親厚となり、個人の自意識は益強大となると同時に、國家主義や國家社會主義と云ふ團體思想が益盛んとなつて來たのてある。世人は往々自我の主張を以て利己排他と同視するの傾がある、又一時は反動的に此の如き事實も現はれたには相違ないが、大體より見れば自我の主義は是まて無意識に盲從した時勢後れの偏狹な風俗慣習や制度に反抗すると同時に、一面には獨立の判斷を以て即ち意識的に新なる共同生活を形成せんとする

の要求に外ならぬ、決して共同生活の排斥てなく、却つて益之を完備せんとするのてある。元來社會の安寧秩序の整はぬ時代には人類は鞏固な家族制度や同業組合や封建的地方團體を造つて生活するものてあるが、大々的共同生活の機關が完全し、安寧秩序が確立するに至れば、玆に自由の要求が起るのてある、故に自由の要求は大團體的生活が既に頗る進歩したと云ふことを前提として起るもので、又歸する所は更に一層鞏固圓滿な共同生活を要求するに外ならぬのてある。

國民的又は民族的自我の主張も予輩の見る所に由れ**ば個人の自我主張と性質を同ふ**するものてある。今日**支那の利權回收運動や印度の獨立運動を見ると往々排**他孤立の要求の如く見へるが、之は一時の反動に過ぎぬ。彼等の眞に要求する所は排他にあらずして對等交通てある、故に彼等の要求が相當に認容せらるゝ以上は、彼等は自己の發展に好都合な事柄をば極力外部より吸收するに至ること、恰も我國が極端な攘夷より直ちに開國進取の方針に移つたと同一となるてあらう。

彼等は只だ是迄の如く一から十まて無差別に外部の勢力を甘受することを拒むのみてある。彼等の自我主張は畢竟進歩發展を欲するから起つたのてある、然らば保守退嬰を來たす所の排外孤立は決して彼等の眞に要求する所てないことは明かてある。例へば輓近世界の後進國は何れも自由貿易政策を抛て保護主義に移りつゝあるが、此保護主義は決して排他孤立てはない、其證據には世界の貿易額は之が爲に減少せず却つて年々偉大の增加を爲しつゝある。尚ほ今日弱小民族各獨立を要求するに至つたのは一面より見れば世界各國民の間に平和關係が成立した結果と云ふことが出來る、**若し**國際關係が昔日の如く亂麻の有樣てあつたならば**弱小民族は**只管ら强國に依賴して自衛せねばならぬ、**然るに十九世紀に入りて次**第に國際關係が平穩になり、曾て貿易國民は同時に海賊國民を兼ね、右手に劍を提げ片手に商品を携へて海上を横行したと云ふ樣なことは全く止み、十九世紀の中葉から確固たる通商條約も出來、國際法も益完全有効のものとなり、國際

的仲裁制度までも漸々發達するに至つた結果、言ひ換れば各民族の共同生活が大に進歩した結果初めて弱小民族も頭を擡げることが出來る様になつたのである。

此の如く人種的感情の勃興は各民族が互に他を同化せんとするの努力である、特に强大民族に對して弱小又は後進民族の對等交通の要求てある。而て各民族其固有の特色を發揮して益親密なる交通生活を營むとゝなれば、世界各國の文明は結局非常に複雜にして圓滿なものとならねばならぬ。古代に在らば希臘主義や羅馬主義が世界を獨占したから、其文明は基礎が頗る偏狹てあつて永續することが出來なかつた。中世の文明は之に比すれば大に複雜てあつたけれども、尙ほ大體は希臘羅馬主義と基督敎主義とが全力を有して居た。近世に入つても或は佛蘭西或は英吉利が世界を獨占せんとしたけれども、今日は最早や一二先進國の文明が世界を獨占することは全く不能となつた。是れ恰も各國に於て貴族階級の制度が先づ倒れ、今又有產者階級の制度も次第に崩壞しつゝあると同様てある。而して各民族互に他の長所を採て調和共同するに至れば人類の將來は畢竟世界統一國の形に採るてあらう。然し此統一合同は舊時の學者の往々に信じた如く國民民族を眼中に置かず、一足飛びに個人の結合に由て成るものてはない、個人の發達は主として個々の國民民族の内に於て行はれ、更に國民民族が互に交通する結果個人の上に變化を及ぼして來るのである。

四

人類の遠き未來は前述の如く世界的大合同に歸するとしても、近き將來に於ては顯著なる特性を有し且つ相當の勢力を有する民族は進歩するに從つて各或程度に於ける獨立自治の團體生活を要求するに至るてあらう。無論世界の大勢は小國の獨立を益困難且つ不利とならしめつゝあるから、弱小民族が全く獨立する場合は少なかるべきも、相當の自治を要求するに至ろは必然てある。果して然らば我が臺灣と韓國とが將來如何に成り行くべきやと云ふことは緊要なる研究問題てある。此同題に付ては他日更に大方の敎を乞ふ積り

るが、茲に一言此兩地の特質に付て述べて置きたい。先づ臺灣は本來國家思想の甚だ薄弱なる支那人の建設した比較的新しい殖民地であるから問題の解決は容易なるが如く見へる。然し乍ら第一臺灣は人口の密度が相當に高く、給料の低き勞働者の供給は澤山にあるから、此上更に生活程度の高き日本人の多數に入り込む餘地は甚だ少なきのみならず、元來臺灣は熱帶植民地の性質を有して居るから之を我國民の移植地とすることは甚だ困難である、從つて台灣の土民を同化するは決して容易の業でない、加ふるに土民の本土たる支那の有形無形に著しき發展を爲すことは大に土民を刺戟して其自覺を喚起するを免れぬ。左れば世人が往々臺灣の財政が獨立し得るに至つた丈けを既に根本問題は解決し了つた如く信ずるのは大なる誤解である。次に韓國も臺灣同樣人口の密度は頗る高くして多數の民口を移植するの餘地を存せざるのみならず、臺灣の如き劣な出稼地ではなくて多年の國家的生活の歷史を有して居る、故に之を同化することは殆んど望まれない樣に見へる。尤も現今の排日運動の中心は一種の貴族階級たる兩班の間に在るから、之に處するは比較的容易であるが、韓國に於ける我文明的政治の結果一般民衆が自覺するに至ると眞に恐るべき勢力となるであらう。尤も一面には韓國は臺灣の如き熱帶地でなくて我國民の永住し得べき氣候風土を有し、又我國民の一日も缺くを得ざる日本米に品質の最も近き米を產出する土地である、韓國語は臺灣土民の支那語よりも我國語系統に近いのは勿論、韓人は我國民と同じく重なる詞には漢字を使用して居る。總て韓人の風俗慣習思想は支那人の夫れよりも遙かに我國に近い。我國民が支那人と雜婚するよりも韓人と雜婚することは遙かに容易である。故に植民地の同化政策就中民口の移植は政治上から見れば韓國は臺灣よりも困難であるが、社會上から見れば容易な點がある。此點は苟くも我國が韓國を擲つことを得ざる以上は極力利用せねばならぬ所である。（完）

日本に於ける港灣の盛衰

松山忠次郎

日露戰爭以來世界の大動脈が變り、殊に東洋に於ける大道路には非常の變化を來たし、其れが爲めに日本の港灣にも段々盛衰を來たすことになつた。道路が變れば玄關が變るのは當然であるから此變化は止むを得ぬ事である。

先づ南の方からいうて、最も寂れた港は長崎である。これは實は日露戰爭前から其傾向があつた。日露戰爭前露西亞は東洋艦隊を太平洋に置いたが、然し適當な根據地がなかつた。浦鹽に根據地はあつたが、冬、氷が張るし、殊に當初は碎氷船もなかつたから、旁々不便で、冬になれば長崎に來て碇泊して居た。之が從來長崎を賑はした一つの原因、寧ろ其主もなる原因といつても差支なかつた。處が露西亞は其後旅順口を手に入れた。旅順口は浦鹽と違つて冬氷が張らぬ。そこで軍艦が始終そこに居ることが出來て餘り長崎に來る必要がなくなつて了つた。已に此時から長崎が少し衰へる傾向があつたが、其後日露戰爭の爲めに露西亞の艦隊が全滅し、偶にも長崎に來る機會が無くなつた。其他にも原因はあらうが、之が長崎を衰微せしめた主因である。

之に反して門司、神戸は日露戰爭以來段々繁昌して來た。今迄なかつた西比利亞鐵道から南滿洲鐵道を經て大連に出る歐亞の新道路が出來た爲め、神戸から門司を經て大連に行く貨物乘客が大變に殖えた。又大連から門司、神戸に來るものも大變に殖えた。のみならず朝鮮が開け滿洲が開けるに從つて神戸門司の兩港は益々繁昌する。之は確かに日露戰爭の影響である。

それから日露戰爭後に特に發達した港は敦賀で

る。日本の北海岸には從來から良い港灣がないので、商港としては新潟が第一に指を屈せられて居た。新潟は日本五港の一てあつて最も古き港てある。處が日露戰爭以來新潟の方は一向重要の度を失ひ、敦賀が最も必要な玄關口となつた。之は西比利亞鐵道の開けた結果日本から西比利亞鐵道を經て歐羅巴に往來する玄關口になつたからてある。そして西比利亞鐵道の最も開けたのは、日露戰爭の爲めに露西亞がウンと金を注ぎ込んだ結果てあることはいふまでもない。

それから北の方へ行て、函館も日本五港の一てあつて我國の最も古き港の一てある。處が其進歩の度は割合に著明てなくして其隣りの小樽が比較的餘計に進歩するやうになつた。而して特に小樽の進歩するやうになつたはの日露戰爭以來てある。日露戰爭の結果として樺太半分はいふまでもなく我領地となつた。それから露西亞の沿海州から北の方の沿岸の漁業權は新らしく日本人の手に歸した。それが爲めに日本海の北の方に於ける漁業は最近數年に於て非常の發達をなした。而して其漁業の策源地は函館にあらずして小樽てある。小樽繁華の主因は即ち其れてある。要するに小樽も亦日露戰爭後段々盛になつて來たのてある。

日露戰爭の結果、西比利亞鐵道が開け滿洲が開けるに從うて日本の玄關口に以上述べた如き變化を來たして居るのてある。

處が今後五六年以內に於て更らに今一つの變化を來たすべき理由がある。其れはパナマ運河の開通てある。パナマ運河の工事は餘程困難なものてあることは誰も知つてる通りてあるが、亞米利加は如何なる困難にも打勝つて開鑿することに力を盡して居る。又今日までの行掛上亞米利加はどうしても面目にかけて之を開通しなくてはならなくなつて居る。處て亞米利加の委員の報告によれば千八百十五年即ち今から五年後に完成するといふことになつて居る。さうすれば更らに世界の新道がこゝに出來るのてある。日本から東に向つて行てパナマ運河を經て、直接にニューヨーク、ボストンに船を着けることもあらうし、又英米獨諸國の太西

洋にある船が、直ちに日本支那に向て發着することもあらう。さうすれば更らに日本の玄關即ち港灣に盛衰を來たすてあらうと思ふ。之が爲めに發達する所はウンと發達し、又寂びれるやうな處が出來ないとも限らない。これは各玄關口に住まうて居る人民の今から注意し置くべき處である。

社會問題と人類の進歩

法學博士　鹽澤昌貞

社會問題が十九世紀以來の大問題て、現時歐洲諸國が此問題の解決に苦みつゝある事は何人も知り居る事實てある。歐洲大陸諸國は勿論、元來保守的な英國さへも、此問題の解決に就いて目下頗る困難の狀態に迫つて居る、內閣の運命迄も之が爲に動搖し、議會の解散にも之が與つて力がある、豫算問題の如きも其內容に於ては社會問題解決の方針を示せる財政案が重要なる位置を占めて居るし、又養老年金制度の實行の爲に財政上にも大なる負擔を增したのみならず、最近には失業問題解決の一策として勞働交換制をも實行すると云ふ樣な次第て、社會問題が目下政治上の大問題となつて居る事は何人も承知して居るのてある。

我國ても早晚此問題が發生せぬかと憂ふる人は少くない、或は此問題に對して頗る恐怖心を抱き、恰かも大革命ても發するかの如くに之を忌み嫌ひ飽まて之を抑壓せんとの考を持つゝがある、又此問題を自然の成

行と見做して適當の方針により圓滿なる解決を見んと欲する人も尠くない、兎に角社會問題の發生に對しては多少の憂慮を抱かざるものないといふも宜い。

社會問題はつまり經濟上社會に於ける貧富の不調和、財物分配の不平均、又は社會多數者の生活難より生ずる問題であるから、概して物質的生活問題であつて、頗る黯澹たる人生の狀態を暗示して居るのである、從つて社會問題といへば、多數人民が生活の困難に陷り悲酸なる境遇に沈淪し居るを聯想せしむるものである、それ故社會問題の發生といふ事は一面人類の進步が停止して社會が墮落に陷るといふ樣な感を抱かせる、即ち社會問題といへば人類の將來に就いて頗る悲觀を意味する趣がある。

此社會問題の暗示する悲觀的觀念は、從來此問題に關する思想の中に就いて見ても、大抵それを含んで居らぬものは少い、彼の共產主義とか無政府主義とか、又社會主義とかいふ樣なものを主張する論者の思想を覆つて見ても、皆社會問題の發生に對しては悲觀思想を示して居る。彼のマルクスの唯物史觀より見ても、物質的生活が現在の制度の下に於ては甚だ當を得て居らぬ、多數人民が財物分配の不平等から悲慘なる運命に陷つて居る、現社會の組織と秩序とを根本的に打破して新社會を組織するに非ざれば、其弊を矯正することが出來ぬといふ樣に觀察して居る、去りながら單に唯物的眼光を以て見るのでは假令理想的社會組織がマルクス等の主張する樣に自然的革命により一時發現するにしても各人の能力には差異があるから、結局純粹の平等なるものは望まれぬ、隨て現在は勿論將來に對しても如何しても悲觀せざるを得なくなる。又無政府主義や、共產主義も現社會に對する悲觀的見解より割り出した理想である。從つて此類の見解を取る人々は社會問題の發生に對して等しく悲觀思想を示して居るを見るのである。

又顧つて英國の正統學派「クラシカルスクール」に屬する學想を見ても、矢張り社會問題の發生に就いては悲觀的觀念の橫溢を見る、彼のマルサスの人口論の

如きは勿論、リカードなり、ミルなりの社會の將來に對する觀察には、常に一種の悲觀的憂惧の存することは今特に詳說の要もない、即ち人類の將來に於て恐る可き社會上の困難の發生を豫想して居るのである、概して「クラシカルスクール」の學想は、個人的努力によつて人類の進步を期するといふ主義てあるが、社會問題の發生に就いては、頗る人類の將來を恐れる趣がある。

此の如く各方面の觀察を見るに從來社會問題の發生に就いては概して悲觀的の思想を示さぬものは少い、勿論社會問頭の發生といへば、人類の社會生活上に於ける暗黑面の存在を示すことだから、之に對して悲觀的思想を抱くのも敢て謂はれのない事てはないが、更に翻つて社會全體から動的に觀察すると、それは人類の進步向上を暗示するものといつてよからうと思はれる、又經濟上から見れば、それは經濟倫理思想の發展を促進するもので、經濟に關する思想の向上を來す傾向を有すといつて宜からうと信ずる、即ち社會問題の發生は一方には社會に於ける暗黑面の存在を意味するけれども、他方には光明的進步を示すものといつて不當てなからうと思はれる。其理由を少し述べて見よう。

扨て社會問題の中心たる多數の下層階級の生活狀態如何に就ては、先づ往時と今日とを比較して實際果して進步し居るか、又墮落して居るか、將た又停滯して毫も變化なきかを考へねばならぬが、概していへば下層階級と雖も今日は往時に比して進步し居ることは容易に判斷し得ることと思ふ。生活狀態の變遷に就いても、自ら絕對的進步と比較的進步との區別がある、即ち往時と今日とに於ける社會一階級丈けの生活狀態を比較し見たならば、往時よりも今日の方が遙に優つて居ると云ふことがあらう、是は其階級丈けの絕對的進步を示すものだ、けれども他の階級の往時より今日に至る進步と比較して見たならば生活上に於ける福利增進の度が同一てないと云ふともあらう、是れ即ち比較的進步の問題てあるが、兎に角絕對的に觀察すれば

層社會の生活程度も一般文明の發達と共に上進して居るとは見易い譯てある。即ち往時の衣食住と今日の衣食住とを比較して見ても分る、昔は贅澤品とせられたものが、今日ては必要品となつて居る、極端な例てはあるけれども、亞弗利加とか南洋とか文明の程度の低い社會に於て最高の位置を占むるものと、文明社會に於て下層の階級に屬するものとの生活狀態を比較すると、後者の方が却つて前者より高しといふことは誰れも知つて居ると思ふ。勿論生活狀態は文明の進步と共に一般に進步するものてあつて社會の上下に通ずる一般の現象てある。

歐洲などても百年前の生活狀態と今日のそれとを比較して見たら、非常なる懸隔がある、これに就いて私の想ひ起すことは彼の獨逸のポッツダムに在るフリードリヒ大王の建てたサンスーシ宮殿と、目下皇帝の居らるゝ新宮殿とてある、同一地域に在るので比較が容易に出來るがサンスーシの宮殿の出來た時代は佛國の文化が歐洲を風靡した頃て、其宮殿は凡て佛國のヴェルサイエの宮殿に倣つたといふ事だが、今日それに入つて見ると誠に質素なものてある、之を新宮殿に入つて見た處と比較すると非常の差異がある。

英國などて見ても亦左樣てある、ヸクトリア女皇の幼少の際に住まれたといふケンシントンの宮殿に行つて女皇の幼時の御翫弄品及び其室々の狀態等から察するに頗る質素のものてある、吾人の腦裡に平生畫いて居つた狀態とは大に異なつて居る、勿論儉素の生活を奬勵し、一般國民を率ふるといふ意味も含まれて居るか知らぬけれど、兎に角今日の狀態と比べては非常の差違のある事を感ぜざるを得ぬ。

一般上流又は中流社會に於ける生活狀態の上進の著しい事は說く迄もないが、下層社會と雖も一般に生活狀態が進步して居るといつて宜い、我國ても舊幕時代の一般人民の慾望の程度は今日に比較し見れば餘程低いものてあつた、それ故絕對的の福利增進から見れば、今日下層階級に居るものにも餘り不平は言へぬ事と思ふ。唯比較的に言つて見れば、下層階級の生活狀態と

進歩と上層階級の生活狀態の進歩とに權衡が取れて居るか如何か、是れだけが問題である、一方の福利的增進が著しいに拘らず一方が遲々として居る、これが抑も社會問題發生の原因と思ふ。換言すれば生活狀態の不平衡、之が其根本原因だと稱して宜いと思ふ。而して此根本原因によつて生ずる運動を虛心平氣に觀察すれば、其中に自ら人類向上の傾向が現はれ居るを感ぜざるを得ぬのである。

比較的に見たる福利增進の不平衡が社會問題の發生を促すに至れるものとして、扨て上古より現時に至る一般の大勢を觀察し見るに、往時は社會階級組織の結果として、社會の多數の人が自家の利益を維持し、又增進するといふ運動を發するの機會がなかつたのである、即ち往時の社會では、少數の上流階級が社會の支配者、文化の維持者、代表者であつた、否此等上層階級が單に社會の文化に對する形而上の代表者であるのみてはなく、同時に又物質的福利をも壟斷した、財物は彼等が獨占し、富力は彼等が掌握した、而して財物を直接に生產する階級は從屬的位置に居り、完全なる社會的人格を有して居らなかつたのである、即ち頗る可憐の境遇に居つて皆之に甘んじて居たのだ、勿論貧富の衝突は昔から往々免れぬ事で、希臘でもその爲に階級衝突は折々起り、プラトーをして遂に彼の理想的社會を示したレパブリカを著さしめた程である、又羅馬でもパトリシアンとプレビヤンとの爭の如き特に顯著なるものである、支那でも兼併を制するといふ事は昔から政治の方針として採り來つた政策なのだ、左樣な譯だから貧富の懸隔は古來無くはないのだけれども、只それ上來述べたる如く、社會の下層階級は勢力を有して居らなかつた爲に、何等自身の地位を改善する運動は起らないのであつた。

日本でも封建時代に於ては諸侯又は武士が社會の文化を維持し代表し居り、同時に又富力をも占有して居つた、即ち社會組織上の關係から俸祿を有し富力を獨占し居つたといふて宜いのである。此の如く富の生產者は却つて從屬的位置に居り、隨て財物の重要に關す

層社會の生活程度も一般文明の發達と共に上進して居るとは見易い譯である。即ち往時の衣食住と今日の衣食住とを比較して見ても分る、昔は贅澤品とせられたものが、今日では必要品となつて居る、極端な例ではあるけれども、亞弗利加とか南洋とか文明の程度の低い社會に於て最高の位置を占むるものと、文明社會に於て下層の階級に屬するものとの生活狀態を比較すると、後者の方が却つて前者より高しといふことは誰れも知つて居ると思ふ。勿論生活狀態は文明の進歩と共に、一般に進歩するものであつて社會の上下に通ずる一般の現象である。

歐洲などでも百年前の生活狀態と今日のそれとを比較して見たら、非常なる懸隔がある、これに就いて私の想ひ起すことは彼の獨逸のポッツダムに在るフリードリヒ大王の建てたサンスーシ宮殿と、目下皇帝の居らるゝ新宮殿とである、同一地域に在るので比較が容易に出來るがサンスーシの宮殿の出來た時代は佛國の文化が歐洲を風靡した頃で、其宮殿は凡て佛國のヴェルサイユの宮殿に倣つたといふ事だが、今日それに入つて見ると誠に質素なものである、之を新宮殿に入つて見た處と比較すると非常の差異がある。

英國などで見ても亦左樣である、ヴィクトリア女皇の幼少の際に住まれたといふケンシントンの宮殿に行つて女皇の幼時の御翫弄品及び其室々の狀態等から察するに頗る質素のものである、吾人の腦裡に平生畫いて居つた狀態とは大に異なつて居る、勿論儉素の生活を奬勵し、一般國民を率ふるといふ意味も含まれて居るか知らぬけれど、兎に角今日の狀態と比べては非常の差違のある事を感ぜざるを得ぬ。

一般上流又は中流社會に於ける生活狀態の上進の著しい事は説く迄もないが、下層社會と雖も一般に生活狀態が進歩して居るといつて宜い、我國でも舊幕時代の一般人民の慾望の程度は今日に比較し見れば餘程低いものであつた、それ故絕對的の福利增進から見れば、今日下層階級に居るものにも餘り不平は言へぬ事と思ふ。唯比較的に言つて見れば、下層階級の生活狀態と

進步と上層階級の生活狀態の進步とに權衡が取れて居るか如何か、是れだけが問題である、一方の福利的增進が著しいに拘らず一方が遲々として居る、これが抑も社會問題發生の原因と思ふ。換言すれば生活狀態の不平衡、之が其根本原因だと稱して宜いと思ふ。而して此根本原因によつて生ずる運動を虛心平氣に觀察すれば、其中に自ら人類向上の傾向が現はれ居るを感ぜざるを得ぬのである。

比較的に見たる福利增進の不平衡が社會問題の發生を促すに至れるものとして、扨て上古より現時に至る一般の大勢を觀察し見るに、往時は社會階級組織の結果として、社會の多數の人が自家の利益を維持し、又增進するといふ運動を發するの機會がなかつたのである、即ち往時の社會では、少數の上流階級が社會の支配者、文化の維持者、代表者であつた、否此等上層階級が單に社會の文化に對する形而上の代表者であるのみではなく、同時に又物質的福利をも壟斷した、財物は彼等が獨占し、富力は彼等が掌握した、而して財物を直接に生產する階級は從屬的位置に居り、完全なる社會的人格を有して居らなかつたのである、即ち頗る可憐の境遇に居つて皆之に甘んじて居たのだ、勿論貧富の衝突は昔から往々免れぬ事で、希臘でもその爲に階級衝突は折々起り、プラトーをして遂に彼の理想的社會を示したレパブリカを著さしめた程である、又羅馬でもパトリシアンとプレビヤンとの爭の如き特に顯著なるものである、支那でも兼併を制するといふ事は昔から政治の方針として採り來つた政策なのだ、左樣な譯だから貧富の懸隔は古來無くはないのだけれども、只それ上來述べたる如く、社會の下層階級は勢力を有して居らなかつた爲に、何等自身の地位を改善する運動は起らないのであつた。

日本でも封建時代に於ては諸侯又は武士が社會の文化を維持し代表し居り、同時に又富力をも占有して居つた、即ち社會組織上の關係から俸祿を有し富力を獨占し居つたといふて宜いのである。此の如く富の生產者は却つて從屬的位置に居り、隨て財物の重要に關す

る意識が發達せず、概して之を輕視する有樣であつた、然るに近世文明の發達と共に多數の下層階級の人民が從屬的位置から轉じて次第に平等的境遇に進んで來た、即ち政治上社會上に於ける平等の主義が實現し來り更に經濟上にも同樣な運動を起すに至つたもので、社會多數の人民が社會的人格に就いて十分なる自覺を爲し、其餘勢が此社會問題の發生を促すに至つたと稱して誤なからうと思ふ。

此の如く考へて見れば、近世に於ける社會問題の發生は一面に産業組織の變遷が原因をなし居るといふべきてあらうけれども、廣く解釋すれば下層に於ける人民の社會的人格を自覺するに至つたことが主要な原因てあると思ふ、**左れば諸多の社會問題が經濟上に發生するに就いては、先づ財物の性質に關する研究が自然に生ぜざるを得ぬ、即ち社會問題なるものは財物の分**配が果して當を得て居るや否やの問題である、換言すれば分配に關するジャステスの觀念が其骨子を爲して居るのである、故に社會問題の發生は第一には多數人民の人格的自覺の發生の結果であることを知らねばならぬ、第二にはそれに伴ひて財物の重要といふ事が一層緊切に認められ、而して財物の存在の意義をも明にせなければならぬ必要を促すものであると云はねばならぬ、社會問題なるものが財物の分配を中心として起れる以上は財物と人間との關係を一層明白にせねばならぬ事となつて來る、それ財物にして人類の用を爲す爲に存在するものとするに於ては、財物それ自身に倫理的關係が含まれて居らねばならぬ、即ち財物に倫理的職分が有せられなければならぬ事となる、若し然らずとするに於ては到底財物に關しても將た財物の分配に對しても正當の解釋は出來ぬ、兎もあれ此新傾向は**實際上經濟活動の上に於て既に分明に現れて居る事てある。**

例へば財物取得の方針に就いても往時と今日とを對照すると進化の跡が歷々として見られる、即ち競爭に就て觀察して見ても往時は頗る冷酷なる方法を以て行はれ自己をさへ益すれば他を如何に害しても構はぬと

いふ風があつた、弱肉强食の狀態であつた、所謂生物的競爭なるものが經濟上にも行はれたものだが、段々時移り世の進むに從ひ社會の法制によつて制限せられ、更に倫理思想の約束によつて制限せらるゝ事となつた、昔は經濟上の競爭に於て、人を欺て惡い品を賣り付ける或は胡魔化すといふ樣なことをしても商人の常として格別咎めもせなかつたが、今日では不正の方法は經濟上より排斥せられ、正當の競爭を爲すこととなつた、勿論今日に於ても決して完全ではないが不正の方法は一般に擯斥せらるゝこととなつた、即ち競爭上に於ける倫理標準の向上し居るのは歷史的事實である、競爭の實例だけを擧げても此通りであるが、其他の活動に就ても國家の法制により社會の制裁によつて倫理的範圍內に制限せらるゝといふ風を示して居る、又特に財物存在の意義からして消費の方針を向上せしむる結果を惹起して居る、即ち財物をば成るべく普く人類の用に供し社會の爲になる樣に利用する事になりつゝある、社會問題の發生は、大に消費の方針の向上を促進するものである、即ち近來文明諸國に於ける傾向であるが、富豪が全く利己的にのみ財產を消費せずして、成るべく普く人類社會の用を爲す樣に使用するとに注意し、或は慈善的設備をするとか、或は教育事業に投ずるとか、其他凡て社會公共の爲に私財を投ずる事が近來特に著しく目立つ。此傾向は一面に於て財物存在の職分が次第に認知せられ、財物をして人類社會の用に供せしめなければならぬといふ觀念が發生したによると同時に、又他の一面に於ては社會問題發生の結果として、財物を多く有する階級が漫に我慾を恣にし他の反抗心を挑發することをせぬ樣に勉むるといふ、一種消極的の感想が、又大に之を助長するに力あるものである、孰れにして見ても社會問題の發生によつて此消費方針の進化の促成せられる事だけは認めねばならぬ。

國家の經濟政策の如きも亦次第に同樣の傾向を示して居る、即ち獨占の事業に對する公營とか、或は其監督を愈よ嚴重にするとか、其他消費品の場合に就いて

も其販賣の不正を取締る事が嚴密になつて居る。即ち昨今新聞に見ゆる米屋の不正の桝を檢擧するといふ如きも要するに社會問題と關係を有することである、不正の桝を使ふるものは社會の下層の人民に對して非常な害を與ふるものだから、それを罰して社會の多數者の禍を除かんとするのである、尚ほ此種の事は國家の政策中に其例頗る多い事で、此の如き事にも皆社會問題の發生が與つて大に力あるものである。

斯く考へ來ると、社會問題の發生は一面に於て社會の多數者が社會の文化に關係すべき位置に進むを意味し、又一面に於て經濟上財物の倫理的意義が闡明せらるゝを意味する、斯くて社會問題の研究が益々進めば自ら財物の研究も根本的に進み來り、社會の健全なる進歩を導く樣になるのである、之に就いては夫の社會主義者の唱ふる唯物史觀では到底解決はし得ない、財物存在の目的に就いての倫理觀が進まなくては到底解決し得ない事である、而して社會問題の解決が進めば經濟上に於ける唯物史觀以上に倫理觀が進む事と思ふ、否之が進まなければ其問題の解決は到底出來ぬ事となる、されば社會問題の發生は一面には人生の黯憺たる方面を示し、社會の將來憂ふ可きを語る如くに見ゆるけれども、前述の如く社會全體より動的に考へて見れば社會問題の發生は寧ろ人類進歩の機運を示すものと云ふて宜しからうと思ふ、即ち社會の進歩を阻害する一種の病的現象ではなくして、却つて社會の健全なる發達の徴候である、之によつて社會に多少の動搖を來すことがあつたとしても、それは嬰兒の智慧熱の樣なものである、嬰兒が漸次に發育して智慧のつく頃には身體に一種の熱が生ずるが、それは智慧熱と稱する自然の現象で決して病的ではない、社會問題發生に伴ふ一種の動搖の如きは偶ま此種の智慧熱と見る可きであつて何等恐怖を値することはない、否却つて人類社會が健全に進みつゝある兆候を示すものとして樂觀して然るべきであると信ずる。(筆記校閲濟)

人心倦怠の徴候

石河幹明

今の日本の有様を見ると、倦んだといはうか、老いたといはうか、人氣が何となく沈んで滅入つて居るかの如く思はれる、例へば書畫骨董とか茶の湯とか謡曲とかいふものは面白いものでもあらう、又高尚なものでもあらう。けれども是等は何れかといへば老人隠居の暇な樂であつて、元氣旺盛なるべき青年などのやるべきものでない。然るに今の社會には一般に流行つて居る。老人も青年も一様にやつて居る。私共は餘り感心しない。又何でも古い事が流行る。何年祭、何十年祭とかいふ紀念祭が大變流行る。又新聞を見ると何某の追懐談とかいふやうなものが盛んに載つて居る。して見れば世間で之を歡迎して居るものと見える。古の英雄豪傑義人烈士の話といふやうなものは世の教ともなり立志談ともなるであらう。然し其話を見れば多くは維新前、いはゞ殺伐の世の中の事で、餘程血腥い話である。殺人盗賊——當時ではわるい事ではなかつたらうが——今日の教としてはどうかとも思はれる。此頃も櫻田の烈士の祭があつた。あれなどはどういふ必要があつたか私共には分らない。當時の日本政府は徳川幕府であつて、幕府は帝室の謀反者ではなく、法律的にいへば、政權を委任せられた當時の政府である。其政府の執政者たる人を殺すのは、いはゞ法律を犯し紀綱を紊つたものである。其やつた事には同情を表すべき事もあるが、其れを今日祭る必要があるかどうか私共には分らない。却て世の風敎に餘り喜ばしからぬ影響がないかを危むのである。

兎角人間は年を取ると昔話をする。昔取つた杵柄などゝいふたり、女であれば鶯鳴かせた事もあるなどゝいふ。昔が慕はしく戀ひしいものと見える。何年祭といふ紀念祭の流行るのも畢竟當時の人が、當時の感じ

も其販賣の不正を取締る事が嚴密になつて居る。即ち昨今新聞に見ゆる米屋の不正の桝を檢擧するといふ如きも要するに社會問題と關係を有することである、不正の桝を使ふるものは社會の下層の人民に對して非常な害を與ふるものだから、それを罰して社會の多數者の禍を除かんとするのである、尙ほ此種の事は國家の政策中に其例頗る多い事で、此の如き事にも皆社會問題の發生が與つて大に力あるものである。

斯く考へ來ると、社會問題の發生は一面に於て社會の多數者が社會の文化に關係すべき位置に進むを意味し、又一面に於て經濟上財物の倫理的意義が闡明せらるゝを意味する、**斯くて社會問題の研究が益々進めば自ら財物の研究も根本的に進み來り、社會の健全なる進歩を導く樣になるのである**、之に就いては夫の社會主義者の唱ふる唯物史觀では到底解決はし得ない、財物存在の目的に就いての倫理觀が進まなくては到底解決し得ない事である、而して社會問題の解決が進めば經濟上に於ける唯物史觀以上に倫理觀が進む事と思ふ、否之が進まなければ其問題の解決は到底出來ぬ事となる、されば社會問題の發生は一面には人生の黯憺たる方面を示し、社會の將來憂ふ可きを語る如くに見ゆるけれども、前述の如く社會全體より動的に考へて見れば社會問題の發生は寧ろ人類進步の機運を示すものと云ふて宜しからうと思ふ、即ち社會の進步を阻害する一種の病的現象ではなくして、却つて社會の健全なる發達の徵候である、之によつて社會に多少の動搖を來すことがあつたとしても、それは嬰兒の智慧熱の樣なものである、嬰兒が漸次に發育して智慧のつく頃には身體に一種の熱が生ずるが、それは智慧熱と稱する自然の現象で決して病的ではない、社會問題發生に**伴ふ一種の動搖の如きは偶ま此種の智慧熱と見る可きであつて何等恐怖を値することはない、否却つて人類**社會が健全に進みつゝある兆候を示すものとして樂觀して然るべきであると信ずる。（筆記校閱濟）

人心倦怠の徴候

石河幹明

今の日本の有様を見ると、倦んだといはうか、老いたといはうか、人氣が何となく沈んで滅入つて居るかの如く思はれる、例へば書畫骨董とか茶の湯とか謡曲とかいふものは面白いものであらう、又高尚なものであらう。けれども是等は何れかといへば老人隠居の暇な樂であつて、元氣旺盛なるべき青年などのやるべきものでない。然るに今の社會には一般に流行つて居る。老人も青年も一樣にやつて居る。私共は餘り感心しない。又何でも古い事が流行る。何年祭、何十年祭とかいふ紀念祭が大變流行る。又新聞を見ると何某の追懷談とかいふやうなものが盛んに載つて居る。して見れば世間で之を歡迎して居るものと見える。古の英雄豪傑義人烈士の話といふやうなものは世の教ともなり立志談ともなるであらう。然し其話を見れば多くは維新前、いはゞ殺伐の世の中の事で、餘程血腥い話である。殺人盜賊——當時ではわるい事ではなかつたらうが——今日の教としてはどうかとも思はれる。此頃も櫻田の烈士の祭があつた。あれなどはどういふ必要があつたか私共には分らない。當時の日本政府は徳川幕府であつて、幕府は帝室の謀反者ではなく、法律的にいへば、政權を委任せられた當時の政府である。其政府の執政者たる人を殺すのは、いはゞ法律を犯し紀綱を紊つたものである。其やつた事には同情を表すべき事もあるが、其れを今日祭る必要があるかどうか私共には分らない。却て世の風教に餘り喜ばしからぬ影響がないかを危むのである。

兎角人間は年を取ると昔話をする。昔取つた杵柄などゝいふたり、女であれば鶯鳴かせた事もあるなどゝいふ。昔が慕はしく戀ひしいものと見える。何年祭といふ紀念祭の流行るのも畢竟當時の人が、當時の感じ

を深くし若くは新らしくするためにやるのであつて、詰り昔の事を憶ひ出すといふに過ぎない。憶ひ出す昔の事の中にはエライ事も面白い事もあらうからそれはそれてよい。誰しもやる事である。我々もまだ若いからやらぬが、若し年をとつたら矢張りやるかも知れない。ヤレ日清戰爭はどうてあつた、日露戰爭はエラかつたといふだらう。やる人に罪はない。然し世間一般に之を歡迎するのはどういふ譯か、私共には甚だ感服が出來ない。

今日の日本は立國以來未曾有の事をなしつゝある。維新の革新はエライ事に相違ないが、今日はそれに何十倍と輪をかけた事をなしつゝある。國民の責任もそれ丈け非常に重きを加へて居る。其未曾有の國運を負ふ責任の重き今日の國民が何を苦しんて昔語りを歡迎し、昔の英雄傑士の紀念や追憶に腐心して居るのか、當時の人が若し地下に知るあらば、恐らくは今日の事を吾々から聞きたいのだらうと思ふ。我々は實に馬鹿な事をやつた。我々のやつた事は今日の人に比べると實に殆んど何もして居ないと同じだといふて、今日の事を聞きたがる事だらうと思ふ。それに昔の事を歡迎し、昔語りに日をつぶすのはどういふ心か私共には分らない。

其當時の人が昔の事を思うてお祭りをするといふのは前にもいつた如く人情の自然であるから構はぬが、世間一般に之を歡迎するのは矢張り人心の倦んだ老いた證據てないかと思はれる。國が益々發展すべき時に國民が倦み且つ老ゆるは心細き譯である。故に今日の國民は、どうか昔の事を構はず又聞きたがらず、これから先きの事を思ひ考ふるやうにして貰ひたい。獨り日本のみならず、何處の國でも盛衰消長は免れざる數てあつて、人氣が沈んだからとて、どこ／＼までも沈んて行くと限らず、又其中に立直ることもあるから、これは一時の現象かも知れぬが、今日の人心はいくらか倦んだ、老いたといふ風があるから、餘程戒めざるべからざることゝ思ふ。昔話の流行、紀念祭の流行について感じた所を一寸お話したのである。

朝鮮よりもドレッドノート艦を要す

竹越與三郎

政府は朝鮮を併呑する決心を定めたと云ふ風說がある、いや統監が之に反對するが爲に容易に行はれざるべしと云ふ說もある、否統監も亦之に同意したと云ふ風說もある、而して朝野ともに朝鮮併呑に關しては一人異論を放つ者が無いと云ふ有樣である、故に今日若し投票を以て此事の是非得失を國民に問へば、朝野共に絕對の多數を以て此事に贊成するのであらうと思はるゝのである、併ながら朝野擧つて贊同すること必しも是にあらず其事また必しも得策にあらず、朝鮮は今已に我掌中にある。其兵權は旣に我が手中にあり、司法權は我が手中にあり、財政權は我が手中にあり、而して警察權も亦我が手中にあり、餘す所は燕雀の君臣自から大なりとする、所謂朝廷の衣冠文禮に過ぎぬのである、然らば斯の如き朝鮮を併呑すると云ふことは恰も小兒の腕を捻るが如きもので、日本國民は敢て氣を熾んにして論ずる程の問題でもない、斯の如き位地に立つた朝鮮は恰も旣に熟しかけた果物の如きものて、人力を待たずして天自から之を落す時は遠いことてはあるまいと思ふ、然るに朝野張膽明目して此事を決行せなければならぬと息卷くに至つては、余は陰かに之を冷笑するの情禁ずべからざるものがある、而して一人として此小兒の腕を捻るが如き下らぬ事より我が國家の財政上に及ぼす非常なる結果を論ずる者の無いのは余の深く嘆息に堪へざる所である。

桂侯は素より功名に急なる人て、己の手によりて朝鮮を併呑したりと云ふが如きことを天下に宣言したいのは政治家としてあり勝なる弱點である、併ながら朝野の聰慧なる識者が之に向つて公々然として注意若く

は警告を與へるの勇氣ある者がないと云ふことは實に賴甲斐なき次第である、若し此事が國家に取つて不利であるとすれば、此批評は當然政府の反對黨に立つ政友會より出てねばならぬことであるが、政友會內閣の前大臣たる林董伯の如きは最も熱心なる併呑論者であると云ふことを新聞紙上で見るに至つては、更らに驚くべき事である、今日朝鮮を併呑すると云ふことは、一人の功名の爲に天下其禍を受くると云ふものである、抑々此問題に就て余が批評したること一再にあらず、此時に當つて人々余に對して何故に朝鮮を併呑することが惡るいかと云ふことを問ふ人があつた。余は常に此人々に問ふのである、何故に朝鮮は併呑せざるべからざるか、若し之を併呑せざるべからざるものであるならば、桂侯は露國と交戰中に兵隊が朝鮮に充滿して居る最中に於て、何故に之を斷行せざりしかてある、當時我が國家露國と戰つて列國の向背を顧みるの遑ない時て、朝鮮は所謂弓に矢を番へた如きもので、之を取るも之を亡ぼすも之を立てるも、勢ひの命ずる所に從つて一向差支ない時であつた、然るに桂侯は當時之を亡ぼさずして之を保護國とし、其外交權を奪ふに止めたと云ふことは、余は密かに桂侯の識見を嘆美した一人であつた、流石に三千年來の歷史ある國を亡ぼさず、僅に其外交權を奪つて其君臣をして夜郎自大の心を滿足せしめて、我が政治を輔けしめる手段を取つたのは老練なる遣り方であると思つて居つた、然るに今日突然として之を亡ぼさなければならぬと云ふことは果して如何なる理由であるか、其兵權は我が手中に在り、財政權は我が手中にあり、司法權は我が手中に在り、而して警察權すらも我が手中に在り、餘す所果して何物かある、僅に王室及各大臣の名目あるのみである、之を亡ぼして果して我が國家に何等の利益があるか、是れ朝鮮を亡ぼしたりと云ふ名分を桂侯に取らんとするに過ぎざることであつて、其小功名に汲々たるは尙ほ朝鮮の君主が自から君主の名分を樂しむと大した差異は無いものであらうと思ふ。

人或は朝鮮今日の叛亂を以て、統監制度の罪である

と言ふ者があるが、余は之に同意することが出來ぬ。統監政治にして此叛亂を押へることが出來ざるならば、朝鮮を亡ぼして之を總督政治の下に置くも、其叛亂は益々大なるのみである。要するに罪は制度に非ずして、此制度を運用する政術の得失如何である。若し統監府が至大の權力を有ち、文武の力に依て而して尚ほ此叛亂を押へることが出來ざるなれば、之を總督の治下に置て兵隊を增すこと數萬人に至るも、叛亂は決して絶ゆる時がないであらうと思ふ。恐らくは其王室の廢せられ、其國命の革まると同時に叛亂は四方に擴がつて、我國は數年の間奔命に勞することであらうと思ふ。而して之に依て我が國家果して何の利する所があるかと言へば、余は斷言す、唯財政の困難を增加するのみである。凡そ我國が今朝鮮に費して居る所は每年一千三四百萬圓である。恐らくは王室を廢し朝鮮政府を廢し、我が總督自から直接政治を行ふ曉には、之に加へるに三千萬圓、即ち前後合せて四千五百萬圓內外の金は我國より朝鮮に注込まねばならぬことであらうと思ふ。我國が臺灣を取つたは明治二十九年であつて、此三百萬人の民を治める爲に最初の年は七百萬圓を注入し、次の年は六百萬圓を注入し、次の年は五百萬圓を注入し、爾後相次ぐ十年にして漸く其財政は獨立することが出來たのである。臺灣は世界に稀なる地味の良き天產に富んだ國であつて、幸ひに又當局其人を得た爲に十年にして漸く母國から之を補助することが止んだのであるが、三百萬人の民に前後三千萬圓の金を注入して居るのである、然らば此二千萬人の朝鮮に對して直接政治を行はんとすれば恐くは四千五百萬圓の金を十年位。即ち四億萬圓より五億萬圓の金を朝鮮に注入せねばならぬことであらうと思ふ。僅に朝鮮の王室を廢して我が總督が政治を行ふと云ふ虛名を得るが爲に、國家は四億五億の負擔をせねばならと云ふことは果して得策なりや否。此の如き明白なる道理を言ふ人のなきは嘆息すべき限である。

凡そ朝鮮の如き旣に我が殺中に落ちた國を論ずる時に當つてや、氣を負ふの論は無用のことである、小兒

の腕を捻るが如き此事業は、壯快であるとか勇氣であるとか云ふ必要はない、世界列國何人も朝鮮に指を指さんとする者は無い、朝鮮を活すも亡ぼすも恰も小兒の腕を捻るが如きものである、斯の如きことを行ふことは少しも勇氣でもなければ快事でもない。然るに斷々乎として行ふべしとか、强硬手段を取るべしとか云ふ極めて色彩に富んだ議論を試みる者があるが、斯の如きことは朝鮮に手を着ける時に言ふべき言葉であつて、斯の如き議論は今日は最早醜語のやうなものである、實際の問題は朝鮮を如何にして經營し、如何にして經濟的に發達せしむべきかである。

今や世界保護國の數少からずと雖も、保護國なる制度を案じ出したるは即ち佛蘭西人であつて、之をチュニジアに行つたのが最初であつた。而して斯の如き制度が同化主義、自由主義を尊崇する所のガンベッタ等に依て初めて唱へられたものであると云ふことは、我國の所謂斷々乎たる强硬論者の大に考ふべき事である。佛蘭西は既に久しくアルゼリアを取つて之を同化し之を州縣の如くし、之を佛蘭西の直接統治の下に置たのであるが、其結果はどうであつたかと言はゞ結局佛蘭西の患を爲すに過ぎなかつた。費用徒らに多くして成績擧らず、寧ろ佛蘭西の內政の患を爲すものであつた。此に於てかチュニヂアを取る時は之を直接政治の下に置て、併呑することは容易な事であつたに拘らず、之を保護國として僅に其外交權及大綱を取るに止まつて、其他の細目は之を土人の政治に一任した。而してガンベッタ等が斯の如き保護制度を案出した時、其議院に於て說明した言葉に、保護國制度は最も經濟なる制度である、何となれば直接政治は山を平らげ川を埋めて建築するのであるが、保護國は山も其儘、川も其儘、山に據り川に據つて家を建てるのであつて手數が掛からぬ、又斯の如き僻遠なる土地を取る時に當つては、其歷史を重んずるの必要があるから、敢て總てのものを直接に治める必要はないと云ふことを議院に說明したのであるが、爾來數十年我國が朝鮮を取る時に當つて、之を併呑せずして之を保護國としたと云ふて

とは、余は若し之を眞に考へてやつたものならば經綸ある手段と思つて居つたのである。又佛蘭西は其後安南、東京を取るに當つても、之を亡ぼすは容易なるに拘らず尙之を保護國として安南王を存在せしめ、柬埔塞王を存在せしめ保護國と稱して、而して一切の政治は佛蘭西共和第何十年と言はずして、安南王維新何年の名に依て政令を出して、土人の頭を斬り土人の首を梟らすと云ふことに至るまて、皆國王の命を以て行つて居る。又瓜哇の如きも然り、國王を亡ぼすは容易なることであるに拘らず、尙ほジョクジャと、ソーローには元のサルタンを存在せしめて、毎年十分の黃金を與へて文武百官を養はしめて、其夜郎自大の心を滿足せしめて居るのである。凡そ是等の地方を見るに佛蘭西、和蘭は果して其土王を亡ぼして之を併呑することが出來ぬのであるか。否出來ざるに非ず爲さゞるなり。如何なる國と雖も國家あれば歷史あり、歷史あれば風俗習慣あり、土民の感情あり、是等のものを悉く亡ぼすと云ふことは容易の事てないが故に、王室及其舊社會の組織を存在せしめて、之を利用して行くのが最も平和に、且つ最も經濟的に政治が行はれるから之を存在せしめて置くのである。然るに日本のみ何故に總てのものが手中に入つた朝鮮を、今更其王室を亡ぼし、其舊社會を變更し、其政府を顚覆すると云ふ必要があるか。余は何故に朝鮮を併呑せざるべからざるかと云ふことを、先づ第一に聞きたいのであるが、今日まて十分なる說明を聞くことが出來ぬのである。

之に因て之を觀れば斷乎として行ふと云ふが如きは要するに一片の空名を爭ふの論に過ぎぬと思ふ。蓋し今日朝鮮の治まらざるは、統監制度の罪に非ずして、統監制度を運用する人々の罪である。及び朝鮮に在留する我が邦人の朝鮮人に對して暴虐を加へるの罪である。又官吏が朝鮮語を解せず、土人の事情を知らず、唯法令に依り、威壓に依て、政治を行はんとするの罪てある。凡そ如何なる國と雖も歷史あれば則ち習慣あり、習慣あれば則ち社會組織あり、如何に強壓力を用ゆるも、此社會組織を變革することは出來ぬのてある

から、此社會組織を利用して政治を行ふの外はないが、今日朝鮮に於ける我が官吏中朝鮮語を解して、朝鮮の社會組織に存在する勢力を利用することの出來る人が、果して幾人あるか、要するに總て禍は此所より來るのである。

余は數月前、併呑するにせよ、せざるにせよ、朝鮮の政治は、先づ兩班の始末をせねば納りが付かぬと云ふことを言つたが、其當時より政府は漸く兩班なる者の始末法を考出したやうである。是等は泥棒を捕へて繩を糾んとするものには非るか。我國二千五百年來國民みな兄弟の誼があるに拘らず、尙ほ內亂時に起つて、而して明治十四年以來の內政は一に士族處分と云ふことの爲に力を費して居るのである、然らば朝鮮の士族とも謂ふべき兩班の始末を考へずして朝鮮を治めんとするは、恰も我國維新の後に於て士族なる階級を眼中に置かずして政治を行はんとするが如きもので其愚や笑ふべきものである。而して余の兩班論に對しては、兩班なる者は階級であるとか階級でないとか種々なる議論があるが、階級なるも宜し。階級ならざるも宜し。一時勃發の有志家であるも宜し。兎に角國家を騷がす一の勢力は兩班にあるのであるから、此兩班を始末することが必要なのである。即ち瓜哇の如きも兩班の始末が付いて居ることが能く治まる所以である。瓜哇に於ては和蘭の政府より二人の王に對して年々莫大なる黃金を送るの外に、全國を二十五六の政治區劃に分けて、每區劃に士族の親分を置て、其士族の親分が政治をすることになつて、和蘭の官吏は此士族の親分を監督して政治をすると云ふに過ぎぬ。而して和蘭の上官が其士族の親分を呼ぶのに下僚と言はずして我が弟と言つて居る、即ち馬來地方に於ては兄弟と云ふが如き家族的の名詞が非常なる感じを與へるに依て、兄弟の交をすると云ふ關係になつて居る。斯の如く親愛なる人情に依て兩班に結ぶと共に、此士族の親分には每年每一人に一萬二千ギルダー、即ち我が一萬圓程の給金を二十五六の士族の親分に與へて居る。而して此親分の下に町村及郷には各々士族の小親分があつてそれぞ

れ政治をして居つて、矢張り身分不相應の給金を貰つて居るのである。即ち我國が曾て士族に公債證書を與へたことがあるが、和蘭は公債證書は與へざれども、年々莫大なる給金を與へるに依て、彼等をして安心立命せしめて居るのである。然るに我國の朝鮮に爲す所を見るに、此兩班を用ゆると云ふことをせず、僅かの兵隊があれば之を解散せしめて、彼等をして武器を持つて其不平を發すると云ふ機會を作らしめて居る。而して我が朝野の政治家は根本的に朝鮮を變革せよと云ふが如き無意味の議論の爲に、朝鮮の津々浦々に至るまで悉く日本の官吏を以て之を治めしめんとして居る。是れ恰も朝鮮人を教唆して餘儀なく叛亂に加はらしめんとするが如き事をして居るのである。何故に朝鮮人をして或一村一郷を治めしめて、日本人は之を監督するに止むるが如き寛大なる政治を行ふことが出來ぬのであるか、余は實に我が朝鮮を治むる人々に、何等殖民上の政策及知識の無いと云ふことを慨嘆して、禁ずべからざるものである。

要するに今日朝鮮を治むるの途は、先づ兩班の始末をするのである。朝鮮人をして生活上に安心せしむるの途を講ずるのである。燕雀の君臣をして自から其夜郎自大の心を滿足せしむるのである。彼の政治家をして大臣若くは次官と稱して自から其虛名を誇らしむるのである。而して此間に道路を開通し、此間に士族授產をし、此間に產業を發達せしめ、之をして安心して我國の附庸たらしむるに外ならぬのである。而して我が帝國經綸の上より言つて離すべからざるものは斷乎として握るにある。斯の如くして今日より多くの負擔をせず、今日の負擔を以て朝鮮を發達せしむるに在り。若し今後每年四千五百萬圓、少くとも三千萬圓の金を朝鮮の爲に負擔せねばならぬと云ふならば、余は寧ろ此金を以て、十艘十五艘のドレツトノード型の大軍艦を欲しいと思ふのである。我國は今や財政に於て決して餘裕ありと云ふことは出來ぬ。此餘裕なき財政の中より朝鮮を併呑しやうと云ふ空名のために四五億の金を、朝鮮に注ぐと云ふことは、決して國家に忠なる改

治家の爲すべきことでない。若し此餘裕があるならば余は十艘十五艘の大軍艦を造りたいと思ふ。今や我が國家の位置は日露戰爭以前に比して極めて安全なるが如く而して不安なる位置に立つて居る。陸軍のことは暫く言はず。我が海軍は從來僅に一二國の海軍を目的として立つて居つたに拘らず、今や亞米利加の大艦隊は萬里の波濤を蹴つて直に日本に到着することの出來ると云ふ一例を開て來た。獨り亞米利加のみならず、此一事は總ての國民をして力を太平洋に注がしめると云ふ事になつて來た。此時に當つて我が海軍の狀態を見れば、既に戰爭に於て效果を奏した有力なる軍艦も年を逐うて朽廢し、而して新艦未だ之に替るものなく、識者より見れば極めて不足なる狀態にある。然るに政府は未だ此海軍の補充を考へずして、二三政治家の小功名心を滿足せんが爲に、朝鮮の爲に年々三四千萬圓の金を捨てんとするに至つては、余は國家の爲に計つて甚だ忠なるものと云ふことの出來ざるを遺憾とするものである。當局の政治家若し眞に日本帝國の安危存亡を以て其念慮とするならば、宜しく朝鮮併呑するの愚案を捨てゝ、我が國家の安全を守る大艦隊を造ることに力を注がねばならぬと思ふ。

桂侯も不死の内閣を有するものにあらず、今日無謀の併呑を行ふも、桂侯或は財政上の窘窮を見ずして去ることもあらん、然ながら一時の功名のために後の内閣が非常の痛苦を受くるが如き事業を殘し後は野となれ山となれと云ふが如きは蹇々たる王臣の大節に於て余の深く取らざる所である。



ゴム栽培業の大利

千崖衙門財政顧問 田代强八

(一)ゴム需要の激増

極端にいへば鐵の時代去つてゴムの時代が來たといつてもよいかも知れない。今後の改良すべき事業にはゴムを用ひぬものは殆んどなからう。現在ゴムを用ひて居るものは、自働車、自轉車、人力車等の車輪用、西洋では汽車にも追々之を用ひんとして居る。それから電氣事業、醫療器械、軍艦や汽船のマットや蛇管、皆殆んどゴムを用ゐる。足袋底や靴の踵に用ふるのも追々盛んになり、西洋ではセメントの代りにプラットフォームにも之を用ひんとし、英國などでは道路をさへゴムに改めんと計畫中だと聞く。ゴムの需要の激増は殆んど驚くべきものであつて、我國に於ても一昨年あたりは三百萬圓位の輸入であつたが、今日では已に六百萬圓以上に殖えて居る。陸軍省、海軍省、鐵道院などの需要もずん〳〵殖えて行くのである。英國では千九百〇九年の輸入が六萬五千六百五十五噸其價格九千五百四十七萬圓である。獨逸や米國の事は今調べないが矢張り同じ傾向であるのは疑を容れない。而して此傾向は今後益々著しくなりつゝあるは世界の識者及び實業家の皆一致したる意見である。

(二)現在のゴム產額

現在に於けるゴム產出額の最も主もなるものはブラジルの原野即ちアマゾン地方であつて世界產出額の六十三パーセントは實に此地方から出る。次は熱帶亞弗利加であつて三十四パーセントを產し、亞細亞は僅かに三パーセントしか產出しないのである。然しながらゴムには野生ゴムと栽培ゴムの二種あつて、今日亞米利加及び亞弗利加から出るものは皆野生ゴムであるが此方は餘り其產額を增加する傾向がないのである。即ち亞米利加は最近僅かに年二割の增加しかなく、亞弗利加は寧ろ減退の傾がある。獨り亞細亞に於ける栽培ゴムは非常な勢を以て其產出額を增加し且つ年一年加速度的に增加して行くのである。抑々印度政府が莫大な費用を投じて南米アマゾンに人を派しパラゴム樹の移植を計つたのは今より三十五年前であるが、爾來長足の進步をなし、最近數年間に於けるセイロン島及び馬來半島の產額は驚くべく激增し、此兩地の昨年の產出高二千六百餘噸其價格約我千七百四十五萬圓である。此の如きは世界產業史上殆んど空前の事といつてもよいのである。即ち此產出額の增加を表示すれば

年度	セイロン島及び印度	馬來半島	合計
一九〇五	七〇噸	七五噸	一四五
一九〇六	一六〇	三五〇	五一〇
一九〇七	二三〇	七八〇	一、〇一〇
一九〇八	三五〇	一、四五〇	一、八〇〇
一九〇九	四三四	二、二五二	二、六八四

此勢を以て進めば印度及び馬來半島附近に於けるゴム產出額は世界の冠たるの日あるべきは決して夢想ではないのである。今や世界各國は皆玆に目を附け、米國の如きはシンヂケートを組織して馬來半島のゴム栽培業の利益を壟斷せんとして居る。英國の海峽殖民地政廳も初め、農產物としては珈琲、幾那、胡椒等の培栽を獎勵する爲めに勸業銀行を設けて五千萬圓を投じたが、珈琲は印度、ブラジル、蘭領印度、ジャワ等に壓倒せられて望なきに至り、近來は珈琲の代りにゴムを栽培せんとして居る。然し英國は開放主義を取つて居るので、本一本から年々七錢づゝの課税をする外、今

日の所では外人のゴム栽培に干渉せんとするの風がないから、各國爭うて此處に目をつけて居るのである。

（三）馬來半島に於ける邦人のゴム栽培

然るに我邦人にして此事業に從事せるものは極めて少ないのは嘆ずべきである。今本邦人の該事業に從事せる人を擧ぐれば

（一）三五公司。阿久澤直哉氏が代表するものであつて、同公司經營のゴム栽培地はジホール國で總地積面約二萬三千エーカー（一エーカーは我四反）内二萬一千エーカーはバットクパハット附近に租借し、昨年七月より此所有地中二百エーカー丈け先づ開墾に着手した。又明治四十年に買入れたシタパ岬の二千エーカー栽培地中現在收益を見るのは僅に三十エーカーで平均毎月一千六百弗（一弗は廿五錢）の實收があるといふ。

（二）スレンバに於ける中川氏の一百七十エーカー、毎月六ピコル（一ピコルは百斤）の穫收。

（三）テッコン島の七十エーカーは中野、二木、矢ケ部、東境の四氏合資から成る。

（四）バトパハに於ける遠藤氏の一百五十エーカーは未だ事業に着手せぬ。

（五）ジョール領内に假契約をなしたる一千エーカーの大倉新太郎、長田某の租借地。

（六）新嘉坡在チュンチュウウカンに四十四エーカーのゴム植林をなせる蔦田氏（其他馬來半島に於て在留ピナンの松屋氏もゴム栽培す）。

の數氏のみであつて、極めて微々たるものである。之れは日本の金持のかゝる事業に投資するものゝ少きにもよるが我輩は先づ第一に政府が機關銀行を設立して、かゝる有利なる事業に資金を融通するの道を開かんことを希望して止まぬのである。

（四）ゴム栽培の利益

ゴム栽培の利益たることは殆んど何人も知つて居る所であつて、或ゴム會社の如きは年々八割の配當をなし其株式相場は拂込金額の十倍に及ぶものさへある。

今一エーカーの地にゴムを栽培するとせんに、各地の地價及び勞銀の高低によつて多少の差異はあるが、開

經費及び初年の切り附けを行ふまでの期間の維持費即ち土地貸下若くは買入費、伐木、耕耘、排水溝の設備、植木費、苗木又は種子の購入、五六年目の手入除草費、農用建物の一切を入れて平均百八十圓乃至二百圓を要する。故に若し五百エーカーを培栽せんとすれば先づ十萬圓弱の資金を要する。而して一エーカーには凡そ百五十本乃至二百本（多くは百九十八本位植へる）のゴム樹を植えるのであるが之を半分即ち百本と見ても五萬本を植えられる。そして初年度（多くは五年目）の切り附けには一本から半封度のゴムが取れるから二萬五千封度、之を一封度の時價五志（實際は七志以上）と見て六萬二千五百圓の收入あり、生産費一封度一志（實際は一志以下）と見て、尚純益五萬圓である。次年度は一本から一封度のゴムを産するから純益金十萬圓以上、三年度は一封度半取れるから十五萬圓以上、五年度六年度となれば一本から少くも五六封度、多ければ七封度位のゴムを産するから年に五六十萬乃至七十萬圓の純益があるといふ事になる。僅かに十萬圓の資金を投じて五百エーカーを經營してすら左樣である。況して百萬若くは二百萬を投じて五千エーカー若くは一萬エーカーを經營するとしたら其利益は莫大なものである。

千九百〇九年九月十五日新嘉坡市場に於てゴム樹栽培の一エーカーの評價は

一年木	二六〇
二年木	五三〇
三年木	九四〇
四年木	一五六〇
五年木	二五一〇
六年木	三四六〇
七年木	四六三〇
八年木	五二一〇
九年木	五六一〇

我輩は今日新嘉坡の南なるビンガといふ島に二萬エーカーを租借することに契約して來た。其他何處でも御用とあれば借りてやるから、政府なり金持なりが少し眼を開いてかゝる事業にかゝつて見てはどうかと思ふ。

(五)ゴム栽培に對する危惧

斯くの如く有利な事業であるからして「ゴム栽培は一種の富籤也」といつて投機事業の如くいふものもあるが決して投機事業にはあらず、確實なる有利事業であることは世界の實業家の疑はざる所である。只之に對して三つの危惧を抱くものがあるが、我輩の見る所では何れも杞憂に過ぎざる樣である。(一)は害蟲の發生であるが、ゴム樹は比較的強健であつて多少の危害を受けても全部枯死するやうな事が少く、又今日まで甚しき蟲害を受けたる例は殆んどないのであるから此點の心配は無用と思ふ。(二)は生産過剰で今日の如く人皆爭うてゴム栽培に腐心する時は供給が需要に超過し從て今日の如く有利事業にあらざるに至るべしとの懸念であるが、ゴムの需要が駸々として止る處を知らざるの機運は前述の如くであつて、且つゴム栽培は如何に盛んになつても其區域は限定せられて居るから此心配も亦無用と思ふ。(三)は人造ゴムの發明であるが若し人造藍即ち礦物性の藍の發明によつて從來の植物性藍が悉皆衰微して了つた如く若し人造ゴムの發明があつたならばゴム栽培に一大打撃を與ふるに相違ないが、然し人造ゴムは百二三十年前から研究されて居るに拘らず、未だ其見込がなく、僅かにゴム類似のものが出來るが彈力性が甚だ少く今の處では到底ゴムに代用すべき品の發明が覺束ないやうである、少くも今後十年間に到底其望みなきものと斷じてよからうと思ふ。

(六)餘論

ゴムの需要の增加及び栽培業の大利あることは以上述べた如くであるが、最初にいふた如く、陸軍省及び海軍省などのゴムを需要する額は年々增加し軍事上最も必要なるものとなつたに拘らず、ゴムは戰時禁制品であつて、一朝事ある時には甚しき困難を來さぬとも限らない。我政府が臺灣にゴム栽培を企てたるも、いくらか左樣の理由あることてあらうが、臺灣に於てはパラゴム(パラゴムは最も良好なるゴムにして今日ゴムといへば殆んどパラゴムを指すものといふてもよ

い）は全然見込がなく、又支那の所謂榕樹から出る黑ゴムはいくらか有望であつて恒春熱帶植物殖育場でも嘉義護謨苗圃でも熱心にやつて居るが、餘り大した成績ではない。又いくら其れが成功してもパラゴムとは到底比較にならず價格も三分の一よりも安い。夫れ故に我日本人が馬來半島附近に於てゴム栽培に從事し、盛んにゴム業に從事することは軍事上から見ても極めて意味あることゝ思ふ、況んや單に致富の方法としては現今此ゴム業に優るものなしと斷じても過言でないと信ずる。（完）

伊勢風聞記

健依別

○「伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ尾張名古屋は城で持つ」今日に繁榮に赴く中京名古屋は金鯱一城の故に非ず。天下樞要の衝に在れば也。

○勢海の名邑津が其の勢力の一半を抛擲して時代の前に叩頭せしより予輩伊勢の風聞を耳にせざる事久し矣。吾人津の盛衰に俯仰して伊勢の今昔を說く時、感慨亦尠しとせず矣。

○伊勢は神乍らの古つ國也。山河古く人事舊く風尙亦老いたり矣。一村一落倭姫時代の傳說を存し山川の名稱亦記紀に釋名を俟たざるべからず。

○かしこくも天祖の大廟は伊勢に祀らる。伊勢人の誇は祖廟の藩屏たるに在り。

○伊勢は老人の國也。松阪に名物老の伴あり。甘辛脆美にして口に香老に宜し。伊勢人は老人を敬するを知る。老の伴に因んで松阪に老人會あり。然り而して未だ伊勢人は靑年の活動を解せず。

○市坊に重んぜらるものは相傳の老舗也。然して金庫の鍵を扼する者は老人也。一代の俄分限者と年少者は其の手腕と資力を倍從して侚老舗老人と同一の信用を得んこと難し。

○伊勢はいもせの略なりとすれば國名の起原亦粋なりと言はざるべからず。然らば浦二見の夫婦岩は伊勢の國が有し得る恰好の具象たらずんば非ず。

○春和景明沈瀾不驚。白沙帛よりも滑かに青松蟠蝦の點綴、宛として采鏤の如し。二見浦の渚汀に立つてありやなしや駿遠の香霧を吸ふの時。微かに春の女神が曳ける霓裳を踏むの感あり。

○大廟に賽する者は更に一路里餘。電車を驅つて二見浦の春煙に憧がる。其の貝細工繪ハガキを店頭に飾つて客を呼ぶの喧噪は琴比羅に比すべく宮島に比すべく江の島に比すべし。

○江の島の名物榮螺の壺燒は香味典雅。怪磊たる風削の巖樓に倚つて悠々豆相の遠波を瞰下し名物壺燒を口にする所漂々として殆んど入神の仙味あり。山田名物の赤福に至つては俗中の俗。名に依つて實を吊すべし。

○山田に紙製の煙草具を産す。面に「火用心」を大書す。市井無頼の具に適す。赤福と相並べて其の俗遜るべきに非ざる也。想はざりき。神都の郷。此の二名物を參宮土産として誇り得んとは。

○蜀山人の所謂「夕立や伊勢のいなぎの煙草入。降る(古る)鳴る(成る)光る强い雷(强い紙也)。伊勢人氣質を諷刺して痛抉骨に入るの感あらずや。

○宇治は内の略也。山嶽欝然回境を繞り其の中の一都邑なれば宇治とは言へる也。古事記釋註に所謂内宮號者内者宇遲郷本名也。故就所地因以稱内宮也。彼徒多くは内外の義に神祕祕蘊の餘義を以てす。皆牽强考ふべからざる也。

○地名を讀む者往々文字に拘して本義を失ひ世俗に通ぜざる者多し。賽客山田に至つてナイグー。ゲグーと問ふ。土人は淸んでナイク。グクと呼ぶ。濁音の呼稱は多く神ながらの大和詞に非ずと知らずや。

○宮川堤の櫻花綻びん頃より若葉の枝頭青嵐と弄ぶ頃

い）は全然見込がなく、又支那の所謂榕樹から出る黑ゴムはいくらか有望であつて恒春熱帶植物殖育場でも嘉義護謨苗圃でも熱心にやつて居るが、餘り大した成績ではない。又いくら其れが成効してもパラゴムとは到底比較にならず價格も三分の一よりも安い。夫れ故に我日本人が馬來半島附近に於てゴム栽培に從事し、盛んにゴム業に從事することは軍事上から見ても極めて意味あることゝ思ふ、況んや單に致富の方法としては現今此ゴム業に優るものなしと斷じても過言でないと信ずる。（完）

伊勢風聞記

健依別

○「伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ尾張名古屋は城で持つ」日に繁榮に赴く中京名古屋は金鯱一城の故に非ず。天下樞要の衝に在れば也。

○勢海の名邑津が其の勢力の一半を拋擲して時代の前に叩頭せしより予輩伊勢の風聞を耳にせざる事久し矣。吾人津の盛衰に俯仰して伊勢の今昔を説く時、感慨亦尠しとせず矣。

○伊勢は神乍らの古つ國也。山河古く人事舊く風尙亦老いたり矣。一村一落倭姫時代の傳説を存し山川の名稱亦記紀に釋名を俟たざるべからず。

○かしこくも天祖の大廟は伊勢に祀らる。伊勢人の誇は祖廟の藩屏たるに在り。

○伊勢は老人の國也。松阪に名物老の伴あり。甘雅脆美にして口に耆老に宜し。伊勢人は老人を敬するを知る。老の伴に因んで松阪に老人會あり。然り而して未だ伊勢人は青年の活動を解せず。

○市坊に重んぜらるものは相傳の老舗也。然して金庫の鍵を扼する者は老人也。一代の俄分限者と年少者は其の手腕と資力を倍従して尙老舗老人と同一の信用を得んこと難し。

○伊勢はいもせの略なりとすれば國名の起原亦粋なりと言はざるべからず。然らば浦二見の夫婦岩は伊勢の國が有し得る恰好の具象たらずんば非ず。

○春和景明沈瀾不驚。白沙帛よりも滑かに靑松蟹蝦の點綴、宛として采鏤の如し。二見浦の渚汀に立つてありやなしや駿遠の香霧を吸ふの時。微かに春の女神が曳ける霓裳を踏むの感あり。

○大廟に賽する者は更に一路里餘。電車を驅つて二見浦の春煙に憧がる。其の貝細工繪ハガキを店頭に飾つて客を呼ぶの喧噪は琴比羅に比すべく宮島に比すべく江の島に比すべし。

○江の島の名物榮螺の壺燒は香味典雅。怪磊たる風削の巖樓に倚つて悠々豆相の遠波を瞰下し名物壺燒を口にする所漂々として殆んど入神の仙味あり。山田名物の赤福に至つては俗中の俗。名に依つて實を吊すべし。

○山田に紙製の煙草具を產す。面に「火用心」を大書す。市井無賴の具に適す。◎赤福と相並べて其の俗逐るべきに非ざる也。想はざりき。神都の郷。此の二名物を參宮土產として誇り得んとは。

○蜀山人の所謂「夕立や伊勢のいなぎの煙草入。降る(古る)鳴る(成る)光る强い雷(强い紙也)。伊勢人氣質を颯刺して痛抉骨に入るの感あらずや。

○宇治は內の略也。山嶽蔚然回境を繞り其の中の一都邑なれば宇治とは言へる也。古事記釋註に所謂內宮號者內者宇遲郷本名也。故號所地因以稱內宮也。彼徒多くは內外の義に神祕祕蘊の餘義を以てす。皆牽强考ふべからざる也。

○地名を讀む者往々文字に拘して本義を失ひ世俗に通ぜざる者多し。賽客山田に至つてナイグー。ゲグーと問ふ。土人は淸んでナイク。ゲクと呼ぶ。濁音の呼稱は多く神ながらの大和詞に非ずと知らずや。

○宮川堤の櫻花綻びん頃より若葉の枝頭靑嵐と弄ぶ頃

迄山田の春は賑やかなり。賽客踵至して晝夜を岐たず。東より西より南より北よりす。

○停車場に下車する幾萬の賽客は恰かも蜘蛛の兒を散ずるが如くに四散す　老若男女、貴賓あり賤客あり。僧あり俗あり。其の相貌風姿亦千狀萬態にして帝國に於ける四民全階級に通ず。山田停車場は實に明治風俗假裝行列の絶觀を呈せずんば已まず。

○教會に出入する者は煩悶者の型あり。寺院に詣づる者は後生欣希の老者也。田舍の氏神祭を賑はす者は神の氏子也。然して祖廟に額突く者は帝國の階級と特相を悉くして遍くす。我今にして吾國體の萬古絶異なるに驚嘆せずんば非ず。

○今年名古屋に共進會あり。其の名古屋に至る者は鐵軌一路。五時間を割りて大廟の參詣を吝まざるべく伊勢に參宮する者も亦名古屋の一瞥を敢てせん。祖廟此地に在らずんば名古屋今年の盛況得て期すべからず。

○今春日本國内に於て停車場の殷盛雜沓名古屋山田に如くは無からん。鐵車日夜往反を止めずして客車立錐を剩さず。乘車下乘の人氣宛然攻城野戰の如し。

○若しそれ山田停車場のプラットホームに呑吐する賽客に至つては宛然雲の如し。發車一時間前構内に入れて列を整へ其の混雜を防がしむ。驛員の叱咤呼號して奔走するの狀に至つては兵式訓練の如し。玆に於て驛長帶劍の說の眞に虛構に非ざるを解し得たり。

○停車場を出て丶六間の大路坦として逆旅皆客を呼ぶ。硬軟堅柔相和し妖艶粗剛兩つ乍ら至る。頗る賑はし。曰く大和館。曰く高千穗。大勢。帝國。明治。神風數へ來れば修辭の壯大なること山田の旅館は恐らく天下に冠たらん。

○山田に御成街道あり。停車場前より煉瓦石橋の巧を盡して内宮に至る。櫻樹兩側に挾んて車道人路を岐つ。帝都の中央にも恐らく此の街區を見ざらん。其の街路を修めて其の市を美にし祖廟奉祀の餘澤に萬一を酬いんとす。斯市民其志嘉尚すべき哉。

○山田は天下のエルサレム也。エルサレムを訪ふ者は荒廢せる神靈の廟に叩頭き、此の地に詣づる者は豐か

だる市貌と新興國民の意氣に薰じて去らん。彼れと此れとは感懐自ら異なり。蓋し聖代の餘澤也。

○吾人先年鳥羽に遊んで數日の行樂を縦にするを得たり。歸途車夫を賃して逢坂山の山腹を渡りて山田に至らんとす。車夫一灣の風光を指顧して謂て曰く。日晴れて煙斜なるは日和山の絶勝也。杳靄一沫戻と曳けるは相島の畵影。松奇なるは何島。水綠なるは河浦。と碁布點綴せる鳥羽灣の風光今猶見るが如し。

○參宮線延長して鳥羽に達するの計あり。鳥羽の風光は新たに世に問はるゝの時あるを信ず。今猶南濱桃原の一境を劃す。

○史に稱す。平清盛安藝守たりし時、安濃津より航して熊野に至る、鱸魚跳躍舟に入る。彼れ精進の佛誡を忘れてこれを食ふ。彼れが族遂に天下に榮ゆ。世以て熊野權現の利生となすと雖も僕私かに思ふ潑剌たる勢海の鮮魚彼れが精根氣魄を養ひ得たるが爲めに非ざるなきやと。

○鳥羽藩士近藤眞琴、海軍振興の策を劃し力を海夫の養成に盡し東京に攻玉社を創む。以て海員子弟學業の壇場とせんとす。一世の奇材也。

○春風に吹かれて勢海百里の曲浦長汀に行樂する時吾等は百般の俗事を蟬脱して直に桃源の懐に入る。星巖の所謂、搖々酒影閃風帘。南游到處無多願。の感を再びす。

○龜山驛を北に駛せて三重、員辨の境界に至らば四面の眼界頓に展けて稍壯快旺洋の慨あり。然して潑剌盛々の氣四方より到る。木曾の一流を隔てゝ愛知の平野は偉人豐公を生みたるの地なり。

○若しそれ木曾揖斐の漑する北勢の原野に立たば春は今。菜花十里。視野涯なくして日渡る事遲々たり。人物伊勢より出づるの時あらば將星必ず此の地より昇らん。

○北伊勢の豁開浩洋に比して南伊勢の峡塞險巇なるは著明なる地形上の對稱をなす。彼れの開化進歩的なると此れの舊慣保守的なると。曰く「地は凡ての物の最後の説明者なり」と正に然り。

○南伊勢は徹頭徹尾保守的也。國粋保存と云ふが如き一定の式あるに非ず。只何となく舊し。神代の淡醇あるに非ず、王朝の艶雅あるなく鎌倉時代の素朴あるに非ず。是等を外にして唯何となく古し。

○桑名に名物燒蛤あり。今停車場の賣子稀に其の名を呼ぶあるのみ。熱燒の雅味は遂に味ふに由なし。汽車の發達は凡ての名物を俗了し去る。

○參宮鐵道の未だ就らざるや、參宮の客、津を過ぎざるはなし。津山田間は正に一日程。客皆津に泊す。津は實に山田の要口なりき。妓樓娼館街道に軒を並べて紅裳紫袖妖艶の客引聲を絶たず。

○吾人津をして一山田參客の津たらしむるを欲せず。其昔天下樞要の門口也。和銅風土記に所謂「東方之蠻船公私之着船港入之船各來于此。待其風雲擧國之名湊」なるものに非ずや。

○參宮の軌道成るや詣者皆津に到るに及ばずして去る。亦古の盛時なく停車場前に戸家皆閉されて閑人盆栽を弄ぶを見る。

○津八滿宮の祭典は秋十月也。祭典の屋臺は萎びたる津に在つては唯一の壯觀也。相謳うて曰く「伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ」吾人此の都にあつて此の樂を聽く、哀愁の更に深きを覺ゆ。

○嗚呼「伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ……」誦唱再三懷盡きず。吾等は昔謳はれし津の盛貌を想ふ。代去り時逝き津は舊記の裡に沒して廢都再び蘇らず。

○和銅風土記に謳はれし津の殷盛は四日市に移れり。參宮鐵道の起工を冷然として觀過したりし津市民は四日市の築港に關しても案外淡然たりき、時、日に非也。人事の巧を盡すべきに非ざる也。

○四日市築港は伊勢人を大にするもの也。されど津市の陰影は此れに依つて更に小也。小なりと雖も是れ時也。戰の罪に非ざる也。亦何をか嘆ぜん。

○津市民たるもの呑吐昇降して毫も增減なき大海の洋に眼を放つて時代の前に大觀せざるべからず。徒に孤憤孤節を伸べんとして四日市の築港を難じ汝が伊勢をして更に小ならしむる莫れ。津の盛衰はタレタ一伊勢

の運命を購ふに足らざる也。

○四日市は商業上の市也。松阪は工業の都邑也。山田は遊覽の市にして津市は實に政治上の府也。學問上の中心也。舊藩の城下也。吾等は寧ろ閑靜にして舊記多きを喜ぶ。

○縣治の府廳四日市に移るあらん日を定めて徒に孤憤する者あり。されどこれ蒙也。伊勢の中心津を外にして四日市廳の長轆能く紀南難治の地に及ぶべきや否や。

○津に名濱阿漕浦あり。渥沘汀瀾春時の眺望尤もよし。アコギあるが故にアコガル、といふか。アルガル、の義に採つてアコギと云ふか。伊良湖岬が擁する一灣の風光譬ふるにものなし。

○阿漕平次が傳說は架空の文藻たらん。今阿漕塚なるものあり平次を祀る。其傍舟塚あり。平次が舟を埋む。

○所傳云、阿漕浦は往昔大神宮調進の御贄の魚を漁して獻ずるの所也。故に伊勢雄の海士も漁ることを得ず。阿漕平次なる者あり。潛に網を投じて夜間偸み漁れり。度重なりて終に露顯し罪科に行はる。此の浦に竹簀卷にして骸を生けるまゝに沈ましめしより其の靈祟をなす。其夜は每歲彼の惡靈の網曳く音をなす。故に其の夜は漁人も漁を爲さずと。

○然して彼れが罪科に行はれしは七月十六日也。七月十六日は魂流しと稱へて全國の習俗河海に近づかざる例也。彼此對稱し來らば虛說架言の痕掩ふべからず。

○阿漕塚の傍芭蕉翁の碑あり。碑面に「月の夜や何を阿漕に泣く千鳥」と記す。芭蕉の原作「闇の夜」とあり。然して伊勢人は闇を忌みて敢て先人の文藻を損ふを知らず。俳趣に盲なる伊勢人は守武乙田が子孫ならずや。

○津市街を奔走し一軒の西洋料理店を見出さんとすればその難きに失望するなるべし。然り津市唯一つの西洋料理店すら會員組織を以て辛うじて其の命運を維持しつゝある也。津は尙そばとうどんの全盛時代也。五步十步街路到る所此の種の飲食店を見る。

○津のそばうどんは大椀にして大盛也で普通人は其の

一椀を食して腹中多く餘裕あるなし。蓋し如斯は其昔下等なる參宮道者が飢に宛てたる習慣に馴致せられたるものたらずんば非ず。

○津市人口五萬。洋服店は十指を屈するに至らず。在來の呉服店は數ふるに勝へず。然して家屋の建築に教會堂の尖塔をして唯一の洋式建築たるを誇らしむ。吾人は是等を以て南伊勢人が新文明に對する態度の一斑を見んと欲す。

○惠日山觀音は津の中央にあり。東京の淺草。名古屋の大須に似て小也。然して其の俗惡に至つては其れ一也。

○伊勢の海濱は南するに從つて其の風色を加ふ。阿漕香良洲に至つて絶艶に二見に至つて愈美。志摩の風色島姿遙に松島を陵ぐと稱せらる。

○松阪の西に瑞巖寺の秋色あり。雋拔瓢落些の俗趣を交へず。瓢を以て山湖を渡る可なり。山樓に倚つて紫蘇飯を呼ぶ可なり。全山の秋色水を得て更に生動す。

○造物者が斧鑿の彫鏤は南勢に巧を盡して北勢に拙也。然して其の文明進歩の痕が風光の精美に副はざるは何ぞや。吾れこれを地形に説けり。豈それ唯地勢故乎。

○伊太利希臘の山水美にして國夙に微也。風韻索然たる北歐の地に强國多し。吾人敢て山水美亡國の論を開かん。

○津に寺町あり。寺門塔閣相連つて僧侶は重要なる市民の一階級を成す。花見にも劇場にも商店にも妓樓にも彼等は優に俗界の一大勢力たり。吾人其の發展と頽落たるを知らず。唯神風の伊勢の國に斯の浮屠氏の稍多きに過ぐるを怪しむのみ。

○されど佛教は彼等が生活上の看板のみ。必ずしも信仰の意義を含まず。朝に彌陀尊前の磬鐘を撃ち夕に耶蘇の聖靈に座拜するを怪しまず。蓋し如何にして食ふべきかの問題は如何にして安神すべきかの問題とは各別個の存在を有す。

○伊勢は閑寂の地。激甚なる生存競争の舞臺とは自ら別乾坤を成す。物價亦廉にして為に漁利多し。消費者

其の貧を樂しんて亦多くの迫害を受くるに至らず。蓋し敎育者の理想郷たらずんばあらず。

○既に刺激なく壓迫なし。一度玆に住んでは其の生を向上せしめんと難く一度沈んではその生を挽回せんこと難し。書畫骨董を樂んて悠々たらんとする者には至上至樂の天地也。

○或人予に告げて曰く。伊勢人は感服するに易し。未だ心服せしむべからず。又曰く敎ゆるに難からず眞に敎育すること難しと、吾人其の何の意義たるやを知らず。一載此の地にあつて終に要領を得る能はず。

○僕一日田舍に遊んて某小學校を參觀するを得たり。その設備方法兼ね盡して些の漏なく敎授法の巧妙にして又た圓滑なる敎風今尙忘るゝ能はず。

○伊勢人敎育を說かんとすれば吾人の筆は縣下師範敎育の一斑に及ばざるべからず。されど吾人未だ多くを知る能はず。縣に男女二師範學校あり。其の制完備と稱す。

○附屬小學に雜誌「小學敎育」を出す。其の發刊部數優に二千を超ゆ。地方敎育界の異數也。吾人は此の搖籃に吾敎育界の偉人の出現せんことを待たん。

○由來中等敎育は振はずと稱せらる。縣に四中學。二高女。一農林商業工業あり。學制の複雜と外形の美醜は說く所に非ず。敎育者の形容何となく枯槁したるの觀あるを憾とす。

○伊勢人文明の策源地は名古屋也。名古屋は豐公の生地にして亦德川親藩の居封也。然して名古屋が江戶大阪二文明の混血兒的文明を有せることは地理上に於て然るのみならず歷史上に於て亦然り。

○名古屋が此の二文化を吸收同化して呑吐する一波一瀾は直に沈及して伊勢人の文明となり流行となり趣味となる。

○吾人史を讀んて波瀾と活劇なき伊勢人が三千載の生活に憾ある能はず。北條早雲は伊勢人と稱せらる。彼れの多謀なるは伊勢人に似たり。その斗大の膽は未だ伊勢人を以て許すべきに非ざる也。

○鄉土伊勢は人物を生まず。山河育せざる乎。文化適

せざる乎。四時溫にして山水亦美也。物庶にして氣閑也。人は衣食の易きに眠つてその大成を冒さゞる乎。古人今人共に非也。

○予豈に伊勢を知らん。豈亦知ると言はん。唯日常の見聞を拾うて伊勢人氣質の一斑を説けるのみ。更に他日を待つて古今人物の評騭に筆を起さん。（大尾）

人物評論（四）

現今の政治に關係ある富豪

△現代の政治に關係ある實業家

三宅雄二郎

大なる富豪は主人自ら少しも政治に關係せぬ、政治に趣味を持たぬ、持つても關係してならぬ習はしになつてるらしい。が其關係人に政治に携はつて居るのが尠くない、三井家の主人は少しも政治に與らぬが、其世話をして又現に世話しつゝある井上侯の關係て何程か金の融通があつた、侯自らは政黨に意なくても、故伊藤公の親友たる立場からして何かと斡旋した處もあつた。三井家は主人を初め雇人一同政治に携はらぬが、或る部分には政友會に同情を表し、之が爲に力を致したのがある、併し政友會の爲にするよりは故伊藤公の爲にするのであり、故伊藤公の爲にするよりは井上侯の爲にするのである。井上侯の差金によれば間違なく、間違があつても避けることが出來る、幾分の損失があつても伊藤公の如き元勳隨一と共にすれば何等かの便利あるべきである、つまり營業本位からして之に關係あるものに同情を寄せる譯である、それも深入

らはせぬ、三井家として某政黨に肩を入れると見えるのは其甚だ忌み憚る所であらう。

岩崎家の現主人は三井家と少し違つて居る、政治上全く覇氣なしとはせぬが、家として今に最も肝要な時代である、新建の家で、少し油斷すると根柢が動き出す、何でも手堅くするに限る、愁ひ政治に手出しなどすれば收まりの附かなくなる恐がある、といふので政治に對し嚴正中立を守る次第である。けれど其の關係人に政治に與り居るものが無いでは無い、大石氏の如きは月幾らと貰つて居る、他にも之に似たのがある、が政治に關し全く個人的であつて岩崎に關係はない、且つ金額といふも左程のものでない、個人として交際上の體面を保つ位の事であつて、大袈裟に政治運動をするといふ樣な譯にいかぬ、若し今少しく運動費の性質に於て遣ひ得るならば、大石氏等の境遇も今の樣であるまい。岩崎で金を出すも或る私的の關係からするので、政治の意味に於てするのでない、併し少しばかり出金して置いて何かの場合に便利を得らるゝならば都合のよい事であるから、其邊の事も思ふて居らぬでもない、唯何黨に肩を入るゝと見らるゝは務めて避くる所である。

古川家も主人は關係しない、が前に故陸奥伯との關係があり、伊藤井上等數氏とも關係があり、其要部には政友會關係のものが居る、原氏なり、岡崎氏なりがある、直接政黨に關係なくとも比較的多しとすべきである。住友家の主人は西園寺侯と血縁がある、如何にしても切れぬ、が家として政治より離れて居る、多少有力な人物が屬して居るが、啻に政治に與らぬのみでなく、餘り社交にも與らうとせぬ、手宛がよくて有福に暮らし、惡く言へば買ひ殺しになつて居る、政治なんか馬鹿らしくなる、厭やになる、業務の上に得策であらうが、個人として悠長に爲り過ぐる、先づ當分政治に縁が遠い。此他可なりの富豪で關係人の政治に携はり居るのもあるが、大概主人自らは與らぬ。主人が與ると事が困難になると認められて居る、

富豪の列に入るべくして自ら政治に與つたものは坂

本氏の如きがある、財を散じて人に結び、一時隱然重きを爲した、惜いことに銅の下落すると倘ほ他に事情の有ったとの爲に、困難に陷つて又以前の如くなるを得ぬ、全く回復の見込ないでも無いが、何にせよ頗る困難てある、が富んて居た頃に今少し警戒したなら今日猶ほ幾層か力を振ひ得るのてあらう、政治家としては骨董よりも人を重んずべきてあつた、併し金あつて氏の如き氣前のよいのも少い、損失を招がなんだならば何等か見るべきものが有つたに相違ない。其困難に陷ると共に小寺氏が希望を屬せられたが、何處まて力の伸びるかは疑問てある、氏の父は坐らにして富を作つた、大なる富を作つた、子孫は神戸の繁華を加ふると共に益々富むべきてある、が坂本氏と大に性格を異にして居る、決して財を失はないが、政治家として何程成効し得るか、金あつても之を活用せずに、如何なる勢力を作り得るかは氏に於て見るべきてある。が今日とても貧乏代議士の企て及ばぬ丈の事はある、兎に角議員を身に着けぬ位の事はある、が此先如何程の事あるかは分らぬ。

かく纒まつた財なく、併し實業界に相應の位置を占め、同時に政治に携はつて居るのは中野氏てある、實業家として手腕あり、政治界に於ても全く埋沒する程てない、一時相應に押し立てられた事もある、そして惡錢を貪る連中と違ひ、信用の置ける方てある、が政治家としての運命は略ぼ定まつて居る、今の處別段の事あるとも思へぬ。新に勃興したのは仙石氏及び片岡氏とも言ひ得やう、腕利きの名がある、覇氣に富むと思はれ、して政治に乘り出して來たのてあつた、如何に活躍するかは人の見んと欲する處てある、岩下氏も亦左樣てある、他にも之に類したものがある、佐竹氏の樣なのもある。が今日迄實業家の身分を以て、目覺ましい運動をなしたものはない、政黨に實業家の關係し居るものはあるが、領袖は常に政治專門といふべき連中てある、時には政治屋ともいはるゝ方てある。これが善いとか惡いとかいふ說はある。が唯代議士として出席し、贊否の決に加はるといふ位の事は他の事業

の片手間に爲し得るが、能く政治の方に盡すには政治專門とならねば六かしい。何國に在つても政治家と稱せらるゝ程のものは、初こそ實業出身であり、或は他の出身であるにしても、後殆んど全く政治に專らになつて居る、片手間では如何しても思はしくいかぬ、有名なる政治家で何人が常に實業に與かつたか、相應に金が出來たならばその上に貨殖を斷念して政治に專にならねば、政治家として見るに値する樣な事はない。

實業に從事するは結構である、一生身を委ぬるもよい、餘暇を以て政治に手を出すもよい、が片手間で面白い事の出來ぬ丈の事を承知して居らねばならぬ。大に政治界に爲す事有らうとならば、これに專なるに若くはない、金の無いものは衣食の計をもせねばなるまいが衣食の心配無く相應の運動費をも辨じ得るならば、專なるべき處を知つて然るべきである。實業界は決して泥水でないが、政治界に出やうとならば、所謂足を洗ふの勇氣がなくてならぬ、兩天秤にかけて思はしい事は出來ぬ。處が實業出身の政客に之を敢てし得るものが有るか如何か、一國の政治は迚も片手間で爲し得べきでない、日本は兎に角世界に於ける一の强國である、其政務に關することを片手間に辨ぜんなどと思ふのは間違つて居る、市民として國家に爲すべきを爲さうとならばそれでも宜いが、政治家として立たうとするに、さる薄志弱行で何事が出來るか、これ迄多少商業で成功し、衆議院に打つて出たものは幾人もあるが、何時の間にか消えてしまつた、久米氏の如きも面白相であつたが元へ引返した樣だ、暫く顏を出す位ならば出さぬがよい、出す位なら思ひ切つて活動するがよい、今後實業家で何人が大に腕を振ふべきかは事實に徵すべきである。成金連中は愉快な事を爲し得る樣だが、左程目立つた事をしたものはない、鈴久はまだ仲々回復は出來ぬ、細野氏は當つた樣で當らぬ樣でもある、彼等こそ或る邊で足を洗ふべきだが持つた性質は六かしいものと見える、或は足を洗つても左迄面白い事がないかも知れぬ。兎に角實業に關係して政治に携はるものは如何なる成績か未解決の姿とすべきで

ある。（談話筆記）

△現代政治に關係ある富豪

松井柏軒

現在著るしく政治に關係する富豪は未だ之あるとを認むるを得ず、米國に於ては大會社又は富豪が富の力を以て政治家新聞紙等を買收し、其の私利壟斷のために政治を左右するの弊今や其の頂點に達せるが如きも、我が國には未だ斯の如く甚だしきもの之あらず。

若し富豪にして、黃金の勢力の大なるに乘じ、之を以て自家の私望を達するがため、强ひて一國の大政を左右して、國家の公利、國民多數の利益を犧牲に供するが如きあらば、實に由々しき大事なるべし。近時黃金の勢力益々增長し、富豪の威福社會全般に漲れるも我が善良なる風俗は尙ほ支持せられて、富豪に大政を左右するが如き野心を抱持するものあらざるは、洵に大幸と稱せざるを得ざる所也。

然れども我が富豪とても、全然政治と風馬牛なるには非ず、彼等は積極的ならざれども消極的也、即ち自家の利勢を增進するため、自から進んで大政を左右せんとする意嚮はなきも、苟くも現在自家の利益を殺減せらるゝが如きあらば、其の存立を危くせらるべしと做し、豫め之を妨止するの目的を以て、政治家並に新聞紙の歡心を得るには疎略ならず。

三菱又は郵船會社側が某々政黨首領に每年一定の生活費を贈與し、時に其の政治運動費を供給するとは、少しく政界の裏面史を窺ふ者の容易に看取し得る所とす。近時豐川良平氏が國民黨の兵站係たりといへる、必らずしも大石、片岡、仙石の諸氏と土佐の鄕黨關係あるに止まらざるが如し、此の他大阪商船、藤田、古河を始め、日本銀行、興業銀行、勸業銀行、東京電車等が隨時議員又は記者に資を給するも、齊しく此の例と看做して可なる可し。

三井家が或る議員、或る新聞記者に、年々一定額を贈與し、或は盆暮每に、或は臨時求めらるゝ每に、若

干の費を給するとも、亦隱れなき事實也、或る新聞記者の如きは、其の新聞社より得る職務俸よりも、却つて三井の贈與が多額なりといふ、此等は皆政治家新聞紙より諸種の非難攻撃を受けざらんがための一種の防衛策に外ならずして、所謂消極的也、或は餘儀なしとして多少寛假するもまた必らずしも非ならざらん。

然れども浸漸の久しきに及び、此等の富豪にして、若し金錢の威力を以てすれば、有らゆる政治家、有らゆる新聞紙皆我が意のまゝなりと信じ、自から進んで之を驅使し、由て以て大政を左右して國家の公利、多數國民の利益を蹂躪せんと欲するが如き野心を萠すに至らば、其の弊や測る可らず、實に寒心に堪えざる也。

△現今の政治に關係ある富豪

田川大吉郎

敢て富豪の門に足を絶つた譯ではない。が、兎角富豪に緣故薄く、且つ又自分の性格も富豪のことを藐視するの傾があるから、其邊に注意が淺い。從て此問題については直接に知る所が乏しい。で、例の通り、自分の觀察を本としての側面觀を述べるに止める。

現代の富豪で政治に最も關係ある一人と稱せられて居る三菱氏と、三菱氏が政界に腕を延した主もなるものと稱せられて居る大隈伯と、此兩者の間に黃金の結び附けの深い事を唱ふる者世間其人甚だ多い。然しながらそれは何の位の程度まで事實なるや私は之を確信し得ない。自分の知る所又信ずる所では、此關係は存外薄いものではなからうかと思ふ。

然し嘗て林董伯の說を聞いた事がある。其觀測によれば岩崎氏の一大悲運に際會した時に之を救ふたのは大隈伯である。當時大隈伯は岩崎氏を活すことも殺すことも出來た。鄕純造なるものは大隈伯の次官として岩崎氏の爲めに多少の事を爲したに過ぎない。然しながら岩崎氏は鄕氏を得として鄕の爲めに巨萬の資本を融通したるは隱れもなき事實である。それ程恩誼に厚い岩崎氏が鄕よりも更らに多大の恩願を受けた大隈伯

に何もしないといふのは信ずべからざることである。世間のいふが如く大隈伯の臺所には岩崎氏の金が通ふのは事實であらうといつた。斯ういふ説はいろ〳〵の人から聞く。其一派の人は確かに其れを信じて居る。之を前にしては陸奥伯もさう信じたてあらう。又星亨もさう信じたてあらう。政友會に關係ある前後の人はさう信じて居るてあらう。然し其れを信じ得る根據を私は他の方面て發見しない。政界の最も顯著なる以上の事柄に對しても私はかゝる立場に居るが故に、其他の事については知る所一層薄い。

只私の信ずる所に於て現今の政治に最も關係の深い富豪は三井家と大倉喜八郎氏てあらうと思ふ。其他藤田傳三郎氏が政治に關係あることは私は之を信ずる。然し政界に縱横に其手腕を揮つたのは過去の事て今日ては餘り深い關係もなく、又關係をつける意志もなからうと思ふ。今日ては矢張り三井家と大倉喜八郎氏が其尤なるものてあらう。三井及び大倉が何が故に政界に關係あるかといふに商賣の性質之を然らしむると思ふ。商賣が政府と關係深くあつて、政府の一笑一顰の影響を受くる故であらうと思ふ。而して富豪の長所とする所は金錢の外になき故に、之に近くに當つては金錢によつて其目的を達せんとするは自然の事てあらう。辯者が辯舌を以て、學者が學問を以て、美術家が美術を以てすると同樣てある。其爲めにお役人の幾分が毒せられて、與ふべからざるの利益を與へて居る。之も事實てあらう。此程度まて富豪の力が政界に及んて居ることは明かに認める。

然し其れ以上、内閣の存亡浮沈に對して現在の富豪が力を揮つて居るとは私は認めない。其理由は現在の富豪は政治に向て其れ程の野心が無い。政府と一部御用商人の尤なるものとの關係は何れの政府を通じても同一てある。例へば伊藤内閣ては御用商人を遠ざけ桂内閣ては御用商人を近けるといふ事がない。歴代の内閣は皆御用商人を近ける。内閣が違へば御用商人の違ふことがとあるかも知れないが、内閣に御用商人あるは何れの内閣ても皆同一てある。御用商人は其目的を達

する方法を何れの內閣でも發見し得るので、新らしく起る內閣については大した注文野心がない。又富豪が其位置を利用して內閣を改造せんと公然起つとする時は、日本の政治組織微弱なりと雖も巨大の資金を要する。日本の富豪に堪へるもの幾らもない。稍々其力あるものは三菱三井の二三氏であらうと思ふ。而かも三菱氏の事業は政府に直接の關係を有することが薄い。所謂御用商人的なるものは甚だ少い。三菱氏の立場から夫れ丈けの事をする必要がない。其れが第一の理由ならんと思ふ。第二の理由は矢張り日本國民は富豪を嫌ふ傾向がある。此傾向の內面には廉耻の氣風他の國民より秀てゝ居る爲めだとは私はいはぬ。金錢を輕んじ、富豪の階級を素町人として卑しむ習慣が歷史的にあるから、一方富豪ならざる階級から富豪を見る時自然に之を尊ばない。今一つは富豪の階級自身も遺傳的に素町人として立ち修養人格に於て缺くる所がある。今日の富豪に文學、宗教、政治若くは社會問題を談ずると、索然として興味を感じない。故に他の階級の人はどうしても之を輕ずる。夫れにも拘らず富豪が若し斷然起て政治運動を起すといへば他の階級から之に反抗するは自然である。夫れ故に富豪がさういふ計畫を起して資本を投じても其結果少きの實情は富豪がよく之を知つて居る。從て現代政治に關係が薄い。私はさう見て居る。

然し近代の立法は富豪を本として計畫せらるゝの傾がある。但し富豪標準の立法などいふ事は截然として區劃せられぬが、一般の傾向からいふとさう見ても差支ない。其事を最も手近に證明すべき一つは、日本の議會には國民の生活問題が更らに考へられない。生活問題の切要を感ずるものは所謂貧民階級である。貧民階級の現狀又は開發を念とするものは直ちに生活問題を惹き起さゞるを得ない。議會開けてより玆に廿年、若し貧民階級に心を用ふるものあれば、生活問題に對する立法事業は夙くに計畫せられた筈である。處が政府も之を意とせず、民間政治家も之を意とせず、今日の議會には更らに生活問題があらはれない。歐米の近

年の議會現狀と比較して意表外の感がある。生活問題のあらはれざる一方に資本家の權利、利益、資本家團の企業に利益ある事業は着々としてあらはれて來る。例へば今期の議會に於ても工場法案の撤回せられた理由は一方には勞働者側の權利を增進したといふ一方には資本家側の權利を增進したいといふ希望がある。此二つの考が相衝突して撤回したと見るより外はない。提案せられたる工場法案其物が已に資本家側の利益に着目せられた法案である。それすら資本家を保護する厚からずといふ理由の下に撤回せられたるは意外の一てある。電氣法案の不成立も亦然りてある。事業者側の利益を保護する意志と一般需要者を保護する意志との衝突であつて、政府側は需要者を保護する意志であつたが、議會は事業者を保護せんとの事にて終に不成立に了はつた。そんなら政府が需要者側を保護する意志が充分であるかといふに、さうてはない。現在慣行する實際を法律に纒めたに過ぎない。現在の政府は電燈會社の價格律を定むるに當つて干渉し得る實際になつて居る。政府は干渉の權利を現に行うて居る。今日東京電燈會社の定めて居る價格は全國第一世界無比に高い。電氣法案が幸に成立して政府が其權力を明白に行使し得るにしてもその價格は今日以下に下らない。今日の價の程度は政府の認むる所である。されば今日の政府も事業家を保護する意志もあつて決して需要者のみの利益を計つたものではない。それに尙事業家を保護する厚からずといふ。今日の立法事業は總てさういふ方面に進んで人民の利益を念としない。富豪が直接に政府を顚覆若くは改造せんとするの念がないが、日本の政治上社會上に於ける權力は今後益々增進するてあらう。私は將來の趨勢をさう觀測するけれども彼等が政治に趣味を感じて直接に政治運動を起すといふ事は、どうも近き將來にあるまいと思ふ。

今日の政治家て、富豪の仕送りを個人的に受けて居るものは或は大石、犬養、原などであるといはれる。自分は其眞僞を知らない。然しさういふ關係は今後にもあるてあらう。然しさういふ人が今後大いに殖える

てあらうとは思ひ得ない。それについて、例へば政友會が幾何の維持費を要し、或は活動費を要するか。國民黨は如何といふ實情は自分は知らぬ。歐米では政黨の費用は不可解なりといはれる。日本でも亦不可解の一であらう。只日本の事は歐米に比べると何時でも小スケールであるから、歐米の政黨程大費用をかけて居ない事は事實であらう。

私の見る所で今日の政治を毒する金は、若しありとすれば矢張り政府關係であらうと思ふ。富豪が出すのか政府自ら出すのか、其金の高は分らないが、其金のあつた事は否認すべからざる事である。私の推測する所によれば富豪の懐より出てたるよりも政府が遣り繰りしたものと見るのが事實に近からうと思ふ。現代の政治に關係ある富豪の實情を調査し、其内容を摘發して將來を戒めるよりも、もつと財政に注意して政府の政界に對する不當の措置に注意することが一層必要かも知れない。私は日本の富豪は西洋の富豪よりも小心であるから餘り多く意とするに足らぬと思ふが、日本の政府は歐米先進國の政府よりも寧ろ不謹愼亂暴であるが故に、警戒を嚴にする必要ありと感ずるものである。（完）

△現今の政治と富豪

○學博士　草莽の人

岩崎家は從來政治に關係深かつた家で伊藤公と大隈伯を聯結せしめやうといふのは先代の熱心に考へた所であるらしい。又後藤伯などゝも關係があつたと思ふ。又加藤高明氏の後楯となつて居ることは公然の秘密である。今日の久彌氏は個人としては餘り政治に關係せぬやうであるが、其番頭ともいふべき豐川良平氏はなか〳〵政治に趣味を持つて居る。今日でも大石、犬養の二氏には月々いくらか宛をやつて居るといふ事である。然し之は岩崎家としてよりは寧ろ豐川氏と友人であるといふ個人的の意味からであらう。が今度の國民黨の成立などには確かに豐川氏が黒幕となつたて

あらう。片岡、仙石などの所謂土佐派の後ろには豊川氏のある事は疑を容れぬと思ふ。又東京日々新聞には今でも毎月三千圓づゝやつて居るといふ噂がある。其眞僞は知らぬ。

三井家は井上侯の關係からして政友會の或部分と關係を持てゐるらしい。

古河家では勿論原敬に向て可なりの政治運動費を出して居るに違ひない。原敬の政友會に於ける勢力は其金によること少くない。原敬マイナス古河はどれ程の價値があるか餘程の疑問である。然し之も多くは個人的若くは因緣的關係があつて政治上の意味は乏しいと思ふ。

巴里にはプラス、ド、ラ、ナッションといふ所があつて、猶太人が大きな建物を有し、其中で貨幣僞造をするが其周圍の警官なども總て買收せられて居るので、政府も之を奈何ともすることが出來ないといふ事である。之れは單に噂に止るかも知れぬが、佛蘭西に於ては富豪たる猶太人の政治的勢力はなか〱容易ならざるものがある。幸にして日本には從來斯の如きことがなかつたが、然し多少の私を營むといふ事は想像せられる。況して物質的文明の進步に伴うて黃金の勢力が增加すべく、從て富豪の勢力も亦增加せんとするの傾向は免れまい。之は大いに戒むべきことゝ思ふ。

△現今の政治と富豪

松山忠次郎

今の富豪で政治の趣味もあり又野心もある人はまアないやうである。故岩崎彌之助男はなか〱其方の趣味のあつた人で伊藤大隈聯合內閣を作ることが其素願であつたらしいが思ふ通り行かなかつた。今の岩崎久彌といふ人は其方には餘り關係がないやうだ。然し其岩崎家の大久保彥左衞門ともいふべき豐川良平氏は身は實業家であるが、なか〱風變りな人で、政治上の趣味も極めて多い。今日岩崎家が大石とか、犬養とかいふ人に每月いくらかづゝ與れて居るといはるゝのも、

つまり豊川氏が個人的に昔の友人を助けて居るといふ位の意味かも知れない。先づ私の知つて居る範圍で實業家で政治に關係ある人といへば豊川氏が其尤なるものと信ずる。

之について一寸面白い話がある。先日或所で豊川氏がいよ／＼政治界に打つて出るといふ噂を聞いた。私は驚いて先生を止めに行つた。先づ其噂の眞僞を訊すと、なァに其れは全くの嘘だ。僕には政治家たる資格の三つを缺いて居る。第一年齢が少し取り過ぎた。人が何か新らしい事をやらうと思へば五十前でなければならぬと思ふ。近頃までは六時過に起きた事がなかつたが、此頃はどうもさう行かぬ。體量を減つた。今少し若ければやつたかも知れないが、先づ其點が駄目だ。第二には政治家の妻君は少し姐さん肌で良人が留守でも牛肉にお銚子位を出して有志家などを御馳走する位でなければならぬ。僕は其點も資格がない。第三は今忘れたが何でも面白い説だつた。それで吾輩は斷念したといはれたので、それは結構です、あなたは銀行家實業家としてはエライ人だが政治界に乘出してはどうかと思ふ、第一辯もおわるいし、おやめになつたのは至極結構だ。若し噂が本當ならば、お止め申さうと思つてやつて來たのです、とて大笑ひをした。

豊川氏にして然りとすれば先づ今の富豪及び實業家にして政治界に大いなる働をなさうといふ人は先づなからうと思ふ。

又金持が個人として自己の金を撒き散らして大いに政治上の運動をするといふ事も、日本では先づなからうと見てよいと思ふ。只將來恐るべきは會社などの政治的運動であらうと思ふ。先年東京市街鐵道の市有説の時などは私はいくらか危惧の念を以て居た。僅か六千萬圓の資金の會社でも市の役人を買收するなどは譯のない事だ。若し今後續々大きな資本の會社が出來るとしたら、議員を買收することも左程の難事ぢやあるまいと思ふ。これは非常に寒心すべき事だ。然し昨年の日糖事件は幸に此點を矯正するに大効のあつたもので、議員なども大いに戒めるやうになつた模樣だ。現

に廿六議會などには隨分利害の大いなる問題があつたが比較的腐敗の事實が少いやうだ。税法改正や關税問題などの大問題でも存外醜聞がないやうである。之れは確かに日糖事件の影響であつて、大いに喜ぶべきことである。今後大會社が起つた時も充分注意して、腐敗沙汰のないやうにしたいものである。先づこんなお話で御免を蒙ります。

△富豪と政治

石河幹明

富豪と政治との關係について世間ではいろ／＼にいふけれども、私の見る所では兩者の關係は極めて冷淡なものぢやないかと思ふ、外國では、殊に亞米利加では富豪が非常な事をやる。金をウンと使つて政治上の大運動をやる。その爲めには世間がなか／＼八釜しくなる。前大統領ルーズヴエルトなどは所謂ツラスト征伐といふ事をやつた。今の大統領タフトも亦それを受繼いでやつて居る。然しどうも其目的を達しない。相變らず富豪がドン／＼政治運動をやつて居る。處が日本の富豪は殆んど政治上の關係が無い。もつとやつたらよからうと、傍から見ても多少齒痒いやうにも思はるゝ。今の日本の富豪は、政治に關係があるといはるゝことをさへ避ける。若し關係ありとすれば請托、歎願位のもので、其れすらも、さう見らるゝ事を避けんとする位小心翼々として居る。大びらに金を使つて政治運動をやらうなどゝは夢にも思つて居ない。

富豪が政治に關係することがよいか惡いか、それは私は知らぬ。寧ろ惡るい事かも知れない。然しよいかわるいか別問題として、人間には野心といふものがあるものだ。富豪だつて人間だ。それに政治關係は最も廣い。今少し自己の思ふ處を政治に向つて明らさまに要求したらどうか。隱れてオヅ／＼して居るのは何となく齒痒く思はれる。

以上述べた如く私は日本の富豪は現今の政治に關係がないと思ふ。若しあれば請托、歎願であつて、昔の

素町人がお上の憐みを乞ふと同じ樣子だと思ふ。

又富豪といつても、日本のは皆小さい。又數も片手の指を屈する位しかない。だからやらうとしても餘り大きな事は出來ないかも知れない。又元來日本人は金持を嫌ひてある。金持になれば勢力がなくなる。金持の威張れない割のわるいことと日本の如き國は他になからう。金持のした事は大抵のことは惡るくいはれる。これが又日本の富豪の政治に手を出さぬ一原因となつて居るかも知れない。

△日本の富豪と政治

池邊吉太郎

富豪といつても日本の富豪は外國のに比べると小さい。又大體からいつても富豪が政治に注文するよりも、政治家の方から富豪に要求する分量の方がまだ大きいだらう。

現今の政治に關係ある富豪といつても、今日金持の階級で直接に政治に關係して居るものは、御承知の通りまア主もなる銀行家である。戰爭の爲めに日本が金を餘計に借りた。其爲めに銀行家は政府から御用を仰付けられて居た。だから、どうかこうして呉れろと銀行家がいへば、いくらか其要求も聞いてやらねばならぬといふ事もあるんでせう。然し銀行家も案外さういふ事をせぬ樣だ。稅法改正などについては隨分注文もあつたらうが、大した事もない樣だ。

只まア實業家の方から——富豪づらをしながら案外さうでないものもあるから實業家といつて置かう——一番出て來さうな問題は、茫として居るが、保護の要求だらうと思ふ。富豪の十中の六七までは保護主義である。別に根底のある議論ではないが、機に觸れ事が起れば保護の要求が出て來る。先づ日本一か日本二かの岩崎家などは保護の力で大きくなつたものだから日本の金持は其味を忘れない。尤も岩崎家の保護には政府自ら持餘して、政府自ら之を叩付けやうとして共同運輸會社を作つた。然し三菱は政府に勝つて、非常

に有利な條件で共同運輸會社を自己に合併してウンと儲けた。日本の金持は其保護を忘れ兼ねて居る。つまり貰ふ方の保護だ。

關稅保護の要求なども何處へら邊まであつたか、此前の議會は案外淡泊であつた樣だ。けれども將來の事は一寸分らない。

それから富豪の中でも製造工業をやつて居るものは――製造工業に關係ない富豪もなからうが、主として製造工業をやる富豪は――必らず保護主義の味方となるに違ひない。これは日本ばかりでなく、何處の國でもさうだ。これ等の保護を要求する富豪が政黨などに對して、どんな事をするんだか隨分危險でない事はない。

それから富豪にして政治に關係して居るものが多少ある。まア保護の世話を焼いて呉れたお禮心とか、其他いろ〳〵な因緣から、個人に對するサッポートを與ふる事がある。別に何等の注文もなく與へて居るのもあるし、又未來の注文を出す序開きとしてサッポートして居るのも多少あらう。其外には私の目には餘り兩者の關係が入つて來ない。

△現今の富豪は政治に關係なし

△△子

現今の富豪にして政治に關係あるもの實際あるてあらうか。吾輩は一人もなしと斷言するを憚らぬ。現今の富豪は政黨とも全く沒交涉である。これは政治家の理想が低い爲めであつて、今日の政治家といふものは富豪の目には甚低く小さく映る。大石とか、犬養とか三菱からいくらか貰つて居ると聞けば大變之を羨んで居る。政治家も亦三井とか三菱とかに關係あるといはるゝことを名譽として居る。つまり富豪の應援あることを誇として居るのである。こんなケチな考でどうして富豪から尊敬を受くることが出來るか。尊敬を受けずして如何にして富豪を大いに利用することも、又大

いに利用せらるゝことも出來るか。其點から見れば今の富豪の政治に關係なきは寧ろ當然といつてもよからう。

一例をいへば郵船會社て航路補助の問題て金を出した事があるが、其出し方もケチ、其取り方もケチて全くお話にならない。政治家は唯自己の現狀維持が目的て、積極的にウンと金をとらうなどゝいふ事をしない。此間も「中央新聞」が政友會に買はれたについて、誰が金を出したどらうかといふ事を話し合つたが、いろいろな說があつた。ヤレ野田卯太郎によつて三井から出した、ヤレ原敬によつて古河から出した。ヤレ西園寺によつて住友から出した。いろ／＼な說が出た。我輩は皆之を否定した。果せる哉此頃になつて三井も古河も住友も出して居らず、佐竹作太郎が電燈會社の爲めに一二萬出した丈けて、大岡が持餘したものだから只形式を變へたのだといふ事が分つて來た。

彼の郡制廢止案の時てあるが僕が一番に大同俱樂部の臼井哲夫や神崎東藏などを說いて進歩猶興、大同の聯合軍を作らうとし、約千圓ばかりをかけて木挽町の榮家て會合を開いた。處が十一名ばかりは政友會から買收されんとした。そこて止むなく一人平均千五百圓ばかりをやつて之を止めねばならず、即ち二萬圓ばかりの金が要る。大石や犬養なども夜の一時頃まて相談したが、現なまは出來ず、銀行手形ならばよいが、といつた爲めに事は破れた。此爲めに政友會反對聯合軍が破れ、終に料理屋の代まても我輩等が拂ふといふ事になつた。此時に政友會が何處から金を出したかといふ事が此頃につて分つたが、栗生武右衞門が二萬五千圓、鈴木久五郎兄弟が泡沫錢と見かけられて、五萬圓をとられ、古河からは岡崎邦輔の手を通じて僅かに五千圓出したばかりてある。そして鈴久には殆んど一言の禮もいはぬといふやうな有樣てあつた。あの案の如き天下分目の政戰にも今日の富豪が全く金を出して居らぬ。以て知るべし現今の富豪の政治上何等の趣味なく何等の野心なき事をてある。富豪の政治に手を出さゞるは或は天下の利益かも知れぬが富豪の意久地なき

事も亦驚くべしてある。三井や三菱や現在以上に大發展せざるは皆政治家を利用することを知らぬからてある。

千家尊福は兎に角木曜會、二七會を提げて居る人て男爵議員は多く彼の命によつて動いた。彼はその爲めに西園寺内閣の一椅子をも占めたのてある。其千家が百萬圓の負債がある。然るに其れを救ふ人が無い。野田が三井から、原が古河から、西園寺が住友から引出しても何とか出來さうなものてある。兎に角政界一方の牛耳を取つた人てあれば之を利用すれば利用するの道もあらう。然るに僅かの金て之を見殺にする。政治家も富豪も自己の權利を主張することの臆病なる寧ろ笑止の至りてある。現今の政治に關係ある富豪などいふ問題を掲ぐるは富豪を買被るものてあつて現今の富豪は政治上に何等の關係なしと斷言するのてある。

△政治と富豪

伯爵　大隈重信

政治家と富豪と結托して互に私利を營み合ふなどいふ事は、元々有るべき筈のものてなく、有つても段々過去の事になつて行かねばならぬ、現在とて多少は有りもしやうが世間て言ふ程のものてない。一體金を使ふことは政府より多いものはない、カーネギーが如何の、ロックフェラーが如何の、彼等の富は王侯を凌ぐなどといつても國家程には金を使はぬ、幾ら使つたとしても之を國家の大經濟に比べれば誠に九牛の一毛にしか値せぬ、富を作るものはセッセと工夫し勉強して作るのだが、國家は唯之を强制的に捲上げて大規模に費消して仕舞ふ。其處へ行くと三井や三菱は誠に小さなものてある、日本は小國だとか、財政が困難とかいふけれども、猶ほ一年に六億五千萬も使つて居る。大したものだ。

何處に一番澤山使ふかといへば先づ國防だ、次いて

は鐵道、電信、電話等の運輸交通機關て、此中鐵道は國有、郵便電信は官營、其他鹽、烟草は專賣である、此等には大金を拂ふ、其他に保護を要するものもある。又夥多しき大きな建物をも持つて居る、色々の仕事をすればそれに要する器械の購入も必要てある。それ等に消費する金は莫大なものだ。如何な大會社て支店や分店が澤山あるといつても、今の常備軍位のものが殘らず行つて働ける樣な所はない。其他政府自ら色々な仕事をする、造幣局ては貨幣を造る、印刷局ては紙幣や印紙を造る、何や彼やて歲出は六億五千萬から七億圓にもなるだらう、其他府縣、市町村ても敎育とか土木とか衞生とか、費用を要する高は夥多しい。此等をも算入するなら八億以上にもなる、處て此大金が皆一々商人の手を經る、物を賣る、商人。物を買ふ、商人。といふ有樣、て大金持が御用達といふ事になる。御用達に接するものは官吏だから、從つて官吏は幅が利く。小さいながらも我輩の處へもやれ豆腐やの酒屋の薪屋のと御用達商人が來る、それに接するお爨どんは矢張り幅を利かすが、それが國家といふ大きなものの關係に於ては尙更だ、御用商人の益する處は單に賣るの買ふのの間だけぢやない、其外に色々の特許がある、材木の購入、其下請けとか拂下とか、其他尙ほ色々の事がある。色々の事を申込んて來る、「之は一身の私から申すては無く國家の御利益からしまして云々」などと持ち込んで來る、それ等の衝に一々當るのだから自然に勢力が生ずる、所謂幅が利く、幅の利く處には門前自ら市を成す、此等の仕事には自然にサイトリなるものがある、それをば近來は政治屋なるものがあつてやつて居るとの噂がある。門前愈よ市を成す。斯う見て來ると、官吏と商人との間には關係の有るものだらう。其處て外間から見て商人は官吏によつて儲けるから、其一部分は官吏も懷に入れるんだらうとの疑惑を入れる事になる、之は今日のみてはなく歷史に於て常に見る處だ。此に於てか左樣いふ事の無い樣にと戒める、一點疑はしき處が官吏の身に有れば、事それ自身に於て甚だ小なるものだとしても影響する處が廣いからし

事も亦驚くべしてある。三井や三菱や現在以上に大發展せざるは皆政治家を利用することを知らぬからである。

千家尊福は兎に角木曜會、二七會を提げて居る人て男爵議員は多く彼の命によつて動いた。彼はその爲めに西園寺内閣の一椅子をも占めたのてある。其千家が百萬圓の負債がある。然るに其れを救ふ人が無い。野田が三井から、原が古河から、西園寺が住友から引出しても何とか出來さうなものてある。兎に角政界一方の牛耳を取つた人てあれば之を利用すれば利用するの道もあらう。然るに僅かの金て之を見殺にする。政治家も富豪も自己の權利を主張することの臆病なる寧ろ笑止の至りてある。現今の政治に關係ある富豪などいふ問題を掲ぐるは富豪を買被るものてあつて現今の富豪は政治上に何等の關係なしと斷言するのてある。

△政治と富豪

伯爵　大隈重信

政治家と富豪と結托して互に私利を營み合ふなどいふ事は、元々有るべき筈のものてなく、有つても段々過去の事になつて行かねばならぬ、現在とて多少は有りもしやうが世間て言ふ程のものてない。一體金を使ふことは政府より多いものはない、カーネギーが如何の、ロックフエラーが如何の、彼等の富は王侯を凌ぐなどといつても國家程には金を使はぬ、幾ら使つたとしても之を國家の大經濟に比べれば誠に九牛の一毛にしか値せぬ、富を作るものはセッセと工夫し勉强して作るのだが、國家は唯之を强制的に捲上げて大規模に費消して仕舞ふ。其處へ行くと三井や三菱は誠に小さなものてある、日本は小國だとか、財政が困難とかいふけれども、猶ほ一年に六億五千萬も使つて居る。大したものだ。

何處に一番澤山使ふかといへば先づ國防だ、次いて

は鐵道、電信、電話等の運輸交通機關て、此中鐵道は國有、郵便電信は官營、其他鹽、烟草は專賣である、此等には大金を拂ふ、其他に保護を要するものもある。又夥多しき大きな建物をも持つて居る、色々の仕事をすればそれに要する器械の購入も必要てある。それ等に消費する金は莫大なものだ。如何な大會社て支店や分店が澤山あるといつても、今の常備軍位のものが殘らず行つて働ける樣な所はない。其他政府自ら色々な仕事をする、造幣局ては貨幣を造る、印刷局ては紙幣や印紙を造る、何や彼やて歲出は六億五千萬から七億圓にもなるだらう、其他府縣、市町村ても敎育とか土木とか衞生とか、費用を要する高は夥多しい。此等をも算入するなら八億以上にもなる、處て此大金が皆一々商人の手を經る、物を賣る、商人。物を買ふ、商人。といふ有樣、て大金持が御用達といふ事になる。御用達に接するものは官吏だから、從つて官吏は幅が利く。小さいながらも我輩の處へもやれ豆腐やの酒屋の薪屋のと御用達商人が來る、それに接するお爨どんは矢張り幅を利かすが、それが國家といふ大きなものの關係に於ては尙更だ、御用商人の益する處は單に賣るの買ふのの間だけぢやない、其外に色々の特許がある、材木の購入、其下請けとか拂下とか、其他尙ほ色々の事がある。色々の事を申込んで來る、「之は一身の私から申すては無く國家の御利益からしまして云々」などと持ち込んで來る、それ等の衝に一々當るのだから自然に勢力が生ずる、所謂幅が利く、幅の利く處には門前自ら市を成す、此等の仕事には自然にサイトリなるものがある、それをば近來は政治屋なるものがあつてやつて居るとの噂がある。門前愈よ市を成す。斯う見て來ると、官吏と商人との間には關係の有るものだらう。其處て外間から見て商人は官吏によつて儲けるから、其一部分は官吏も懷に入れるんだらうとの疑惑を入れる事になる、之は今日のみてはなく歷史に於て常に見る處だ。此に於てか左樣いふ事の無い樣にと戒める、一點疑はしき處が官吏の身に有れば、事それ自身に於て甚だ小なるものだとしても影響する處が廣いからし

て弊は甚だ大てある、即ち政府に對して事實何事も無き事迄疑はれる結果になる。

例へば官吏が瓢屋に行つた、新喜樂に行つた、やれ何處の待合に入つた、其待合に美人が居る、彼奴が怪しいと言つた調子、之は昔から有り勝な事、元はといへば政府が一番大金の消費者だからてある。其間に多少は變な事もあらう、權助やお爨どんても商人から多少の心附けを受ける、すると一升十何錢とかいふお米を正直に其値に賣つては儲からぬ事になる。勢ひ八分か其處らて胡魔化す、即ち不正桝を使ふて見附かるといふ樣な事になる。大體が何處かてワヤクをせなくては駄目な話なのだ、一萬圓のものを收めるに千圓も二千圓も間て取られる、處が商利は正當には大抵一割か二割のもの、之を一割として問に二千圓も使つたとすればあべこべに商をして千圓の損をする事になるが、誰ても損する爲に運動までして商をする馬鹿はない、如何しても不正な事をやるに相違ない、一萬圓の石炭を收めて其定價は八千圓位の處て置く、或は相謀つて目方を胡魔化して無事に濟ますことをもする、之は常に附纏ふ弊てある。それ故昔から行政に伴ふ弊害として、西洋ても支那ても日本ても之が廻避に勉めて來たものだが、油斷をすると直に其弊が生ずる。

それて又初中終猜疑の眼を其間に向ける事になるから色々な風評も立つが、併し世間の言ふ程の事は無いと思ふ、兎に角之は各自の克己心と並に社會の嚴密なる制裁とによつて防止したいと思ふ。昔から此弊の百出猶ほ今日に於ても烈しいのは支那で、殆んど回復の道なき痼疾となつて居る。彼樣にまてならぬ樣にせねばならぬ、彼樣に迄なつたら藥は駄目だ、外療的にやる外はない、外療的にも程度がある、我輩の如くに變脚なくても働ける、否双脚なくても四肢盡く無くても腦さへあれば働けるが、遂に首まて搔かれては駄目だ、それは死てある。外療も左樣迄せなければならぬ程ては叶はぬ、處が支那は其首さへ切れ相だ、之は米國あたりにもある樣だが、併し病があると又それを治す方がある、矛盾せる二つのものが並び存して居るけれど

罪惡に打勝つ良心の方が幾分か强い樣だから其極には至らぬ。ルーズヴェルトの如きが居て、尋常ならぬ手段により絕大の奮鬪力を鼓してやるが、時としては其旗色の惡い事がある、日本なども物質的文明が進み、政府が追々大金を使ふに從ひ危險の度は益々大きくなる。

世の中では擧動が少し可怪しいといつては騷ぐが左樣迄はなくもがなだ、彼の不景氣な年寄つた老爺と彼樣な妙齡な美人その間に愛の成り立つ道理がない、探つて見たら御用商人の某が橋渡しだ、彼奴が何かの目的があつて美人を老爺さんに進めたに違がない、其目的といふには魂膽があらうなどと、直に斯樣だ、併し七十の老爺に二十の娘が、手に手を取つて駈落などいふ事は先頃の新聞にも見える事實、愛は常規を以て律すべからざるもの、必ずしも年齡の大差ある間には成立せぬと限つたものでもない。其樣な外形だけて惡推量してはいけぬ。政治家と富豪の間には常に惡事が行はれると思ふのは間違だと思ふ。（座談）

△政治と富豪

尾崎行雄

現今の富豪にして當代の政治に關係あるものはないと思ふ。亞米利加あたりでは富豪が政治上の大運動をやるが、日本には政治上の趣味あり野心ある富豪といふものは殆んど見當らない。

一體日本に於て最も大いなる金の集る所は政府で、今日では租稅の高に比ぶべき金を持てるものは一人もない。從て政府は最も大いなる事業家で、富豪といふものも、詰りは政府の御用を仰せ附けられて大きくなつたものが多く、又それが一番賢い致富の法であらう。て、日本の富豪といふものは政府やお役人に取入つて、其鼻息を窺ふことは知つて居るが、自ら政治をどうしやう、こうしやうなどいふ氣は全くないやうである。

人或は或富豪が或政治家に向て每月幾何かづゝを與へて居るといふやうな事を聞いて富豪と政治との關係を云々するものがある。例へば大石や犬養が三菱から

貰つて居るのはどうだとか噂する。然しあれは豐川良平が同郷の友人に個人的に與へて居るものだらうと思ふ。今日の政治家を利用して更らに自己の懐を肥やさうなどいふ富豪は今の處ないやうである。然し、金持も追々代が變つて來て、金を作つた人の子や孫が新たなる主人となり若くはなりつゝある。さうすれば今後の富豪が如何なることをするか一つの疑問ではある。此等は注意して置く必要があるかもしれない。

△當代の政治と富豪

烏有政客

元來日本には士農工商の別があり、富豪は被治者の位置に居り、三百年の久しき殆んど政治に干與する事なく、常に爲政者の爲に利用されて用金調達の機關とされて來て居た、それて格別海外諸國に見る如き醜態もなく、政治が富豪に左右された著しい例とては無かつた、之あるは寧ろ近世からて、爲政者は富豪をして成るべく政治に興味を有し、政治に干與する樣にと仕向けた、即ちタトへバ貴族院の多額納税議員なるものを置くの制度を設けた如き、元と左樣にすべき何等の意味のないことだ、

昔は政治が單純に、唯條理て行つたものだが世の進むと共に左樣ばかりは行かず、金權が政治の上に於て、事の善惡共に大なる働をする樣になつた所から、富豪と政治との關係は一層親密を加へて來た、先づ代議政體始まつて以來鋭く國人の記憶に存するものには二十五年の選擧干渉がある、之は一方には富豪を勸誘して金を出させると共に、又一方には富豪を推立てて代議士にするといふ樣な事を、政府が窮策としてやつたのてある、これ以來政府の弱點は富豪に見すかされ、從つて政治が彼等の營利にも利用されるといふが如き關係が生ずるに至つた。

井上侯の如きは常に三井などいふ富豪の團體を率ゐて他に當つて居り、其勢力は何の內閣を問はず、皆陰然たる一敵國を以て之を目して居る程である。それ故

今日は各種の政治問題も徐ろに解し見れば皆富豪の關係せぬものは無い、政治が富豪を利用して其政治上の施設に便益を計る處あれば又富豪に左右されて其營利上の目的を助けることをもする。近く亞里山問題の如き、政府が彼の樣に苦心慘憺して其の案の通過を議會に謀つた如きも、要するに只一富豪の藤田に對する義理に過ぎぬのだ。凡ての經濟上の施設にしても今の處ては何事によらず、其利益に關する方面から靜に觀察して見ると三井家が至大の勢力を揮つて居る、即ち半面の政治上の勢力なるものは常に三井が之を掌握し居るの觀がある。三井と井上。井上の事といへば直に三井と判斷してよい程の有樣である、鐵道の運賃の如きも九州の炭業者は擧つて鐵道運賃の値下を請求したけれど、北海道との比較からして政府は其請求に應ぜず、そして北海道の運賃を上げた位である、然るに九州の方は上げぬと明言して居たに拘らず、一ヶ月立つか立たぬか、唇の未だ全く乾かぬ中に其明言を取消して上げてしまつた、之は何の爲かといへば井上が其間に居り、偏に三井其他富豪の爲に働いた結果である事は夙に京童にも知れて居る話だ。

けれども其利害得失を考へ見るに、實業者等が政治に關係を持つに至つた害が將來迄に左迄に憂ふべき現象を呈すべくも無い事は特に之を幸とする、否一方から考へれば富豪若くは實業家なるものが、政治を對岸の火災視し、毫も己れと相關せざるものの如くに思ふた時代は過ぎ去つて、政治に興味を有し、注意を拂つて來たことは、産業の發達上將來大に利益ある事と思ふ、只當局者に緊褌一番を要する丈だ、それさへシッカリして掛れば寧ろ之を善用することが出來る。

さらば政治と富豪との關係は今日の狀態で永續するかといふに左樣とは思はぬ、近き將來に於て富豪と政治の關係は一變し、それに因つて大主義を分割する階梯となると思ふ。即ち政治上からいへば二大政黨の形成。富豪よりいへば二大利益の割定に至る大勢を馴致すると思ふ。此の如きは強ち國家の害ではなく、寧ろ國運の一進步を來すことが窺ひ知られる、それは何故

といふに、現時の富豪の狀態を見るに、曰く安田、曰く大倉、曰く藤田、曰く何と幾らもあるけれども、就中屈指すべきは三井。三菱。之を兩大關とする。

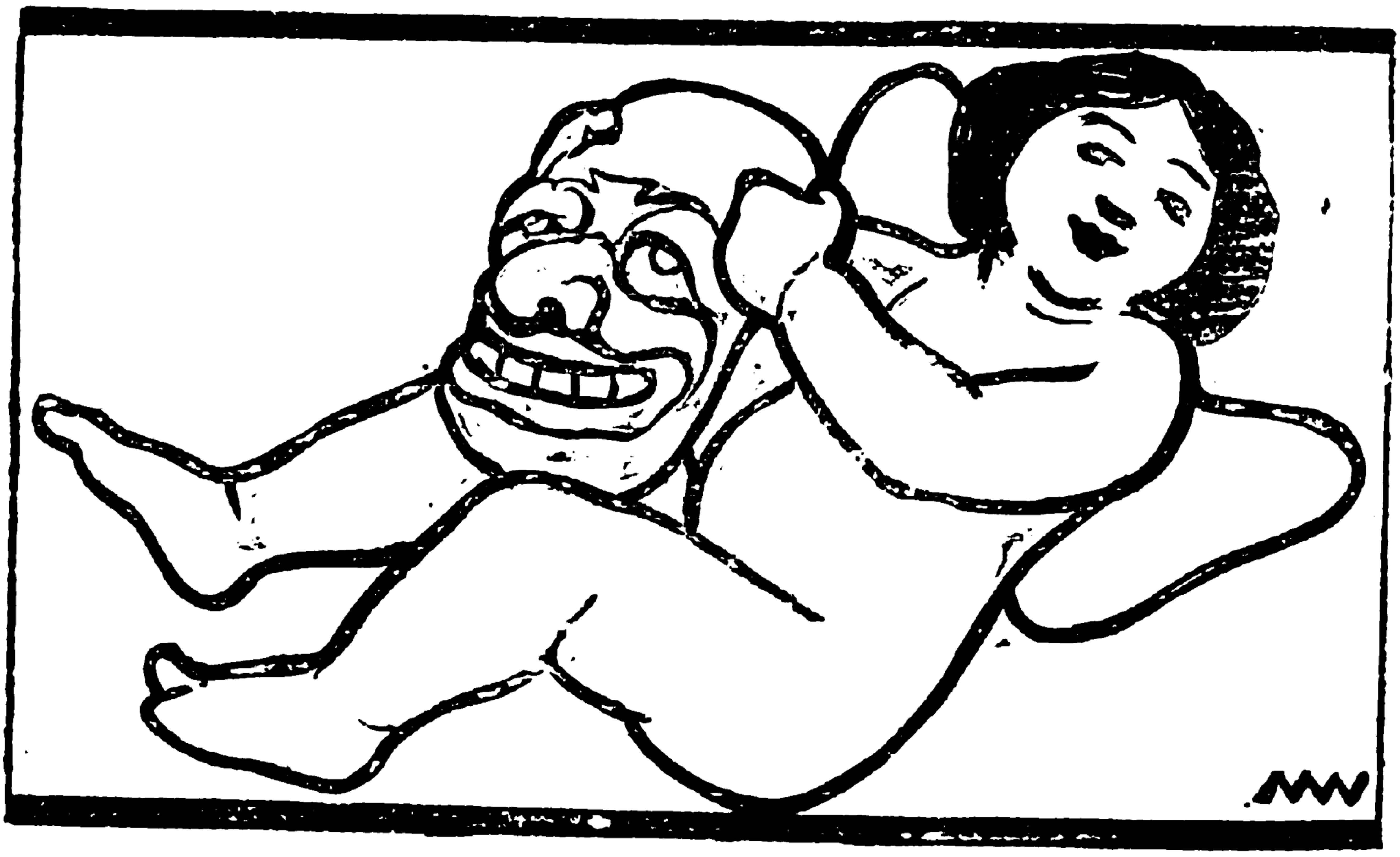
三井は實に今日全盛を極めて居り、一人て井上を旗頭として政治に勢力を振つて居る、富豪といふ土俵の上ては彼は唯一の横綱てある、三菱は之に對して甚だ羨望の位置に居り、何時かは彼の褌を奪つて之を己れの腰部に纒はんとの念慮は歷然てある。

三井、三菱の相對峙し相睥睨し居ることは明瞭の事實、其同業者といふ關係て有り乍らも、銀行の利子の高下に就いて能く打ち明けて相談が出來るか如何か、其樣な事は今迄には更に無い、淸國にシンヂケートを作つた時にも三菱は加はらなかつた、三井が主て、井上が骨を折つた事なので三菱は遂に加はらなかつた、此れ丈ても其一端が知れる、

それ故之を藩閥からいへば、三井は盡く長閥と結托して居る、て現政府ては長閥が政權を握り居る、即ち長州日和の時の土俵てあるから、三井は大に跋扈が出來る。三菱は然らば如何か、彼は今の政府ては逆境に居る彼の薩派と相結び、少からぬ因緣關係を持つものだ。

長州は山形を主として陸に大勢力を持つ、之に從つて三井も亦等しく陸の利を受け其商權を握つて居る、陸に於ける薩派は只一の大山があるけれども之とても準長州人てある、が主權者てはないけれども先づ山縣と對峙する人といはゞ矢張りそれ位の處に落ち込むだろう。其處て三菱は何をして居るかと見るに、三菱は全力を擧げて造船及海運事業に盡して居る、郵船會社の如きも亦殆んど其一手に掌握する所となつて居る。

如上の狀勢より視察すると政治の海陸に分るゝと共に、富豪も亦海陸に割據して勢力を競ふて居る、此二大勢力が今より餘り遠からぬ將來に政治上に實現し來ることは疑はない。政府は權力の上より富豪は利害の上より兩々相結んて東西の大角觝を取ることは眼に見えて居るてはないか。即ち海陸閥即薩長閥といふ如き分界は自ら明瞭に立つて居る、元々利害並に權力爭奪の上からして已むべからざる事てある。



前額記

眞山青果

○

僕ぐらゐ友人どもに書かれたものも無い。「霧」だの、「蝿」だの、「弱者」だのと、隨分樣々に書かれた。大塚でさへこの頃中から「腐れたる女の乳。」とか云ふ題目て、可也長いものを書いて居ると云ふ噂がある。あの男のことだ、丹念にコツ〳〵書き上げたその原稿料てもつて、あの血色の惡るいイヤに年增染みた細君に陶器の總入齒でもしてやる氣なのだらう。隨分、久しい前からの話だ。

全體、誰に寄らず僕と附合ふほどの人々は、僕を見て必ら

といふに、現時の富豪の狀態を見るに、曰く安田、曰く大倉、曰く藤田、曰く何と幾らもあるけれども、就中屈指すべきは三井。三菱。之を兩大關とする。

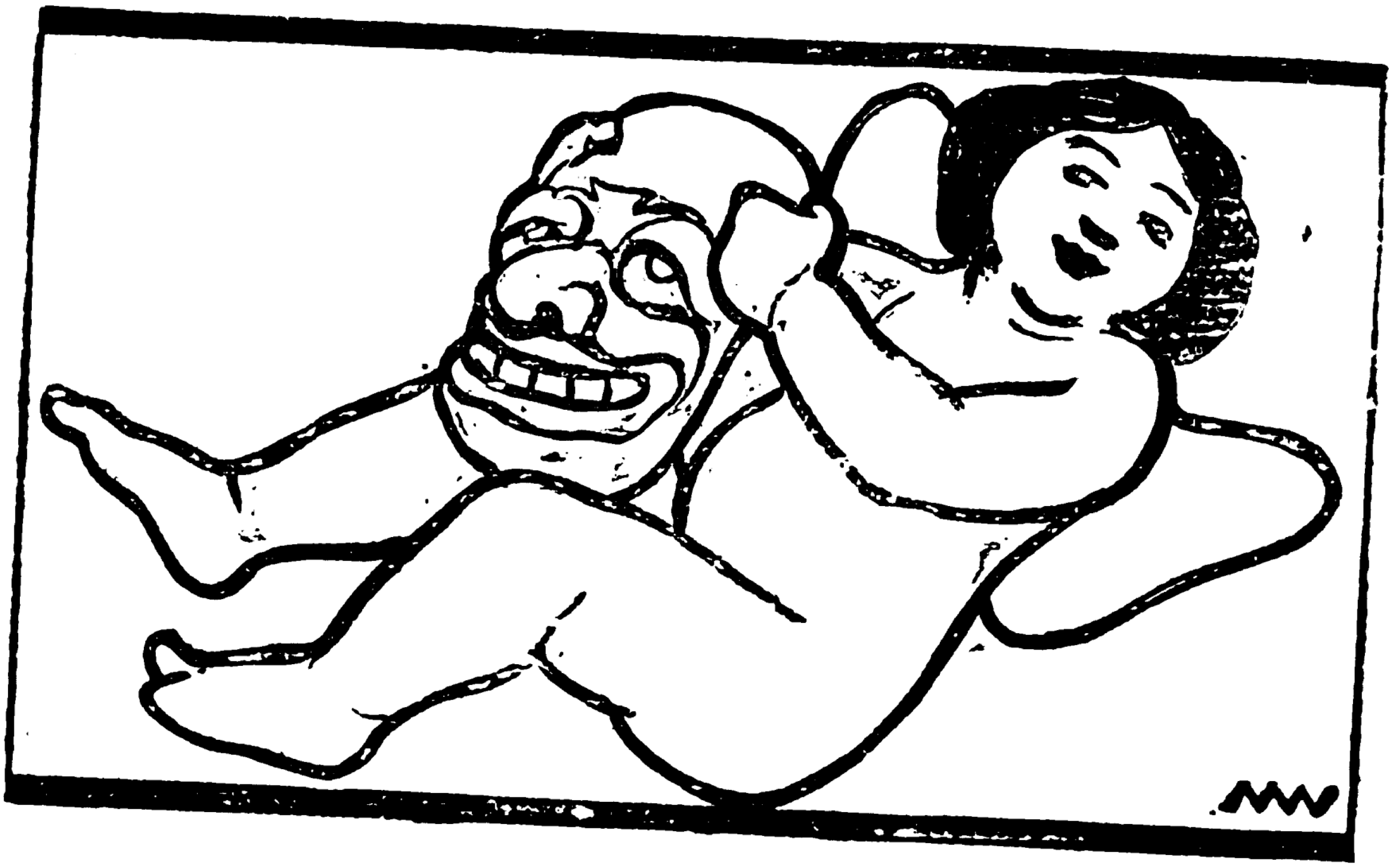
三井は實に今日全盛を極めて居り、一人で井上を旗頭として政治に勢力を振つて居る、富豪といふ土俵の上では彼は唯一の横綱である、三菱は之に對して甚だ羨望の位置に居り、何時かは彼の褌を奪つて之を己れの腰部に纏はんとの念慮は歷然である。

三井、三菱の相對峙し相睥睨し居ることは明瞭の事實、其同業者といふ關係で有り乍らも、銀行の利子の高下に就いて能く打ち明けて相談が出來るか如何か、其樣な事は今迄には更に無い、淸國にシンヂケートを作つた時にも三菱は加はらなかつた、三井が主で、井上が骨を折つた事なので三菱は遂に加はらなかつた、此れ丈でも其一端が知れる、

それ故之を藩閥からいへば、三井は盡く長閥と結托して居る、で現政府では長閥が政權を握り居る、即ち長州日和の時の土俵であるから、三井は大に威風が出來る。三菱は然らば如何か、彼は今の政府では逆境に居る彼の薩派と相結び、少からぬ因緣關係を持つものだ。

長州は山形を主として陸に大勢力を持つ、之に從つて三井も亦等しく陸の利を受け其商權を握つて居る、陸に於ける薩派は只一の大山があるけれども之とても準長州人である、が主權者ではないけれども先づ山縣と對峙する人といはゞ矢張りそれ位の處に落ち込むだろう。其處で三菱は何をして居るかと見るに、三菱は全力を擧げて造船及海運事業に盡して居る、郵船會社の如きも亦殆んど其一手に掌握する所となつて居る。

如上の狀勢より視察すると政治の海陸に分るゝと共に、富豪も亦海陸に割據して勢力を競ふて居る、此二大勢力が今より餘り遠からぬ將來に政治上に實現し來ることは疑はない。政府は權力の上より富豪は利害の上より兩々相結んで東西の大角觝を取ることは眼に見えて居るではないか。即ち海陸閥即薩長閥といふ如き分界は自ら明瞭に立つて居る、元々利害並に權力爭奪りといふも已むべからざる事である。



前額記

眞山青果

○

僕ぐらゐ友人どもに書かれたものも無い。「豚」だの、「蛆」だの、「弱者」だのと、隨分様々に書かれた。大塚てさへこの頃中から「腐れたる女の乳。」とか云ふ題目て、可也長いものを書いて居ると云ふ噂がある。あの男のことだ、丹念にコツ／＼書き上げたその原稿料てもつて、あの血色の惡るいイヤに年増染みた細君に陶器の總入齒でもしてやる氣なのだらう。隨分、久しい前からの話だ。

全體、誰に寄らず僕と附合ふほどの人々は、僕を見て必ら

ず、「慥かに變つて居る、書けさうな男だ。」と皆同じことを云ふ。默つて居るほど煩さく嗅ぎ廻して、他と變つたところを見付けやうとする。中にはツク〲僕の骨相などを見て、この前額の高く張つた眉の迫つた、頤の薄すい、自分ながら營養不良と思ふ顔付に矢鱈と感服して、君は慥かに天才的の素質があるなぞと途方も無い嬉しがらせを云ふ者もある。僕が天才！　若し本當だとすると餘り廉價に購はれた天才である。

だから今僕は二人あると云つても好い。僕でない他のN――が不意と僕の前へ踊り出したと云ふ方が好いかも知れぬ。オセツカイな諸雜誌の六號記者や、友人どもや、皆して寄つて集つて捏ッち上げた他の一人のN――と云ふ者がある。このN――に初めて遇つた時は僕でさへ驚いた。餘りに人間ばなれして居て、何う見ても俺では無い。俺でないぐらゐだから、勿論外の誰でもない人だ。

動物に鏡を見せると、自分の中から他の敵を見出して互にいがみ合ふと云ふ事だが、僕も初めてこのN――を見た時は、心から烈しく憤怒もし激昂もした。時には靜かに考へて威嚇される氣分にもなつた。

然し、今ではもうスッカリ馴れた。そして度々會つて居る中には、さきの性格や氣分も好く飲込んで了つて、云はゞ仲の好い友達ぐらゐになつた。活字のN――はなんぼ何うても本當の僕に累せぬことを知つた爲めもある。それに可笑しい事には、僕の態度や樣子が少しづゝ〱その男を眞似るやうな傾も出來た。强ひて我を張り立てゝくだらぬ自分を顯はさうとするよりは、折角さきが考へてくれ

を掘り初めて居るのかも知れない。

この日記は即ち、その憎むべき老猾なる出來事の前額を摑まんが爲めの用意に外ならぬ。僕は今、來らんとする集の前面を見ねばならぬ。

僕は決して、自分自身なぞを知ることを欲するのではない。

○

今日も終日市中を歩るき廻つた。矢田石版印刷店、中洲の××座々主、××館廣告部なぞ。

座主はこの社會の才物と聞いて居たが、會つて見ると存外氣の好い、薄ッぺらな男であつた。三十貫目もある大きな圖體を持ち扱ひかねて、雲龍の重い銀煙管を獅咬火鉢の縁でヤケに叩き潰して見せた。僕の話なぞテンで受け付けない。括れた腮でもつてゾンザイに追拂つて了つた。何うせ此方も眞劒ではない。何うでも好さゝうなものだが、さて多少失望の感が無いでもない。

悄れて起ちかけるのを見て氣の毒になつたのだらう。傍にペコ〳〵叱られて居た座付作者の萬作が追驅けて來て、兎に角一度自宅へ來い、又何うなり相談しますと慰めてくれた。好い加減に聞いて歸る。彰義隊の兵士であつたとか云ふ、五十前後の恰幅ばかり物々しい男である。何れにしても心臟だの腦髓だの大事な機官に餘計な脂肪が附着いて居る輩だ。

大久保で電車を下りた。新開町の泥濘路を寒むい糠雨に濡れながら戸山の原へ入つた頃は、日がもう静かに暮れて居た。でも、流石に春は近い。枯草にそゝぐ雨に悲しい匂が立つて居た。

ず、「慥かに變つて居る、書けさうな男だ。」と皆同じことを云ふ。默つて居るほど煩さく嗅ぎ廻して、他と變つたところを見付けやうとする。中にはツク〴〵僕の骨相などを見て、この前額の高く張つた眉の迫つた、顋の薄すい、自分ながら營養不良と思ふ顏付に矢鱈と感服して、君は慥かに天才的の素質があるなぞと途方も無い嬉しがらせを云ふ者もある。僕が天才！　若し本當だとすると餘り廉價に購はれた天才である。

だから今僕は二人あると云つても好い。僕でない他のN――が不意と僕の前へ踊り出したと云ふ方が好いかも知れぬ。オセツカイな諸雜誌の六號記者や、友人どもや、皆して寄つて集つて捏ッち上げた他の一人のN――と云ふ者がある。このN――に初めて遇つた時は僕でさへ驚いた。餘りに人間ばなれして居て、何う見ても俺では無い。俺でないぐらゐだから、勿論外の誰でもない人だ。

動物に鏡を見せると、自分の中から他の敵を見出して互にいがみ合ふと云ふ事だが、僕も初めてこのN――を見た時は、心から烈しく憤怒もし激昂もした。時には靜かに考へて威嚇される氣分にもなつた。

然し、今ではもうスツカリ馴れた。そして度々會つて居る中には、さきの性格や氣分も好く飲込んで了つて、云はゞ仲の好い友達ぐらゐになつた。活字のN――はなんぼ何うても本當の僕に累せぬことを知つた爲めもある。それに可笑しい事には、僕の態度や樣子が少しづゝ〳〵その男を眞似るやうな傾も出來た。強ひて我を張り立てゝくだらぬ自分を顯はさうとするよりは、折角さきが考へてくれ

を掘り初めて居るのかも知れない。

この日記は即ち、その憎むべき老猾なる出來事の前額を摑まんが爲めの用意に外ならぬ。僕は今、來らんとする渠の前面を見ねばならぬ。

僕は決して、自分自身なぞを知ることを欲するのではない。

○

今日も終日市中を歩るき廻つた。矢田石版印刷店、中洲の××座々主、××館廣告部など。

座主はこの社會の才物と聞いて居たが、會つて見ると存外氣の好い、薄ッぺらな男であつた。三十貫目もある大きな圖體を持ち扱ひかねて、雲龍の重い銀煙管を獅咬火鉢の縁でヤケに叩き潰して見せた。僕の話なぞテンで受け付けない。括れた腮でもつてゾンザイに追拂つて了つた。何うせ此方も眞劒ではない。何うでも好さゝうなものだが、さて多少失望の感が無いでもない。

悄れて起ちかけるのを見て氣の毒になつたのだらう。傍にペコ〳〵叱られて居た座付作者の萬作が追駆けて來て、兎に角一度自宅へ來い、又何うなり相談しますと慰めてくれた。好い加減に聞いて歸る。彰義隊の兵士であつたとか云ふ、五十前後の恰幅ばかり物々しい男である。何れにしても心臟だの腦髓だの大事な機官に餘計な脂肪が附着いて居る輩だ。

大久保で電車を下りた。新開町の泥濘路を寒むい糠雨に濡れながら戸山の原へ入つた頃は、日がもう靜かに暮れて居た。でも、流石に春は近い。枯草にそゝぐ雨に悲しい匂が立つて居た。

疲れもしたし空腹でもあつた。何んの爲めに今日家を出て、痩犬の如く肩から濡れてこの雨の中をさまよふのか、自分の心持が解からない。そんな馬鹿〱しい眞似をしないでも好い筈なのだ。まるで、この東京にかこの職業にか、未練のある者のする所作である。今朝出掛けの心持を思ひ出せないから爲方はないが、若し又明日も出掛けるやうなら、出る前に好く〱考へて見たいものである。

然し又一方から見ると、この心の底が饑渴してるやうな、恐ろしく神經的な、何事にも感傷されさうな悲しい心持にも棄てがたい所はある。若し土を換へられた樹木に悲哀があるとしたら、矢張りこんな靜かな美しい悲哀であらう。髮の毛のやうな白い細根が土壤の下に默つて悲しんで居るだらう。「二ヶ所の實地を踏む悲哀」と云ふのがこれだ。斯うして人に嘲られ、賤しまれ、譏られ、或ひは憫れまれる自分を見るのは、「自分自身の價ある悲哀に確實なる裏打をするやうなものかも知れない。こゝを遁げては何時までも自分が無くなる譯である。

椎の森は全く暮れて居た。濡れた闇から雫がハラ〱と雨傘へ落ちた。直ぐ二階へ上らうと思つたけれど、何も然うまで力無く見せるにもあたるまい。樣子を窃つとうかゞつた上で、細君一人の茶の間へ顔を見せてやつた。

「何方へ。」果して思つた通り、勢の無い聲で、始終顫えて居るやうな顔を上げた。

薄暗らい臺ランプの下で、内職の兵隊服を縫ひながら、外の方へ向けた耳ばかり鋭くして居る人である。物よりは物音に怯えて、枯枝の落つる音にも唇を顫はせて居る。

「一日歩いたけれど駄目てした。」

「然うてしたか、矢張り不可ませんてしたかね。」

細君は失望した目付て僕の顔を窺ふやうに見た。こんな表情は好く繼母に似て居る。矢張り、この人も景氣の好い話を聞いて居るより、悲しい話にスックリ調子が合ふやうに出來た人てある。

「御主人は今日も歸られませんか。」

「えゝ、何うて四五日は歸つて來られますまいよ。」

「會社とか云ふのは新富町てすか。」

「鎧橋の近所だとか云つてましたけれど、それも何うなんてすか。」何時も亭主の噂をされる時のやうに當惑して居る。

家を取り廻く樣々の樹木に樣々の音を立てゝ雨は降つて居る。そして、一つ〱の差異のある音が一緒に混雜して頭へ入つて來る。可也遠い鐵道線路の堤に降る音までハッキリ聞えるやうな氣がした。冷たい部屋の中に、本を枕にしてボンヤリ目をつぶつて居ると、薬の黑い椰垣にもたれて、今にも泣き出しさうに海を見て居る、薄皮な病身らしい繼母の顏が目に見える。昴と喜一と矢張り痩せた二人の幼弟は母の顏を心配さうに下からのぞいて居る。

「私が餘り下を産むもんだから、それて兄さんがあのやうに……。」と訴ふるやうに云ふ。目が深かい蒼味を持つた、何時までも聲の娘らしい人てある。斯う云つて氣が付いたのか、それとも母を憫んて

凝つと見詰めて居る僕の目を恐れたのか、遣瀬なさゝうに痩せた頬を俯向けてしまつた。

中學校を卒業して一年ばかり、ブラ〳〵家に遊んで居る間ても、僕は繼母とロクに口も利かれなかつた。母は始終僕を避けるやうにして居た。夜なぞ、何氣なく母一人の臺所へ出て來ると、母は奥書院の父を憚かる小さな聲て、「何うか、御願だから那方へ行つてゝ下さい。」と身を細くして頼むのであつた。「俺まで畜生にするのか。」何時も心に斯う叫んて、黒塗の見臺に向つて仔細らしく讀書して居る父を襖の陰から睨み付けて、自分の書齋へ引込むのであつた。

繼母は僕と九ッしか違はぬ。その頃三十一二てあつた。

隣室の中學生どもが濡れて寄席から歸つて來た。年頃相應な賑かな話をして居る。時計を見ると一時過ぎて居る。

今夜も何うて睡られさうも無い。

○

終日小雨。谷津から長い手紙が來た。臆劫だから返事も出さぬ。自分の不足不滿を他人の不足不滿にして慰めたり憤つたりする言分、相手になる方が馬鹿を見る。僕の今を見て自己を表白し得ぬ苦痛だの藝術に疎んじられたる悲哀だのと推測して居る。原稿紙の小さな區劃へ一字づゝ文字を篏めて行くのが藝術だと思つて居る。黒い紙に黒いインキてども書きたいこの心持が解からないのだ。兎に角、一日も早く石碑澤山の都會をのがれねばならぬ。

自分を語らないのは自分の弱所に弱いのではない。語りたくないのだ。曹達水の栓に穴を明けて、飽和水をたゞの水にしてしまう氣は無い。强壓をその上に加へて瓦斯を液化させても、安定に胸の中に蓄積したい。谷津の如きは終生自分の感情を氣體にして擴散させるのだ。

僕は無論完全なる人ではないが、實は又完全なる人たるをも欲しない。完全とは、その進化機官と退化機官と相殺して殘る、容積の多い、無能力なる中和鹽類のやうなものである。鳥にして走る駝鳥や、獸にして泳ぐ河豚よりも甚しい。イモムシやクラゲにはなりたくない。

細君切りに心配して何度も部屋をのぞきに來た。目を開いて居ると、慌てゝ惡るいことでもしたやうに下りて行く。喰はれなければ喰はれないで心配して居るのだ。あの物に當惑したやうな樣子まで繼母にソックリである。

繼母が嫁に來たのは僕の十一の時であつた。春か秋か、細い雨が庭の槇の木に白く降つて居たのを覺えて居る。母が死んだ翌々年であつた。

あの當座コセ〳〵と父の落付かぬ樣子と云つたらない。惡猾さうな小さな目を光らせて、家中を臺所まで泡立たせて居た。年甲斐もなく下男と喧嘩して見たり、又十九になる兄を捉えて無上に叱り付けたりして居た。二三日前から庭の土間へ新莚を敷いて魚をこなして居る料理人に餘計な事からへこまされて、眞赤になつて部屋へ引込んで行つた。その頃父は四十五六だが、矢張り今と變らぬ顏付であつたと覺えて居る。瘦せ落ちた頰が禿げたやうにスッペリ光つて居て、小さな耳朶が狐のやうに立つて居た。

兄は又兄で、自分の部屋にしぶとく引籠んで居て、「好い年をして、馬鹿。」と陰から父を嘲つて居た。兄よりも年の少ない尫弱な繼母は、隣村の或る傾きかけた寺の娘であつた。雨の中を蛇の目傘をさしかけられて、肩を悄れさして門から入つて來る姿がハッキリ見える。袴を穿いたまゝ土藏に出入りして、燭臺の毛氈のと世話を燒いて居る父に較べると孫娘のやうに見えた。皺盃の役にされて見て居たが、昔風な丸行燈に映る横顔が沈んで見えた。何に起つ時であつたか、二三度母親に疊を叩かれて、悲しさうに立つた姿が、袂の長い色の濃い着物だけに妙に悄れて心細く見えた。

「あれをお母さんと云へるかい。」兄はその晩寢てから云つた。自分はそれよりも、妙に沈んで張合の無さゝうな樣子が氣になつて色々な事を考へて居た。

「親父どんな樣子だか、お前行つて見て來てやれ。」翌朝兄にそゝのかされて、まだ薄暗らい中に起きて行くと、父はもう前の流川て顔を洗つて、燦びやかに飾り立てた佛壇の前に、肩衣ばかり掛けて朝々の務めのお文章を上げて居た。ヂロリと自分を見て、錆びた顫えのある聲を振り上げた。あの尖つた痩せた肩から好くもあんな聲が出ると思ふほどであつた。

佛壇の次の間へは、小兒心にも入る氣が後れた。繼母はそこの襖を開けて、蒼い顔して起きて來た。父の背後へ膝を突いて、頭を些いと下げて臺所へ行つた。父を見る目の何所にか毒が籠つて居るやうに思つた。

その後、繼母は二度も三度も家に居ない時があつた。微醉してお尚は昔の大庄屋の心持の失せない父

は、その度毎に近所親類の者共を壓制に呼び付けて、出て行つた繼母の惡口を無闇に數ひ立てるのてあつた。時には年寄り女の泣く時のやうに、小さな目の縁を赤くして、氣違ひのやうに母を罵つて、誰が何んと口を利いても、今度は入れないと激しく言ひ切つた。それても親類が氣を利かして何うにか連れ戻して來る時は好いが、若し少しても話の行き違ひなぞあると、父は罪人の如くその人を罵り止まない。

「義絶だ。もう主とア義絶する。二度と表の榎の下蹈ませない。」とキッパリ斷つて了ふのてあつた。

兄弟中て氣嵩な兄はその爲めに幾度爭つたか知れない。母を母と呼んだことは一度も無い。間も無く放蕩を初めて、手當りまかせに家の懸軸やら古器を持出しては賣り拂つた。自分より年上の咽喉に傷痕のある女と町に家を持つたのもその頃てあつた。

繼母の便りは僕一人てあつた。胸に溜まる惡氣を吐き出して了ひたさうに、好く僕を傍へ引き付けて様々の話をして聞かせた。悲しい物語が上手て、對王丸安壽姫の三荘大夫に潮千架薪千束とさいなまれる慘らしい話や、勾引に盗まれられて行く美しい上臈が秋風の野に罌粟の種子をこぼしながら歌ふ悲しい歌なぞを細い聲て染々と話して聞かせた。話の悲しい所になると、母はホロ／＼涙をこぼしながら、それても止めずに悲しい話／＼と續けて行く。

「ねえ涼さん、お前さんとは仲好くしませうね。何時までも、……こゝの家に居なくなつても。」と繼母は時々こんな事を云つた。

庭の木蓮の花が曇つた空を明るくするやうに咲いて居た。後から／＼落ちる花片が黒い土に雪のやう

に積もつて居た。早く落ちた花は先きから〳〵濡れて腐れて行つた。僕はその時、自分と母との結び付きは、この家と云ふ舊るい煤ぶつた大きな建物の外まで、何所までも、續いて居るのだと云ふやうな事を考へて居た。

父は又繼母が僕のみを愛するのを好まなかつた。自分と母とを見る目は、父として十二三の小兒に見せるやうなそれとは慥かに違つて居た。

○

晴れたとなると、雲の底が急に光つて、何所となく早春の氣組は見えるけれど、空は未だ深く睡つて居て、頭腦の甲殼が厚くなつたやうだ。鄕里の弟から歸鄕をうながして來た。父にも話したところ、默つては居るが心待ちに待つて居るに違ひない。兄の事があつて以來、メッキリ衰ひて、近頃は然う近所とも爭はないやうになつたと書いてある。

父はもう六十一である。早く歸つて父と家の爲めに思切つて働かねばなるまい。然し働くと云つても然う容易な事ではない。何所から手を付けて、何所から整理すべきか、能く〳〵考へて置く必要がある。

矢張り先に考へて置いた通り默して働くのだ。靜かに一歩〳〵と進めて行つて、あの大きな家を埋める煤を拂つて、日の光をタップリ通さなければなるまい。人よりは家だ。我々の種屬に若し祟りがあるとすれば、それはあの長い時代に蓄積した煤が吾々の肺臟から入つて血を穢がして行くのだ。……

然し、父は鼻が銳い、何年振りかで不意に歸る僕を何氣なく見る筈はない。必らず煩さく執拗に嗅ぎ出

さうと勉めるには相違ない。それでも好い。

兎に角、一日も早く歸ることだ。斯うしてグッタリ寢てばかりは居られぬ。けれども又、この怠けた自分の身體の中に、それを爲遂げるだけの勇氣があらうか。

隣室の中學生は試驗も終ひ、春期休暇も近付いたので、匂はしい空氣の流れ込む開放しの窓へ腰掛けて旅行の計畫など晴やかに話し合つて居る。娘の聲も混つて居る。………笑つた。向の植木屋の娘である。ツイこの間までは用も無いのに前の鷄小屋の邊へ來てウロ／＼して居た。そして、書生どもが二階から手招ぎでもすると、態と聲立てゝバタ／＼駈つて行つたあの娘である。

もう二階へ上つて來てふざけ散らすやうになつた。

「伯母さん、太田さんが不可ません。」ドタバタと壁の隅に捩ぢ伏せられて、娘の聲が笑ひながら叫んだ。

然うだ、あの頃だ。例令無生物でも好い、熱して發汗する青年の腕のやりばに苦しんで歯を喰ひしばるほど他の者を、思切つて強く抱き締めて見たい頃である。呼吸が霞んで行くやうな氣持の時である。

自分はあの頃、あの大きな犬のペテを如何に愛し又苦しめたらう。僕の過去に於いて、眞に思ふまゝの感情を形に出して他の者にそゝいだのはあのペテだけであつた。

谿谷の流れが日光を飽和して、光る皺をきらめかして流れて居る河原の暖かい堤にペテと一緒に臥轉んで遊んだ。河の石礫は水の淺い山葵菜畑であつた。青くテラ／＼する葉を出す頃には、目に滲みるやうな甘い臭が暖かい風に搖はされた。

小兒の時から友達の無い僕は、飴色の毛が長く、少し鈍なこの犬が唯一の友であつた。唯最う身體の置きどころの無いやうな强烈な感情が身體中に溢れて來ると、呼吸が窘つて苦しさうに喘ぎ出すまで離さなかつた。燃えた獸皮に殘るやうなあの動物性な分泌腺の匂が、熱して小腦へ滲み込む。

時には又、不意と、自分ながら物狂はしいほどこの動物の憎くなる時もある。止め度も無く涙を頰に流しながら、下駄を上げて打つて／＼、死さうに悶えるまで慘くさいなんだ時もある。錐があれば錐、ナイフがあればナイフ、憐れな動物を樹に縛り付けて置いて、自分も泣きながら血を犬の身體中から流して居て、山歸りの太い杣の腕に抱き止められたこともあつた。酷くすればするほど、何んとも云はれぬ優しい快い悲しさが身内に溢れるのであつた。

あの家の自慢であつた廣い山葵畑も四五年前に他へ渡した。犬も最う衰ひて、齒はこぼれ目は盲つて、物置場にしてある、頽れかけた中二階の下の藁にくるまつて、徒らに老へて了つた。長く生きた犬だ。

薄紙を漉したやうな、午後の鈍い日が竹藪の根へ落ちた。響もなく腐れて行く去年の落葉から、稀薄な水氣をホウと立てゝ居る。空の重い雲は溶ける時の來るのを待つやうに凝つて動かない。日はそれて遠い土の上まで達くか達かぬかを危ぶむやうに顫え／＼ながら、時々その雲の間からのぞいて見て居る。

晝の膳がそのまゝになつて居るのを見て、夕飯を拵へて來た祖母は、恐れるやうに僕をうかゞつて居

る。默つて坐つて居た。

「何かお氣に觸つた事が御在ますなら、何うか被仰つて下さい。私は決してそんな氣がありませんから。」とオツ〳〵言譯して居る。日にもよることだらうが、細君の顔が急にこの頃醜く年寄染みて見える。

「牛乳は飲んだのですから。」と僕は寢床の中から答へた。

「でも一週間ばかり此方、何うも食物が不同ですから、私は氣になつてなりません。」

「何うせ寢て居るんですもの。」

細君は押して云ふ事も出來ず、二度の膳を兩手に持つて出て行つた、好く他は餓えると云ふ事を云ふが、僕には然う大して苦しい事てはない。それよりも凝つとして居て考へたい。

○

南風が氣負ひ立つて吹く。樹木を吹き鳴らし、屋根を吹き、町を吹き、顔も向けられない激しさの中に、朧を持ちさうな曖昧をボヤ〳〵搖はして居る。舊るいものを總て腐らせてしまひさうな早春の先振れてある。

行く所もないから、濱町の露地に萬作を訪ねた。別に渠の下職に就く氣はないが、この前に尋ねて見た時も、渠の掛け離れた混沌たる話を聞い居る中に頭が馬鹿にされるやうに鎮つたからだ。誰に聞いたのか沙翁の「十二夜」を今の新派一座に仕組直して見たいから、原文を讀んでくれと本まで買つて頼まれたけ

れどまだ一枚も讀んで無い。

この露地へ入ると、何んだか昔風な家の臺所棚を思ひ出す。床の低い、地の濕りが通しさうな、日光の隅々までとゞかぬ家々の細露地を身を細めて通つて行くと、何の家も〳〵磨き立てた狹い格子戸と並べて、おへッつい樣の灰まで奇麗にッンマリと行儀好く片付けたる臺所を開けひろげてあつて、そこから窮屈さうな小庭をひかへた座敷まで見通される。世の中の表口と裏口と一緒に見えるやうな家ばかりだ。住んで居る小兒も年寄も、矢張り勝手道具のやうに、それ〳〵の置き場所にキチンと片付いて居るやうな氣がする。直ぐ表町を電車が通つて居るとは思はれないほど日がぬるくドブ板に落ちて空氣が停滯して居る。

女髮結ひの木札と並んで、竹柴萬作と書いた勘定流の標札が、活々した朱色の豐川樣や古峯樣の羽團扇とならんで、低い格子戸へ出て居た。

「やァ先生。」萬作は少し醉つて居ると見えて、「丁度好い所へ來て下すッた。丁度ね、今貴方の噂をして居たところだから妙ぢやありませんか。」と茶の間のガラス障子から見付けて聲をかけた。

女房は出を稼いでると見えて、土間に派手な鼻緖の下駄が二三足あつたが、入口の大姿見には誰も居なかつた。赤い模樣の縮珍鼻緖が妙に目に付いて、このまゝ歸つた方が好いやうな氣がした。

「さア何うぞ、先生。」と咽頭まで酒に焦けた萬作はブラ〳〵茶の間から立つて來て座敷へ案內した。若い女どもの笑ひ聲がその後から破れた。

「おい芳さん、民さん、何を笑つてるんだな。お火鉢だよ。お蒲團だよ。」と小楊子を使ひながら獨りて景氣付いて呼び出てゝる。

白いものを塗つて、平常着に派手な長い羽織を着た若い女どもが、笑ひたいのを耐えて、濟アした顔て代る〳〵ものを搬んで入つて來た。

淺い床の間には氣取つた茶室掛なぞかけて、葛蔓をからませた圓窓の下に經机らしい小机を据えてあつた。書かけの書拔きらしい横綴の半紙本の上に、眞鍮緣の目鏡が野算代りに乘せてあつた。

「これでもザラの作者と見られちや不足なんですよ。親方、へイ今日は、も年にありまさア。何時まで然うして居られますか。だから私なんか これでも、先生だちの云ふ事だつてチヤンと解つてるんてさア。」とこの前の夜來た時、自慢さうに云つて居た沙翁全集やモリエールの飜譯本や新刊の小說本なぞ六七冊、藝人どものくばり手拭と一緒に、背文字を揃えて、磨き簞笥の上に飾つてあつた。

萬作は不思議な男である。しらふの時は話がゴタ付いて、酒に醉つてるやうにフラ〳〵して居るが、醉つて居る時は却つて話の齒切れも好く、顔の線も引締つて、成程どこかに武士らしい所が見える。

「先生、私だつて何時まで拍子木につかまつちや居ませんや。今にウンと素晴しいものを書いて、お茶屋の二枚蒲團へ坐つて見せますよ。こゝにチヤンとあるんですからね。(と、自分の逞しい胸元を叩いて見せて)嗚アや女子供はね、昔ッから萬さんて生れて來たもンと思つてますがね、これでも生れてすから、根に掴んで居る所があるんです。なアに、貧乏がいやなら橫町の親類へ行つたつて、大坂町だつて

樂々やつて行けるんですがね、そんな樂ばかりぢや活きられませんや。今に今にッて三十年も暮らして來ましたけれど、これでも考があるんです。傍から見える萬さんだけなら、私だつて自分ですもの、心細くッて活きて行ける筈がありません。」と頸をフラ〳〵させながら何時にない氣焔を吐いて居る。

土間ぐらゐな小庭越しに物干し臺へ紅裏の蒲團を乾しならべた前の家から、ダルさうな稽古三味の撥音が、どよんだやうな晝の空氣を搖り動かして來た。その怠けた音が不思議にも、ゴタ〳〵した家並びの雜然たる不快な線の印象を幾らか軟らげるやうにもあつた。

「傍から見ると萬さんてせう、萬作、甚い奴ァ萬公てさァ。考へて見ると癪てさァ。が、自分になりやそれが何んでもない、結構萬公て活きてるから不思議です。私も時々思出しちやァね、口惜しがらうと思ふけれど、身體の心棒がゆるんでるんですかね、口惜しい筈だと思ふばかりで些つとも口惜しかァ無い。斯うして年から年中這つて暮して行くのもその所爲ですよ。だから私は思ふんだ。好く芝居にもありますさァね、こりやこれ男の生顏をなんて云ひますが、ありや外に見てる者があるから口惜しがるんてさァ。書物に書いてる通り人間が口惜しがつて憤發出來るもンなら、萬さんだつて斯うして淫賣どもの代筆したりさ、女房から利息の付く小使ひ錢借りたり、嬶になぐられたりして居ませんや。口惜しがらう〳〵と思ひながら段々ヅル〳〵に落ちて行くから厭になつて了ふ。」と話に熱氣を持つて來た。

その時、カタコトと後齒を鳴らして入つて來たものがあつた。襖の外に立つて聞いて居て、

「伯父さん、餘ッ程行けましたね。」と爽かな若い女の聲て云つた。外の女どもは最う前に歸つて了つ

た。

「誰だい、お紋さんか。」

「まだ西郷の軍は出ないのかね。」と美しく笑つてる。

「馬鹿だ、馬鹿だ。」萬作は爲方なさゝうに大聲て笑つて居た。

黒い襟のかゝつた着物を着て、派手な前掛けをした背のスラリとした女が入つて來た。襖を明ける時チラと映つた女の顔がインキが乾くやうに段々輪廓が明らかになつた。大きい、底まで澄んだ水のやうな目であつた。際立つて赤い活々した唇である。何時か萬作が素晴しいのをお目にかけますと云つたあれに違ひない。僕は譯も無くその視線が痛いやうに思つた。女の方をよけて居る顏や頬に射さるやうな氣がした。

「小父さん、困つて了つた。」

女は遠慮なく火鉢の傍へ來た。光るものを箝めた細い指が瀬戸火鉢の縁を撫てゝ居る。

「何うしても歸れッてのか。」

「何しろ頑固なんだからね。そりや尤も私の事も考へるんだらうけれど。」と屈托して居る。

言葉切れのハッキリした、何所かに氣威なところのある物言ひが、自墮落に身を投くづした此邊の女とは思はれなかつた。

「まア好いよ、又その内にや何うかなるだらう。親だもの、眞逆喰ふとも云ふめえ。」と萬作は暢氣に

話を決めて了つて、僕をその女に紹介した。

「それ、何時か話したあの先生だ。今度矢張り芝居の樂屋を見たいッて私のところへお出てなすつたのだ。」

「然う。」と云つた限り、女は自分自身の事を考へて居るらしい。火箸に乘せた手を彼方へ遣つたり此方へ遣つたりして居る。

「僕、失敬します。」と突然立ち上つた。何んの爲めに起つたか自分にも判からないが、不意に背後から不快な匂ても嗅がせられたやうな氣持てあつた。

「何うしたんです、先生。」と萬作は慌てゝ抑えやうとしたが、その時には最う入り口へ來て、汗膏て眞黒くよごれた自分の下駄を突ッ掛けて居た。

大通りへ出ると、頭がクル／＼して來た。何んだか自分は今ひどく慘めな身の上に落ちて居るやうな氣がしてならない。何が慘めなのか解からない。何所を何うと宛も無く歩いてゝも居る人のやうに半ば無意識に町を曲り町を行き、暗らい道、明るい道、と歩るいて居たやうな氣がする。

○

一晩睡むる内に、總て出來上つた。

それにしても昨日の行動を耻入る。萬作は好いとしても、あの女は自分を何んと見たらう。氣の觸れた木兎。何かしらそんな事を云つて笑つては居まいか。明るい日に出るのが恥かしいやうだ。

下に主人が歸つて來た。二度も三度も前の廊下を用ありさうに通つて居た。牛乳ばかり飲んで家を出た。歩るくと身體から汗が出て氣味が惡るい。

萬作の家では誰も僕を怪んで居る樣子が無い。故とそんな樣子を見せて居るのではないかと思つたが然うらしくもない。唇の薄すい女房まで一緒になつて僕をもてなして居る。途中考へ〳〵して來た苦しい態度も取る必要はなくなつた。

「斯う云ふ家に居たら氣が伸び〳〵して好からう。家へ歸るのがツク〳〵いやになつた。」と何氣ない口振りで云ふと、では家に居よと夫婦して心からすゝめて居た。口元に締りの無い、睡語でも云ひさうな女だが、癇が强いだけに正直さうである。

何んとかして口を切らうとして居ると、都合よく先方から話し出した。

「さう〳〵、西田さんに奢つて頂く事があつたツけ。お紋さん、そら昨日來て居たぢやありませんか。」

「知つてます、何うしたんです。」僕は故と落付いて女房の顏を眞直に見て居た。

「唯はいやですよ、大變なことなんだから。」と顋を出してゲラ〳〵笑つて居る。

「本當に聞かして下さい。氣にかゝりますから。」

「まアあんな眞面目な顏などして、本當に面白い西田さんね。」

萬作の女房は容易に自分を信用して居る。非凡な學者でもあるやうに思つて居る。萬作は自分を借りたいために僕へまで法外の價値を付けて居るのだらう。それは何うでも好いとする。僕は懷から紙幣を

一枚出して晝飯を喰べたいと云つた。旅費にしやうと思つて舊るい作の小品を途中ある雜誌社へ賣つて來たのである。

「おやお紋さんを招んで來ませう、何うせ遊んでるんだから。」と一人て決めてカタコト駈出して行つた。

「あれだからね、先生。全く遣り切れませんよ。」萬作は女房のはしやいだ後姿を見送りながら苦々しさうに云つた。

今日はスッキリしたお納戸色の羽織を着て來た。胸元がキリ〱と處女らしく引締つて、立つた姿の釣合が好く取れて居る。

「昨日は。」と品作つた聲で靜かに入つて來た。

萬作は何んと思つたか、羽織を着換へて、不愛措にブイと外へ出て行つた。出掛けに何か女房へ小言を云つて居るらしかつた。

「小父さん、何うかして。」とお紋も氣にして酒の用意して居る女房に聞いた。

「打遣つてお置きよ、又何時もの癖なんだから、氣難かし屋ッたらありやしない。」と女房は笑つて居た。

唯三時間だが、何んと云ふ心持の相違だらう。唯三四杯しか飲まぬ酒だが、身體中の細かい〱動脈

の末々まで行き渡つて、身體が浮くやうな心持である。頭の中が洗つたやうにサツパリして、町も人も美しく見える。店々の電燈がチラリ〳〵と光つて過ぎた。

電車に乘るのも惜しくて賑かな通を歩いて行く内、故と向から來る強さうな人へ突當つたりして見た。

「御免なさい、母が大病で急ぎますもんですから。」

立停つて故と馬鹿丁寧に頭を下げて見せると、無愛想な顔してヂロ〳〵僕の顔を見ながら通り過ぎた。面白くなつて故と節を付けてあやまつてやつた。

途中神樂坂へ來て、吾々の仲間が好く行くビヤホールの中をのぞいて見た。何れまた業々しい前振れでもつて自作を賣り付ける考なのだらう、谷津が本屋の番頭と來て飲んで居た。行也その中へ椅子を割り込んで、手を揮りながら喋つた。二人は話の腰を折られて呆氣に取られて居た。

「何うしたんだらう、こんな男ぢやないんだがね。」五ツ紋の袖へはねた酒の汚點を氣にしい〳〵谷津は不審さうに本屋の番頭と顔を見合つて居た。

「見給へ、何うしたんだよ。」と谷津に腕を取られて見ると、掌が破れて血が流れ出て居た。

友達が細かく云ひ含めて乘せて呉れた車で家へ歸つた。錢の裏まで見通すやうな事を云つて居た相場も思ふやうに行かなかつたと見えて、主人は氣まづい顔して獨酌して居た。

僕の勢の好いのを見て、「大分御景氣ですな。」と皮肉な笑ひ方をして居た。

細君も不審さうに僕の樣子を見ながら、例の兵隊服を壁の隅て縫つて居た。

○

弟から又長い手紙が來た。歸郷の後れるのを催促して來たのである。兵隊から歸つて來た分家の新作の智慧て、いよ〳〵門前の竹籔を切り出して賣ると云ふ。昨年は馬場先きの茶畑を賣つた。前畠も無い。いよ〳〵屋敷が裸になるのだ。

小兒の時の話に尺蠖虫(しやくとりむし)が頭まで這ひ上がると壽命がないと云ふが、もう自分の家は頸の上まで虫が這ひ上つて居る。何一つ贅澤らしい事をするても無く、約(つ)ましく〳〵と小さな小兒の心までおびえさせながら、段々と身骨を喰つて行くのだ。父は然しその度に、なに茶畑だけだ、竹籔だけだと、あの日の目の無い黴(かび)臭い書院から外をも見ないで居るのだらう。そして、親だ、親戚だ、子だ、兄弟だ、奉公人だと、小さな腐れた感情にいがみ合ひ疑り合つて、あの破風造りの昔風な家の中に滅びて行くのだ。外の新しい活々した空氣を恐れて、ドス黑い、水へ入れても溶けない煤の中に埋れて行くのだ。

家。これを先づ第一に破らなければ、われ〳〵の種屬は滅びて行くより外無い。それを破る人は自分の外にない。兄弟中て一番活々した考を持つて居た兄てさへ、長く住んて居る中にやはり同じく血が鈍つて了した。もう家にも居ない。

主人が來て窮状を訴へて行つた。何んと云つても默つて居たら、張合拔けして下りて行つた。金になつても起きないて寢て居た。

昨日――。

僕は强ひて誇張して今の窮乏を女に話して聞かせた。飯時さへ遠慮して寢て居ると云ふやうな慘めな話をした。尤も話す事は慘めても、聲の調子や樣子は誇らしく張つて居たかも知れぬ。女は初めから感動した樣子て、氣を詰めて聞いて居た。そして、ホツと溜息を吐いて、

「本當に然うして暮したら好いてせうね。」とシンミリした調子になつた。急に年を取つたやうな聲てあつた。俯向いて居る横顔を見ると、二十六と云ふ年に隱せない寂しさが顔に搖つて居た。

「洒落に考へるほど面白いものぢやありませんよ。」

「だつて、兎に角眞劍て世を暮らすんてすもの、張合があるわ。私どもこそ本當に詰らないわ。」

「その代り面白い日もあるさ。」

「面白い日。そんな日なんてあるんてすか。尤も先にはハア〳〵云つて騷いて暮らしましたけどね。去年のあたりからよ、斯う耐らないほど悲しい苦勞をして見たいと思ふやうになつたのは。」

「然う云ふ日もあるんてせう。」

「全くよ、芝居て見てもあの沈つと辛抱して、泣いて暮らす喜多村の役ね、私もあんなにして暮らしたいわ。ねえ、小母さん。」と獨りて飮んて好い氣分になつて居る萬作の女房を振り返つた。

「まア、然う云へばそんなものかね。」とフラ〳〵して居る。

女は少し躊ひながら自分の身の上も話して聞かせた。親は左官の棟梁ても酒に亂れて他愛が無つた。

母と妹の爲めに十七の年から軟かな着物を着て、こゝの屋敷からそこの屋敷と奉公に出た。去年ある外交官に別れてからは、この河岸に鮨屋を出して居る伯母の家に手傳ひに來て居るのだ。

「これでも立派な二つ名で新聞にまで出された人なのよ。愛措が盡きるでせう。」と自分を嘲るやうに寂しく笑つて居た。

…………………

隣室の中學生どもは、植木屋の娘とキャッ／＼騷いで居る。あゝして人生の雛形を刻んで居るのだ。今に目を書き鼻を書いて初めて氣が付いた時には、立派に一人前の人間が出來上つて居るのだ。その時になつて初めて自分が自分に驚いて居る。

○

昨夜、夜深けて細君の啜り泣くのを聞いた。低いけれど嚇すやうな亭主の聲も聞えた、波の荒れる晩、濱邊に寢ると夜が鎭つてから、荒れ狂ふ風波の底の底の方から細々と人の恨聲が幽かに／＼枕へ傳つて來る。枕を上げると最う聞えない。丁度そんな啜り泣きが重い闇の中から斷續して聞える。

その不快な泣聲にうなされて、睡つては覺め睡つては覺め、殆んど明方近くまで惱まされて了つた。朝ハッキリ目が覺めても執念く耳をはなれない。

餘程の事件を豫想して今朝樣子を見に一度起きて見たが、細君は別に變つた樣子もなく日和へ出て唇の皮を脱いで居た。茶の間は綺麗に片付いて僅かに昨夜居た筈の主人が見えなかつた。

「もうお出掛け？」と薄寒むい日和に立つて聞いた。庭の眞黒な柿の枝から、ハツキリした若芽が何時の間にか出て居た。

「えゝ、矢張り何うにかなる氣で齷齪して居るんですせう。何うせ駄目なんですけど、思ひ切りが付かないものと見えます。」

投げたやうな調子の中に、何處か活々した所が見える。日和の所以か顔色まで血が上つて、不思議なほどその小さな顔が若く活きて見えた。歯並の白く小さいのも目立つた。初めて僕が下宿した頃から亭主と反が合はないで、何時も先きの事ばかり考へて居ながら、グツ〳〵に連れ添つて居るのだ。一緒になつてからもう五年になると云ふ。

「矢張り春ですな。」僕は妙にだまされたやうな氣分であつた。

「本當にもうスツカリ。」

浮々した調子であつた。その癖、凝つとして居て、何か心に籠上げて來る嬉しさを獨り味ひたいと云つた様子が見えた。

二階へ上つて又黴臭い蒲團を引被つた。暫くして膳を持つて來た細君は呆れて下りて行つた。

昨夜の夢が未だ殘つて居る。夢とは云ふものゝ鼻も耳も恐ろしく鋭敏になつて、匂も音も未だ明かに活きて居る。夢とは思はれない夢である。

夕方、外を歩いて居た。

濃い、然し濕つた土から湧き上がる匂が薄膜のやうに自分を包んだ。呼吸を吐かずに凝つと立停つて居たらば、この淡い紫がゝつた氣體が身體中の皮膚腺から滲み入つて、血の流れを穏かにも淨くもしさうに思はれる。

自分の踏む輕るさうな下駄の音に聞惚れながら仄暗らい屋敷町を行つたり來たりして居る人もあつた。十字になつた曲り角へ來ると、横から流れる夕暮の空氣と縦から流れる空氣と靜かに觸れるのが、幽かながらも頻に響いて來る。

偶と氣が付くと自分は小高い、欅の青葉の被覆さつた丘の上を下りて、白塗りの學校らしい建物の前を歩いて居る。そして間も無く、コンモリ暗らい木立のあたりへ出て居る。慥かに一度通つた所だと思ひながら歩るいて居て、それが何所だか何うしても思ひ出せない。

「俺は何所からか歩るいて來たんだ。歩るき出した所からたぐつて順序に考へれば解かる筈だ。」と斯う考へて居ながら踏み出した場所が思ひ出せない。

足だけ歩るいて居る。

何かしら自分の前には大きな「出來事」が手を擴げて待つて居るやうな氣がしてならない。大事と云へば今自分が計畫して居る家の事、家族の性格を改造しやうと云ふ大事であるが、今の場合は未だ／＼それよりも大事な事件のやうに思はれる。斯うして殆んど無意識に歩いて行くのもその大事に引摺られて

居るのかも知れないと思ふ。

然う云へば、自分の父も兄もその他の一家族の人々も何時も知らず／＼の間にズル／＼と壞滅の底まで落ちて行くらしい。足掛りの無い甕の底のやうな所へ軟かく辷り落ちて行くのだ。

兄も監獄の冷い壁と直接に顔を向はせるまでは何所へ行く身體か知らずに居たに相違ない。一家中では強い氣持の人だが、血も骨も輕弱に出來て居て、足觸りの固たい土は歩けない人である。私書僞造、公印盜用、そんな重々しい罪惡になるとは氣が付かないで、普通の文字を書き印を捺すやうな心持であの證書を作製したのだらう。沼氣に中毒して居る人は快い夢を見ながら手の動くのを知らないで居たと云ふことである。

何所からとも無く、刺激性な匂が搖つて來た。初めは火藥の匂かと思つて居ると、段々ハツキリして來て薄荷の匂と解つた。然かも薄荷と解かると同時に、奧書院の太く煤に光る柱が見えた。何んの爲めにそれが見えるのだか解からない。

こんな事を考へながら矢張り歩いてる。そして泣いて居た。

穢ない裏長屋の軒先に立つて居た。

ドス黒いランプの光は、濕つた外の闇に吸込まれながら、息のふたがりさうな小家から外へのがれた。職工服のやうなものを着た一人の毛深い男と、三人の女がピシヤ／＼口を鳴らしながら、爭ふやうにチヤブ臺の上の大きな皿を突いて居た。

眞正面に座つた若い女は白いものなぞ付けて、髮の毛が薄かつた。

蟹を羮てるやうな溝の臭が、ムッとする程强く鼻へ入つて來た。

「誰れ、些いと、些いと。」若い女はランプの光を除けて、闇い表の方へ眉を蹙めた。默つて居た。

「些いと、誰れだよ。名を云ふもんだよ、この人は。」と女はだらしない風して立つて來た。骨まで腐れたやうな、年にも似合はず皺枯れた聲であつた。此方を見る男の目が片目の猫のやうに鋭い光を持つて居た。

「何んだい、手前は。」女は顔を下からのぞいて、聲を尖らせた。腥い臭がプンと顔へかゝつた。

男も下駄を突ッ掛けて外へ出て來た。自分は何か云つたやうだが聲は出なかつた。頸を縮めて、呼吸を窘らして今にも落ちて來さうな男の拳のみを見詰めた。

「馬鹿、何んと間違ひやがつた、早く歸れ。」

と男は咽頭の底であざ笑ひながら薄い肩の骨を突いた。よろめく拍子に、窘んだ足が初めて解けた。

五六歩默つて歩るき出した。

一人の女はランプを軒先まで出して大勢で何か噂しながら見て居た。

露地外の暗らい所へ來た時、今迄冷却して居た心臓が急に破裂するばかりに踊り立つのを知つた。顔にまで冷たい汗が流れて居た。細い小徑の石に躓きながら無上に駈つた。膝の關節が力なく拔けて、幾度もヒョロ／＼した。堀のやうな所を飛び越したやうにも思つた。

店々の灯が一度に目へ入映つた。太い木炭を縦横四面に引いたやうな亂雜な町の印象がグル〳〵に回轉した。

薄荷の匂。

「子を畜生に墮すか。」冷たい涙が目に湧いて來る。

薔るい鐵のやうな薔るい家の匂に嗅ぎ馴れた父は、火に驚く病馬のやう後退りして世間を懸怖れた。庇の深かい、日の通らぬ、あの冷やりしたあの奥書院。父はあの一間に閉ぢ籠つた限り、弱々しい咳嗽をしながら一年の殆んど十月を溫るい炬燵にあたつて暮して居た。モンパの襟卷にくるまつて、沸立たないで乾るやうな生涯を送つて居る。

父は十九の時、十六になる僕の生母を娶つた。そして、來る年も〳〵弱々しい小供ばかり產んで居た。兄は生れて二週間の間、人を雇つてその肌で暖めなければ、煖がたつやうに啼色も血の色も衰ひて行く嬰兒であつた。姉が生れた。男の子が二人生れて二人とも死んで了つた。その後に頭の鉢の氣味惡く開いた、髮の毛にも瞳孔にも色素の足りない自分が生れた。蟹のやうに手足が痩せて、一年經つても頸の骨が据らなかつたと云ふ。

若くして枯れ皺んだ母の顏を好く覺えて居る。背中を軟かに搔いて貰はないと睡り付けぬ虫氣の强い自分と、嬌慢にして邪推深かい父の目に付け廻されて、ジリ〳〵に痩せて行つた。僕が七つの年、梅雨

眞正面に座つた若い女は白いものなど付けて、髮の毛が薄かつた。

蟹を煮てるやうな溝の臭が、ムッとする程强く鼻へ入つて來た。

「誰れ、些いと。」若い女はランプの光を除けて、闇い表の方へ眉を蹙めた。默つて居た。

「些いと、誰れだよ。名を云ふもんだよ、この人は。」と女はだらしない風して立つて來た。骨まで腐れたやうな、年にも似合はず皺枯れた聲であつた。此方を見る男の目が片目の猫のやうに銳い光を持つて居た。

「何んだい、手前は。」女は顏を下からのぞいて、聲を尖らせた。腥い臭がプンと顏へかゝつた。

男も下駄を突ッ掛けて外へ出て來た。自分は何か云つたやうだが聲は出なかつた。頸を縮めて、呼吸を窘らして今にも落ちて來さうな男の拳のみを見詰めた。

「馬鹿、何んと間違ひやがつた、早く歸れ。」

と男は咽頭の底てあざ笑ひながら薄い肩の骨を突いた。よろめく拍子に、窘んだ足が初めて解けた。

五六步默つて步るき出した。

一人の女はランプを軒先まで出して大勢で何か噂しながら見て居た。

露地外の暗らい所へ來た時、今迄冷却して居た心臟が急に破裂するばかりに踊り立つのを知つた。顏にまで冷たい汗が流れて居た。細い小徑の石に躓きながら無上に駈つた。膝の關節が力なく拔けて、幾度もヒョロ〳〵した。堀のやうな所を飛び越したやうにも思つた。

店々の灯が一度に目へ入映つた。太い木炭を縦横四面に引いたやうな亂雑な町の印象がグル／＼に回轉した。

薄荷の匂。

「子を畜生に堕すか。」冷たい涙が目に湧いて來る。

舊るい鐵のやうな舊るい家の匂に嗅ぎ馴れた父は、火に驚く病馬のやう後退りして世間を驚怖れた。庇の深かい、日の通らぬ、あの冷やりしたあの奥書院。父はあの一間に閉ぢ籠つた限り、弱々しい咳嗽をしながら一年の殆んど十月を温るい炬燵にあたつて暮して居た。モンパの襟巻にくるまつて、沸立たないて乾るやうな生涯を送つて居る。

父は十九の時、十六になる僕の生母を娶つた。そして、來る年も／＼弱々しい小供ばかり産んで居た。兄は生れて二週間の間、人を雇つてその肌で暖めなければ、蝦がたつやうに啼色も血の色も衰ひて行く嬰兒であつた。姉が生れた。男の子が二人生れて二人とも死んで了つた。その後に頭の鉢の氣味悪く開いた、髮の毛にも瞳孔にも色素の足りない自分が生れた。蟹のやうに手足が痩せて、一年經つても頸の骨が据らなかつたと云ふ。

若くして枯れ皺んだ母の顔を好く覺えて居る。背中を軟かに掻いて貰はないと睡り付けぬ虫氣の強い自分と、嬌慢にして邪推深かい父の目に付け廻されて、ジリ／＼に痩せて行つた。僕が七つの年、梅雨

晴れに乾した白い繭の光りを見ながら草の枯れるやうに目を瞑したそれまで、三度孕んで三度ともに流產した。死んだ時も母はたゞの身體でなかつた。

世に多くの罪を產んだ女もあるが、僕の母ほど多くの罪を產んだものは無い。憐れなる人。

僕は母として優しい渠の顏を思ひ出すよりも、何時も醜い、淺間しい渠の姿を思ひ出すのである。

○

考へる日がつゞく、父のこと、家のこと、お紋のこと。目を閉ぢて居ると、自由にお紋と話することも出來る。

細君が來て暗らい枕元へ坐つた。白いものなぞ少し塗つてると見えて、龍腦の匂が疲れた鼻に銳くした。顏を見ると悟しい空想を破られるから、蒲團の襟に顏を深く埋めて默つて居た。

「貴方、本當に何うなすつたんですよ。」常に似合はずハッキリした姉らしい調子であつた。無遠慮に掌を額にあてゝ見て、

「まア、何うでせう、この汗は。」と驚いて居る。

「何んと云つても今日は聞きませんよ、さアお起きなさい。起きて外でもお覽なさい。西田さん、起きないと蒲團を剝ぎますよ。」と本當に蒲團へ手を掛けさうにする。

默つて身を窘めて居た。

「何うでせう、今日て何日雨戶を締めたまゝなんてす。私スッカリ掃除して上げますから、些いとだけ

お起きなさい。全く毒ですよ、何も召上らないで斯うしてお寢つてばかり被在つちや。西田さん、さア西田さん。」

　僕がそれてもだまつて居るので、

「ぢや雨戸を明けますよ。憤られたつて關はない、私本當に開けますよ。」と口では起ちさうに云つても未だ躊躇して居る。

　紉君は張合拔けして、暗らい所に默つて坐つて居た。そして、「本當に困るわねえ。」と投出すやうに云つて、足音靜かに梯子段を下りて行つた。

　女は好くやる。繼母も何うかした拍子に好く母としての威嚴を持つて、さも無い事を取立てゝ私を叱る時もあつた。けれどもそれは直ぐ頹れる。僕が默つて母の顏を見詰めて居ると、皮薄すな母の顏は直ぐ眞赤になつて、辛らさうに外を向いて了ふ。

「凉さん、そんなに見ないで下さい。私そてなくてさへ死ぬやうなのだから。」と悲しげに俯向いて了ふ。繼母は父の目と共に僕の目を恐れて居た。

　段々家に馴染むほど力なく我折れて、先のやうに父と爭ふ事もなく、偏頗なる父の愛情に征服されて行くのが見える。三十を越して間もない年なのに、好く物の名を忘れたり、ボンヤリ唇を弛ませて居るやうな日が續いた。話をしても前のやうに染々と人を誘ふ感情が見えない。

○

お紋の顏が笑つたり、語つたり、悲しんだりして居る。然しそれは細かに書く必要はない。また外に顯はれる筈もない。

お紋に就いての出來事と云へば、僕は取纒の無い感想めかした長い手紙を書いた。それを郵便箱に投じて置きながら、態とそれが配達される頃を見計つて萬作の家に行つた。何氣ない體て話し込んで居た。果して配達がその重い郵便を投げ込んで行つた。

「まア西田さん、貴方ぢやありませんか。」萬作の女房は手紙と僕の顏を見較らべて不審さうな顏付して居る。

「今途中で投込んで來たのです。」僕は萬作と芝居の話しながら、素氣ない口振りて云つた。

「まア何うしたと云ふんてせう。可笑しな西田さん。」

「好いんですよ。達けて置いて下さい。」

この話の間、萬作は不快さうに眉を顰めて居た。然し、間も無くそれを忘れて、話しつゞきの或る飜譯脚本の話に移つた。自ら云ふ通りこの「陋巷に朽ちる」無學なる老作者は唯漠然と新しい時代を恐れて居る。好むことも出來ず、解することも出來ないながら、何んとなく邪魔になつてならない。他人の將棋の前を唯混雜した心て通り拔けかねて居る。

何時まて居てもお紋を招んて來る樣子が無い。失望して歸つた。

○

雨の後は美しく晴れた。椎の木の森の濕り臭いこの家まで探し出して、わざ〳〵雀が軒あはひへ巣をかけた。咽頭の黒い軀の小さい雄と羽毛が荒れ立つて無態に醜い雌とが忙しさうに藁屑や髮の毛を搬んで居る。その休息ない本能的な働きを見て居ると心が切りに痛む。渠等は語ることゝ思ふことが無い。安心して活きて行けるのだ。

音羽に信心に行つた歸り路だと云つて、萬作の女房とお紋とが來た。女房は近所に用ありさうな事を云つて席をはづしたりした。

女は憎いほど取澄した顏して、尋常の事を尋常に話して歸つた。僕はたゞ矢鱈に興奮して了つて、話にもならない謎のやうな取纏の無い事ばかり喋つた。云つて見ると女が、

「まア奇麗ね。」

と先に居た書生が殘して行つた廉判書のマドンナを見に立つた時でも、僕は態と間違つた振りしてその隣にかけてあるベクリンの繪に就いて詩のやうなことを喋つた。それでも女は隱和しく睫毛の長い目で聞いて居た。考が一つに凝ると、あの思上つた美しい大きな目が不思議に悲しい意味を持つやうに見えた。解からないながらも一句〳〵氣を付けて聞いて居た。そして、

「然うですかね。全く私どもには考へても思ひ付かないことだわ。」女は溜息を吐かないばかりに悄れ返つて居る。

喋つて居る中は未だ好いが、話が切れると僕は女の前に居るのが辛らかつた。默つて居ると顏の色ま

て纏めて行くのが自分に氣が付いた。それを見せまい見られまいとする努力が苦しい。見られる度に視線が痛かつた。歸られた後の寂しさを考へながらも、早く歸つてくれゝば好い、歸つた後で獨りこの浮き上るやうな心持をユックリ空想に味ひたいとばかり思つた。考への外に顯れる時は、好くも惡るくも不純な色にひたされて了ふ。自分を欺かないのは空想の外に無い。相手の話出す氣組がその顏に閃くと此方はもう聞いた後の用意して居る。女はもう頸を心持傾げて、媚のある目付をしてこちらの感情を待ち設けて居る。

「貴方、その本當のものを書くとか云ふのは、どのくらゐ掛かるの、一年？　もつと。」女は偶と思ひ付いたやうにして云つた。

「さア、僕の事だからどのぐらゐ掛かりますか。自分にも正直目的は無いんです。」女が馴々しい口を利くだけ、態とはぐらかして丁寧に云つた。

「早く書いておしまひなさいよ。」

「僕も自分のことですから、始終然うは思つてますけどね。」

「そして、その間食べて居るお錢なら、どんなお錢でも關はないでせう。」

「どんなお錢ッて眞逆盗んでも來られないさ。」

女は默つて了つた。

女どもの歸つた後はガッカリして寢て居た。女は長い間の荒れた生活に疲れ倦んて、唯々眞實に餓ゑ

て居るのだ。もう二十六。女のものを思はせられる年頃である。

細君は逃出した女の素性を疑つて、聞き堀りだしさうにして居たが、默つて居る僕を恐れるやうに引込んで行つた。隣室には又植木屋の小娘が來て居る。

○

手紙をやつた。お紋が來た。會はない方が好い、會はないて獨りて考へて居る方が好いかも知れぬ。會つて居る間は常に苦しい。

○

萬作の家へ行く。萬作は酒に醉つて居て、僕を見て苦々しい顏して居る。何かお紋の事に就いて話し出したがるのを、女房に叱り付けられてグツ〳〵に止んで了ふ。お人好しの女房は僕を送り出しながら、「氣に掛けずに下さいよ、あの通りの馬鹿なんてすから。あれて居て妙に片意氣地てしてね、好く若い人達にキマリの惡るい思ひをするんですよ。この頃も貴方、他の娘への手紙を家の名宛に寄來したッて、俺の家は淫賣の手引きぢやないなんて、恐しく威張り出すんてすよ。いゝえ、それが癖なんてす。皆自分の損なんてすよ。」と唾を飛ばしながらベチヤクチヤ言譯をして居た。

○

午後十一時。廢れた雨がビシヤ〳〵降つて居る。

然うだ、女は今借かに狹い座敷に窮屈に寢て居る。

男？

あの邊に幅を利かせて居る派手な商賣の若者とする。鐵無地の羽織を着て、白キャラコの薄すい股引、意氣な緒の雪駄。目付のさかしい、五分もすかさぬと云つた風の若者かも知れぬ。

強い濃い香りのする女だ。汚女！

その時女は偶と考へたとする。誰の名を先づ心に呼ぶだらう。僕を呼んだとして置いても好い。

渠は饑えて居るのだ。世の中にありもしない眞實に饑えて居るのだ。これまでの荒れすさんだ生涯の餘りに手答ひないのに驚いて、生命を賭けて働きさうな生き甲斐のある生活を探して居るのだ。然し、そんなものは何所にある。

丁度、科學者が眞理を探がすやうなものだ。公理と云ふ無理を鵜呑みにして置いて漸くそこから發足した眞理が何にならう。世間の生活も或る點までは、親子の愛、夫婦の愛、盲目にある公理を先きへ置いて、やつとその上に色々のコロモを着せて居るのだ。芥子粒の無い金米糖はない。尤もそれが眞實でも眞理でもあるかも知れない。然し、それを何うして證明する。

僕は如何にしても證明の無い事實を信ずることが出來ない。

男は二度目覺めて疲れて眠つた。

又、目覺めた時。

「何うしたの、まだ寢なかつたの。」と物優しい聲で聞く。

「えゝ、色々ンな事を考へたもんだから。」と薄暗らい灯に寂しさうにニツコリした。
「何をそんなに考へてるのさ。あ、あれの事だね、知つてるよ。」
「いゝえ。」女は存外眞面目であつた。
「ぢや何をさ。」
「何をッて色々ンな事ですよ。世の中のことだの、自分の事だの。先を考へると心細くなるわ。」
「お止しよ、くだらない。考へて何うかなつた例がありますか。然う考へ〳〵すると、早くお婆さんになるよ。」
「このまゝ直ぐお婆さんになるのは厭やだわ。」
「だッて爲方がないさ。世間ッてものが然うなんだから。」
男も女も穢なく眠つて了つた。
雨の音は執念く地に音立てた。總ゆる地上のものを腐らせ溶かしてしまひさうだ。紙が水を吸ふやうに不快な寒さが頭から襟から滲み込む。その癖、前頭ばかり熱して居る。
…………毛のやうに細かく黒く降る雨に濡れて、柿の木の下を牝鷄が顫えながら歩るいて居る。濡れて瘦ッこけた穢ない頸をもたげて、恐怖の目を周圍にくばりながら、一足〳〵土を踏んで居る。泥にまびれた羽の先から水が滴り落ちた。鷄はそれでも思ひ切り惡るく、空を見上げる。何時晴れるか知れないと云ふやうな、重い黒い空は段々低く〳〵垂れ下つて來るやうに見えた。

男？

あの邊に幅を利かせて居る派手な商賣の若者とする。鐵無地の羽織を着て、白キャラコの薄すい股引、意氣な緒の雪駄。目付のさかしい、五分もすかさぬと云つた風の若者かも知れぬ。

強い濃い香りのする女だ。汚女！

その時女は偶と考へたとする。誰の名を先づ心に呼ぶだらう。僕を呼んだとして置いても好い。

渠は饑えて居るのだ。世の中にありもしない眞實に饑えて居るのだ。これまでの荒れすさんだ生涯の餘りに手答ひないのに驚いて、生命を賭けて働きさうな生き甲斐のある生活を探して居るのだ。然し、そんなものは何所にある。

丁度、科學者が眞理を探がすやうなものだ。公理と云ふ無理を鵜呑みにして置いて漸くそこから發足した眞理が何にならう。世間の生活も或る點までは、親子の愛、夫婦の愛、盲目にある公理を先きへ置いて、やつとその上に色々のコロモを着せて居るのだ。芥子粒の無い金米糖はない。尤もそれが眞實でも眞理でもあるかも知れない。然し、それを何うして證明する。

僕は如何にしても證明の無い事實を信ずることが出來ない。

男は二度目覺めて疲れて眠つた。

又、目覺めた時。

「何うしたの、まだ寝なかつたの。」と物優しい聲で聞く。

「えゝ、色々ンな事を考へたもんだから。」と薄暗らい灯に寂しさうにチツコリした。
「何をそんなに考へてるのさ。あ、あれの事だね、知つてるよ。」
「いゝえ。」女は存外眞面目であつた。
「ぢや何をさ。」
「何をツて色々ンな事ですよ。世の中のことだの、自分の事だの。先を考へると心細くなるわ。」
「お止しよ、くだらない。考へて何うかなつた例がありますか。然う考へ〳〵すると、早くお婆さんになるよ。」
「このまゝ直ぐお婆さんになるのは厭やだわ。」
「だツて爲方がないさ。世間ツてものが然うなんだから。」
男も女も穢なく眠つて了つた。
雨の音は執念く地に音立てた。總ゆる地上のものを腐らせ溶かしてしまひさうだ。紙が水を吸ふやうに不快な寒さが頭から襟から滲み込む。その癖、前頭ばかり熱して居る。
………毛のやうに細かく黒く降る雨に濡れて、柿の木の下を牝鷄が顫えながら歩るいて居る。濡れて痩ツこけた穢ない頸をもたげて、恐怖の目を周圍にくばりながら、一足〳〵土を蹈んで居る。泥にまびれた羽の先から水が滴り落ちた。鷄はそれでも思ひ切り惡るく、空を見上げる。何時晴れるか知れないと云ふやうな、重い黒い空は段々低く〳〵垂れ下つて來るやうに見えた。

鷄は顫えて軀を窘ませた。――この重苦しい空を一人で背負はされたと云ふ姿で。そして、人の居る軒には入らずに、雨に打たれながら木の陰もない裏餃の方へ歩るいて行つた。………然うだ、晝間窓にもたれて、家の事父の事など考へて居る時見た姿であつた。今も濡れた羽のまゝ鳥屋に眠つて居るだらう。

その時も思ひ出したが、「獸」と前額に烙された忌はしい繼母の顏が思ひ出された。それと共に激しい薄荷の臭が鼻を刺す。

僕を見る父の目は俄かに鋭くなつた。抑える憤怒に亂れて、僕の姿を見る時にはウヽと咽頭の底が唸つて居た。そして、遁げるやうに避けて自分を見まいとした。夜と云ふ夜は奥の書院に繼母の泣聲が聞えた。晝はそれでも何氣なさゝうに蒼く顫えながら台所へ出て居た。

僕の顏を見ると、「あゝ耻かしい。」と母は疊に突伏して了つた。細紐もて母を後手にしばり上げて、薄荷をひたした手拭を鼻の下に縛り付けてあつた。

「聲を立てるな、聲を立てるな。」と低い聲で叱り付けながら、父は弓の折でやつれた繼母の身體を打下して居た。

烈しい決意を持つた僕の顏を見るや、背の年寄らしく曲つた父はワナ／＼顫えた。僕が何んと云つても答へはなく、瘦せた兩膝をつかんで啜り泣いて居る。

「凉さんにまでこんな姿を見せるんですか、凉さんは子ちやありませんか。」と母は俯向いて居る。

父は俯向いて何も云はない。嚇かされるやうに顫える老人の目は、現在の子を見ることすら出來なかつた。

「私を畜生にしますか。」とキッパリ詰め寄つても、父は顎をガク／＼させるだけて何も云ひ得ない。

その後ても父は決して繼母を責めるのをゆるめなかつた。母は痩せながら今の德術を腹に持つた。

僕の一屬は慥かに世にはまらない人間に出來て居る。それはあの舊るい家の空氣の所以だ。僕の思ひ立ちは家政の整理てはない。先づあの家を見棄てゝ、新しい家に新しい性格をつくらねばならぬ。

父、伯父、分家、あの舊るい家の臭を嗅ぎ飽きるほど嗅いた連中の反對は素より承知して居る。僕はあの家を燒き拂ふまての決斷をして家屬を救はなければならぬ。

○

少し大事な御相談致し度候、と云ふ手紙を先に寄來して置いて、新しく仕立てた襦袢を持つて來た。

「大事な相談ッて何んてす。」故と落付いて顏を見ながら聞くと。

「まア後ても好いの。」と僕の樣子を窺ひ／＼面白くもない他の話をして居る。スッと張つた胸に、消炭色の羽織が品高かく見える。指を苦にして、古代錦の煙草入から煙草をひねつたり火鉢の傍をたゝいたりして居る。何所に一つ汚點の無さゝうな、キリッと吊つた顏を見ると、知つて居る身狀も忘れて、暗らい、血の痩せた自分の身體を除けたいやうな氣がする。指に光るものまて鋭く目に立つ。何う心を鞭つても心がおくびれる。

「あら、こんな積りぢやなかつた。」

やがて然う云つて振り棄てられる時の女の醒めた顔が見える。そして父が母を追ふやうに、未練らしく涙を流して、掻口説きながら後を追ふ自分の耻かしい姿も見える。それは忍ぶとしても、獨りて考へた空想から手を出して現實を掴むのは、折角に磨き上げた寶玉を自ら打砕くやうな惜しさもあつた。獨り考へて居る事は、誰れが破り得やう、嚇かし得やう。

「私萬さんに大變叱られたわ。」

暫くして女は思ひ出したやうに云つた。

「何うして。」

「何うしてッて、斯う些い〳〵來ちや惡るいんてせうよ。お前達の近寄る人ぢやないッて、お神さんまて大變叱られたの。」

「可笑しいな。」

「可笑しいてせう。だから……。」と云ひ掛けて女も流石に口を閉ぢた。顫えるほど話の續きを望みながら、その蓋を開らくことが出來なかつた。

僕は立つて雀の巣を見たり、ふたがつた咽頭を無理に口笛を吹いたり、些いとも落付いては居られなかつた。早く女を歸して自由な一人になりたい。

女は取澄した大人びた目付て僕の樣子を眺めて居た。裏へ出て用もなく竹籔の中をグル〳〵歩いて來

る間、女はキチンともとのまゝに坐つて居た。

女はその大事な相談と云ふ相談を話し出さずに歸つて了つた。玄關まで送つて來ると、梯子段の上で細君に出合つた。何時の間にか隣の部屋へ來て聞て居たのだ。

「些いと用があつたものですから。」と恐ろしくドギマギして、腰に蒲團をあてた細君が僕の前に立ち竦んで了つた。薄すい頰が直ぐ痙攣つる。

恐ろしさうに梯子を下りて行くのを上から眺めて居た。

○

終日寢て居て色々な事を考へる。狂罪者が證據に殘る血痕を探がし求むるやうに、女に對する僕の弱味を一つ／＼檢めて見た。そして愈々無いと見定めた上て、寢床の中で女へ宛てた長い手紙を書いたり消したりして居た。

丁度そこへ繼母からの手紙を受取つた。何年にも母の手紙を受取つたのは初めてと云つても好い。弟から再三の手紙に返事の無いのを慨いて、歸郷を急いて來たのである。

父上もお年の上なり、兄御の事に力を落されて以來、唯々打悄れて日の目も恐れるやうに御暮しあれば、常を忘れて御歸り下され度候と書いてあつた。兄の裁判費用や銀行の埋金にも、今度はいよ／＼屋敷への借財をしなければならないのだ。母や弟は僕の掌に覆はれて活きやうと思つて居る。

いよ／＼僕の働く時が來た。

○

お紋が來た。來ても話なくボンヤリ坐つて居る。少し酒氣を帶びて來た時もあつた。

默つて沈つと坐つて居られるほど、僕は獨り苦しむ。あの光る額の陰では何を考へ、何を思つて居るだらう。この女から遁れたい、遁れない中は僕の自由が無くなる。

僕の心持かこの頃は恐ろしく老け顏に見える。絕えず心を動かして居る時には氣も付かなかつたが、一所を見詰めて考へ込んで居る時の横顏を見ると、見違ふほどくすびて居る。

「何か少し話したら何うだね。」

「えゝ。」

「この頃は元氣が無いやうだ。」

お紋は又時々さげすむやうな鋭い目を僕に浴びせることもあつた。僕にはそれが、貴方の心持は好く知つてますと嘲るやうに取れて、心の底から冷たくなる。

寧ろお紋に遇ふ事が苦しくなつた。

○

現在のお紋に苦しむだけ、空想の女が美しく怡しくなつた。寢て居る時が又前のやうに長くなつた。女が來出してからやゝ規則正しくなりかけた生活が又亂れた。

細君は又切りに心配し初めて、煩さいほど世話をやきに來る。親切にされるほど母に就いての不快な

記憶が新しくなる。なるべく寄せぬやうにするけれど、打遣つても置けない苦勞性と見えて、日に何度となく僕の部屋へ入つて來て空想をさまたげる。終ひには自分で出掛けて行つて谷津まで呼んで來た。

「何うだ未だ固く固まらないのか。」

谷津は例の磊落らしい調子で入つて來たが、僕の顔色を見て矢張り驚いて居た。

「君痩せたぜ、シッカリしろよ。」と稀らしくシンミリした調子であつた。そして又僕の天分を擔ぎ出して切りに力を付けて居た。まだ僕を藝術で苦勞して居る人と見て居る。正直な男だ。

活きた胃袋ではとても耐えられさうも無い濃厚な味と、神經が痺れさうな匂と、そんな五官の夢を好く見るやうになつた。時々目を覺まして見ると皮膚一體に粘つた汗に濡れて居る。激しい夢の刺戟に腦細胞が消耗して全身の汗腺をのがれるとしか思はれない。……そしてその汗の匂が又奇妙に快い睡を誘つて來るのだ。

身體の中の活素が斯うして總て消耗しつくすならばそれても關はない。

○

惡夢、惡睡、脫氣、疲勞、消耗。

幾度か目が醒めたが、その度、何か恐ろしい事を思出さねばならぬやうに思つた、强い蓋して幾度も睡つた。

雨戶を閉め切つた暗らい枕元に誰か居る。細君であつた。又食物の世話だらうとその儘にして居る

と、
「起きて彼在るんてせう。」と細君が低くい聲て剛々しく云つた。その聲が雷の如く耳へ墜ちた。
「彼方へ行つて下さい。」僕は蒲團へ突ッ伏して手を振つた。涙が留度なく流れる。
「何うなすつて。」と細君はオロ〳〵して居る。
「彼方へ行くんてす。」
「でも、何うなすつたのてす。」
「顏を見せるな、行け。」
細君は窃つと起つて出て行つた。薄荷が又匂ふて來る。
外の眩しい日は雨戸の隙間節孔から雨のやうに室內へ降りそゝいて居る。五六日前に孵つた雀の雛は黃い口を明いて、ピチャ〳〵と啼き出てゝ居た。その今々に乾殺されるやうな啼聲が頭の中を狂ひ廻つて居る。
舊るい烙印に並んて、新しい烙印が前額に捺されて了つた。
恐しい夜てあつた。早く燈を消して闇黑の中にウト〳〵して居ると、家を出る最後の拂曉の父の顏が偶と目に浮んだ。板の間に烈しい物音を聞いて駈け付けると、棟から下つた網の下に父が泣いて居た。その時の恨の顏が闇の中からのしかゝつて來た。目を瞑つてもそれが疲れた網膜に刻り付けられて動かない。白目勝の小さな目が錐の光のやうに射す。

それを紛らすために何時かお紋に扱いた葡萄酒の殘りを盃についだ。

「まア、そんなに召下つては不可ません。」と手から盃を奪はうとしたのが細君であつた。醜い顔の光つた細君であつた。

細君は顫えて色を失つた。

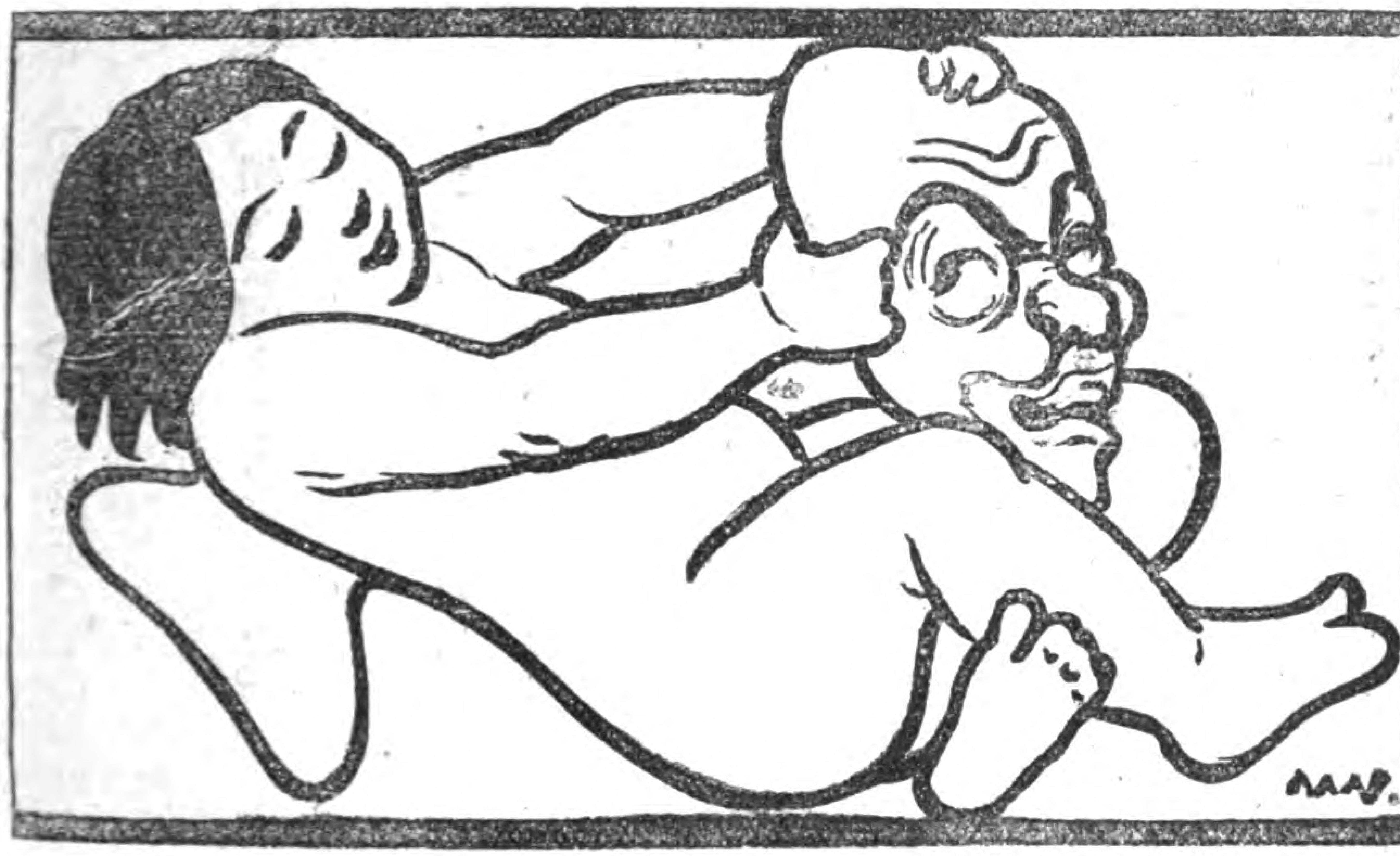
○

この日記は終らなければならぬ。たゞ一つお紋の事を書足して置きたい。

その恐し日、閉め切つたまゝの雨戸を開ける事をゆるさないで、唯眠られるだけ昏々と眠つて居た四日目か五日目の朝、細君が手紙を持つて來た。それはお紋からの手紙であつた。そのまゝこゝへ貼り付けて置く。

おゆるされ下さるべく候。私も近々ある人の世話にてよそに縁付くことゝ相なり申し候。世の中と申すものは、かへつて考へた方にならないで、獨りてのなりゆきのまゝになつて行くものと思はれ候。あなた樣としばらくの御交際、これは私の爲めにも大變に好く、このやうになつて行きたいと思ひながら、思へば思ふほど逆になつて行くこと不思議なほどに候。ツク〴〵いやになつて居るところへ、ふと知合よりこの度の縁談を持ち込まれ、何んの考も無くそれに從ふ氣になり申候。さら〴〵貴方を忘れたのでは無いけれど、爲方の無い事とおあきらめ被下度候。

細君はすまぬ顔してその手紙を傍から見て居た。（完）



四月盡

森田草平

一

お仙は久造の寢てゐる足許て、稍じれ氣味に簞笥の引手をがた〳〵云はせて居た。やがて入用の物が目附かつたと見えて、立上りさま一寸良人の寢顏に眼を呉れたが、何か云はうとして、其儘默つて出て行つた。

久造は目を半眼に開いたまゝ、お仙の出て行く後姿を見送つた。何うやら見ず知らずの女が來て、我物顏に此家を引掻廻して行くやうな氣がして成らぬ。

お仙と呼んだのては、振回り相にない。

お前の名は何と云ふんだい、眞實の名は。お前と連添つてから最う十年にも成るが、俺は未だお前の名さへ知らない。

少時うつとりとして襖の穴を見詰めて居たが、又ごろりと寢返りを打つた。時々こんな氣持に成つた。

此間から何年にも覺えのない不眠症に罹つて、夜もおち〳〵眠られない。それて朝寢はするが、矢張能くは寢附かれないのて、いろ〳〵な妄想が湧く。自分ぢや陽氣の加減だらうと思つた。身體がけつたるいから、店の者任せにして、商賣にも張合がない。ずつと以前、定まつた目的もなく、生きてるだけがおつくう相にぶら〳〵してゐた時分の病氣が再發したやうにも思はれた。それならば自分ぢや手の附け樣がない。

久造には心の隅に燈心の灯影の樣に小さく燃える思出があつた。平常ならそれに似た話を聞いても、他所事としか思はれない、自分の一生にそんな事が有つたとは、自分ながら信ぜられない程に微かな思出てあつた。

此頃に成つて、時々それが舊い疵痕のうづく樣に氣に成ることがあつた。久造が溜池の洋服店に年期奉公をして居た頃のことて——其頃は未だ年紀も十臺の小僧上りてあつたが——主人の娘と通じて、それが親方の耳へ這入ると、添ふ添はせぬと云ふいきさつから、無分別にも二人て心中を計つた。一日一夜大森の海岸をうろついた揚句、六郷川の堤てかね〳〵手に入れて置いた毒を仰いだ。それから漁師に見附かつて病院へ擔ぎ込まれたが、女は死んで男は助かつた。久造はそれ切りて女の死顏も見な

い。女が死んだと云ふことも、餘程經つてから聞いた。偖て命が助かつて見ると、一日も働かずには置いて呉れぬ。元の主人へも歸れぬ所から、渡りの職人に成つて、彼方此方の洋服屋を渡つて歩いた。他の職人の樣に酒を飮んだり女を買つたりはしないが、別に身を入れて稼ぐでもない。只生きて居るから手を動かして居ると云ふ風であつた。それを見兼ねたのか、お成道に道具屋をしてゐる伯父が、資金を貸して、此處に店を持たせた上、お仙と云ふ上さん迄當てがつて呉れた。何事も伯父任せにして居たので、自分ぢや嫁の話など餘り氣乘もしなかつたが、何でも母親と云ふは伯父が出入先の金持の邸でお物仕をして居たが、急に病み附いて死んだので、親一人子一人の外に手頼るものもないと云ふのである。それにして女の年紀が老けて居たが。そんな事は何うでも可かつた。愈嫁附いて來てから、當人の云ふ所に依ると、京都の生れて、阿母さんは御所に勤番の侍の娘であつたが、兩親が亡く成つて、婿に貰つた男が家の零落れると共に、惡漢の本性を出して、それが爲に隨分難儀をした。終ひには阿母さんを追ひ出して、内へ妾を入れ、二人して未だ頑是のないお仙を打つたり叩いたりした。或時その妾と相談の上、十一に成つた許りのお仙を藝子屋の下地子に賣らうとしたのを、他所に奉公して居た阿母さんが聞き出して、こつそりお仙を連れ出して、東京へ逃げて來た。それから最う何年にも成るが、風の音便に聞くと、親爺は段々いけなく成つて、妾との間にも澤山子供が出來た上、お仙は見附け次第に女郎にても叩き賣らねば置かぬと云つてるさうな。左樣云ふ譯だから、阿父さんが生きてる間は故郷へも歸られない。外に身寄も何もない、憐れな身の上だと云ふのである。其話はそれなりにして、久造もついぞ女

やがて久造が這入つて來た。大きな茶湯臺の上に箸と茶碗とを伏せたまゝ、お仙はじつと待つて居た。何うやら斯うやら朝飯が濟むと、手早く茶碗や箸を洗桶へ放り込んで、一わたり茶湯臺に拭布をかけて鼠入らずの横へ片附けた。

偖てやつと落着いたと云ふ樣に、長火鉢の向ふへ坐つて、改めて湯呑に茶を注いで侑めた。

如何にも器械的に、恰度看護婦が患者でも取扱ふ樣に、順序よく運んで行くのを眺めながら、久造は不思議相にお仙の顏を見上げた。その落着いて、何氣ない容子が又久造の心を苛立せた。

「お前の名は何と云ふんだい、眞實の名を云つて見ろ」と、眞向から浴せかけて遣りたい樣な氣が、又むら／＼と起つた。

「ねえ、貴方。寅公にも困るぢやありませんか。昨夜も又歸らないんですよ。」

お仙の方から口を切つた。

「それも一人で行くんなら可いんですがね、昨夜は店の者迄引張出さうとするんですつて。眞實にあんな奴つたらありやしない。脚氣が惡いと云つて、毎日仕事もせずにぶら／＼してる癖に、昨日も小遣がないから貸せと云ふんですよ。左樣々々はと思つたが、眞個困つてるんだらうと思つて、貴方に內密で些と許り渡して遣ると、最う其晩に飛び出すんですもの。」

久造はお仙の云ふことが耳へ這入つたのか這入らないのか、相手の顏を見詰めたまゝ眼も動かさない。

い。女が死んだと云ふことも、餘程經つてから聞いた。借て命が助かつて見ると、一日も働かずには置いて呉れぬ。元の主人へも歸れぬ所から、渡りの職人に成つて、彼方此方の洋服屋を渡つて歩いた。他の職人の様に酒を飲んだり女を買つたりはしないが、別に身を入れて稼ぐでもない。只生きて居るから手を動かして居ると云ふ風であつた。それを見兼ねたのか、お成道に道具屋をしてゐる伯父が、資金を貸して、此處に店を持たせた上、お仙と云ふ上さん迄當てがつて呉れた。何事も伯父任せにして居たので、自分ぢや嫁の話なぞ餘り氣乘もしなかつたが、何でも母親と云ふは伯父が出入先の金持の邸でお物仕をして居たが、急に病み附いて死んだので、親一人子一人の外に手頼るものもないと云ふのである。それにして女の年紀が老けて居たが。そんな事は何うでも可かつた。愈嫁附いて來てから、當人の云ふ所に依ると、京都の生れて、阿母さんは御所に勤番の侍の娘であつたが、兩親が亡く成つて、婿に貰つた男が家の零落れると共に、惡漢の本性を出して、それが爲に随分難儀をした。終ひには阿母さんを追ひ出して、内へ妾を入れ、二人して未だ頑是のないお仙を打つたり叩いたりした。或時その妾と相談の上、十一に成つた許りのお仙を藝子屋の下地子に賣らうとしたのを、他所に奉公して居た阿母さんが聞き出して、こつそりお仙を連れ出して、東京へ逃げて來た。それから最う何年にも成るが、風の音便に聞くと、親爺は段々いけなく成つて、妾との間にも澤山子供が出來た上、お仙は見附け次第に女郎にでも叩き賣らねば置かぬと云つてるさうな。左樣云ふ譯だから、阿父さんが生きてる間は故郷へも歸られない。外に身寄も何もない、憐れな身の上だと云ふのである。其話はそれなりにして、久造もついぞ女

やがて久造が這入つて來た。大きな茶湯臺の上に箸と茶碗とを伏せたまゝ、お仙はじつと待つて居た。何うやら斯うやら朝飯が濟むと、手早く茶碗や箸を洗桶へ放り込んで、一わたり茶湯臺に拭布をかけて鼠入らずの横へ片附けた。

偖てやつと落着いたと云ふ樣に、長火鉢の向ふへ坐つて、改めて湯呑に茶を注いで俯めた。

如何にも器械的に、恰度看護婦が患者でも取扱ふ樣に、順序よく運んで行くのを眺めながら、久造は不思議相にお仙の顏を見上げた。その落着いて、何氣ない容子が又久造の心を苛立せた。

「お前の名は何と云ふんだい、眞實の名を云つて見ろ」と、眞向から浴せかけて遣りたい樣な氣が、又むら〳〵と起つた。

「ねえ、貴方。寅公にも困るぢやありませんか。昨夜も又歸らないんですよ。」

お仙の方から口を切つた。

「それも一人で行くんなら可いんですがね、昨夜は店の者迄引張出さうとするんですつて。眞實にあんな奴つたらありやしない。脚氣が惡いと云つて、毎日仕事もせずにぶら〳〵してる癖に、昨日も小遣がないから貸せと云ふんですよ。左樣々々はと思つたが、眞個困つてるんだらうと思つて、貴方に內密で些と許り渡して遣ると、最う其晩に飛び出すんですもの。」

久造はお仙の云ふことが耳へ這入つたのか這入らないのか、相手の顏を見詰めたまゝ眼も動かさない。

「今にぼんやり歸つて來るだらうから、貴方からも確り云つてお遣んなさいよ。」

「うむ、云つて遣るさ。」

久造は自分でも何と云つたか解らなかつた。「お前こそ何處から來て何處へ行く。何時迄俺と斯うして居る積りなんだ。」

口端まで出たのをぐつと嚙み占めて、四邊を見廻した。茶簞笥の横に一挺の古三味線が嚢に包んだまゝ懸けてあるのが眼につく。しばらくそれを見て居たが。

「近頃は餘り三味線も引かないやうだね。ちつと彈いて見ないか。」

わざと何氣ない樣な振をして云つた。

「まア氣樂な」と、お仙は思ひがけないやうな顏をして、「貴方がそんな氣だから、店の締りがないんですよ。」

「だつて、最初内へ來た時分は、能く上唄だとか何だとか云つて彈いて居たぢやないか。」

「そりやア」と、お仙は始めて白い齒を見せて、「最う何も記えて居やしませんよ。」

「そんな物かい、些との間彈かぬと、忘れるものと見えるね。」

「些との間でもないわ、何年にも三味線なぞ持つたことはないぢやありませんか。又如何してこんな物が此處へ出て居たんだらう」と、一緒に壁の三味線を見上げたが、其顏には何處やら嬉し相な色が仄見えた。斯うして所帯にかまけて居ても、元は幾許か藝事の修養もあると云ふことが女心に一つの矜持

と成つたのであらう。

久造はその幸福な顔色が羨ましい樣にも思はれた。

「あの女のことは、お前、何とも思つて居ないのかい。」

偶と口に出してそんな事を云つて見た。

「何ですつて」と、お仙は怪訝な顔をした。

「うゝむ、何でも無いさ」と云つたが、久造は自分ながら藪から棒の心持がした。「唯、彼女のことをお前が些とも氣に掛けて居ない樣だから。」

「彼女とは」と、お仙は忽ち眞顔に成つた。

しばらく顏を眺め合つて居たが、急に、「あゝ、岡田のお鶴のことですか。」

久造はその頓狂な聲に驚かされた。

近頃洋服屋仲間の組合で、二三度引續いて辨天祠に會合したことがある。その時給仕に出た女中のお鶴と云ふが、群を壓して容貌が好く、藝者も顏色がなかつたと云ふやうなことを、內へ歸つてから、久造がお仙に話した。其後も何かの柏子にその女のことを云ひ出したことがある。それを想ひ出して、お仙が今こんな事を云つたのであらう。

「あんな女のことぢや無いさ」と、久造は下を俯向いて苦笑ひをした。

「だつて、好い女だと云ふぢやありませんか。貴方も隨分褒めていらしたわ。」

久造は返辭をしなかつた。

「それぢやア」と、お仙は冗談らしく遠い所に相手を求めるやうな眼附をした。

「何さ、彼女のことさ」と、久造は自分で自分の言ひ出した話を打切るやうに、「溜池の――元の主人の家のお美津のことさ。」

「あゝ、お美津さんのことですか。」

お仙はしばらく默つて考へに沈んで居たが、

「だつて、死んだ方でせう。」

成程此女には死んだ女のことなぞは如何でも可い、それよりも生きた岡田の女中の方が氣に成るのであらう。

「死んだ方と云や、今日は水野さんのお葬式ですよ、彼家のお婆さんがお亡くなりに成つた。如何しても貴方が送つていらつしやらなきや惡いでせう。」

水野と云へば此界隈の地主で、久造も店子の一人であるが、又洋服の方で始終贔負を受ける顧客でもあつた。

「左樣さな」と、久造は太儀らしい顔色を表はに見せて、「彼家の寺は何處やらだつたね。お前は知らないか。」

「何でも築地の御門跡だと云ふことですよ。築地ぢや隨分な道程ですね。」

「そりや大變だな。併し電車で先きへ廻つてりや可いだらう。」

「それで可いんですか。午前九時の出棺と云ふんですから、最うぽつ〳〵お出かけなさらなきや成りますまい。羽織の皺も火熨斗を置いてよく延ばして置きましたから。」

それからお仙は自分で手傳つて、久造に羽織袴を着けさせた。久造が黑の山高帽子を手に持つて、店へ出て來た時には、店の小僧が火鉢の側に頭を寄せて、何かぼそ〳〵話して居たが、主人の顏を見て急に坐を開いた。

店先に据ゑた玻璃の金魚鉢に日光が當つて、金色の美しい鱗がぎら〳〵と輝いた。

三

築地の門跡下の常明院と寺々の門を、四月末の空の薄曇つた日の正午近く、幾對となき生花造花、放鳥の籠などを前に立てゝ、佛葬の寢棺がしめやかに、潛つた。その後からどや〳〵と會葬者が這入つて來た。

御堂の椽側に棺を据ゑて、佛前に美々しい金襴の袈裟を掛けた導師伴僧の讀經が始まつた。親類緣者を始め一同椽に上つたが、會葬者が多いため御堂に溢れて、庭に立つて居るものも少ない數ではなかつた。久造も最初受附へ名刺を出した後は、庭の片隅の櫻の老樹の下に引下つてゐた。花片は大抵落ち盡して、赤い新芽のつのぐむ頃であつた。此邊にも會葬者がごつた返して、誰の墓かは知らぬが、石塔の臺石の容赦なく下駄の泥に汚されるのもあつた。

久造は一人離れて、一歩々々御堂の背後の墓場の中へ這入つて行つた。讀經の聲は木立を洩れて、時々波の様に高まつては又だん〳〵低く、やがて聞えなく成つた。空は次第に雲が重なつて、今にも雨が絞れて落ちるかと思はれた。風さへ一重の夏外套では寒い程にひや〳〵した。久造の心は遠い昔に歸つた。あの怖ろしい一日に歸つた。

それは一種の恐怖である。甘い戀ではない。

師走の月の、恰度こんな曇つた日であつた。沖の方で白い泡の倒れては立つ波を片方に見ながら、大森の海岸を穴森へかけて一日彷つた。二人ながら如何する分別もない。其うちに段々日は暮れて、曇つた空はびしよ〳〵時雨出した。雨具も持合せず、木の下や岩蔭に雨宿りをしやうともせず、づぶ濡れに成つたまゝ、夜中迄彼方此方歩いて居た。十一時頃池上の宿屋の大戸を叩いて、一夜無理に泊めて貰つたが、床に就いてとろ〳〵とすると、一疋の黒猫が來て久造の耳を嚙んだ。聲を立てやうとしても聲が出ない。やつと寢返りをしたかと思ふと今度は横腹に咬り附いた。呻聲でも立てたのか、女に揺り起されて眼を開く。如何しても直ぐに此宿を抜けて出やうと云ふ、戸の外は未だ暗かつた。雨の小止みしたのを幸ひに六郷川の堤迄走りついた。

夜のしら〳〵明けの頃であつた。

久造は女が口から泡を吹く顔を見た。草の根に爪を立てゝ藻掻く有様を見た。

其後十幾年の長たらしい歳月をぢり〳〵と此瞬間に二たび繰回して生きた。終に家に殘して來た二仙

に思ひ及んだ時、はたと夢から覺めた樣に立ち上つた。頸筋にぢと〳〵と汗のにぢむを覺えた。

御堂では頻に鉦の音がした。

寺の門へ廻つた時には、會葬者がぞろ〳〵歸つて行く所であつた。門前に數十臺並んだ人力車が目まぐろしく側へ寄つて來た。久造は忙しくその中を通り拔けて、濠についた町の曲角まで來て、一寸立ち停つた。麻布にあるお美津の家の菩提所へ廻つて行かうかと不圖そんな心が湧いたのである。あの日以來、久造はお美津の顏を見ない、その墓へさへ詣つたことはない。何故といふ理由は容易に云へないが、唯事實に於て詣つたことはない。

「三宅さん」と、不意に久造の肩を叩くものがあつた。

「え」と、思はず振回ると、米山と云ふ同業者で、

「何處に居なすつたのです。私やア最前から貴方の跡許り捜して居たが」と云ひかけて、急に聲を低うして、ちと商談で火急に談合したいことがあるから、こんな折の歸りではあるし、誠に濟まないが手間は取らせぬから、一寸三十間堀邊の何家へつき合つて呉れぬかと云ふのである。

久造は兼て米山の人柄も知つて居るし、これから麻布へ廻らうと考へて居た矢先きでもあるから、如何かして斷はらうと思つたが、たゞ

「えゝ、〳〵」と云ふ許りて、一向はき附かなかつた。

米山は久造が辭退しさうな顏色を見ると、急に又しつこく持ちかけて、到頭連れて行つて仕舞つた。

久造もすゝまぬながら連れられて行つた。

お美津の墓へは此日も詣らなかつた。

四

雨に成つた。ほそ〳〵と土に沁み入るやうな雨が降つた。

始め三十間堀のどある家へ行つたのが、米山は例の酒癖につれて、又久造を誘ひ出して日本橋へ移つた。それから二三軒所を變へて、兩國邊の居酒屋まで下落した時は、夜も十二時に近かつた。久造も最初の間はしぶりながら隨いて行つたが、終ひには自分から先に立つやうにして醉拂つてゐる米山を引廻してやつた。併し酒盃は一つも手にしなかつた。

「なにッ、人を見損なつてやアがるか、うぬ。」

「生意氣云ふな、此泥棒め。」

わ――つと云ふ聲が一時に奥の方で起つた。久造は腰掛けて居た酒樽から立上つて、帳場の方へ近づいた。だん〳〵聞いて居ると喧嘩の相手は未だ若い、汚れた絆纏を着た遊人らしいので、赤ら顔の肥大つた亭主に勘定を踏み倒したとか、前からの滯りが何だとか、あくどく小突かれて居る。

二人ながら醉つて居るらしい。

「そりやア何だ、て、亭主の方がよくないや。餘り因業だい。」

背後によろ〳〵して居た米山が不意に口を出した。久造ははつと思つたが留める暇がなかつた。

「何ですか、お前さん」と、亭主は眼に角を立てゝ寄つて來た。

「なに、此男は醉拂つてるもんですから」と、久造はぺこ〳〵お叩頭をして、米山を此方へ連れて來た。そこ〳〵に勘定を濟まして繩暖簾を出た。米山がまだ何とか云つてじぶくるのを、無理に人力車に乘せて、家へ送つて遣らせることにした。そして自分は折柄來た赤の終電車に飛び乘つた。

電車の中には、片隅の方に二人連れの職工らしいのが居睡りをして居る外に乘客はない。久造はほつと息を吐いた。それと共に身體中の血管が開いて、ぐら〳〵と眩暈がする樣に思つた。

「いやだ、〳〵、如何したら可いんだらう」と、聲を上げて呟いたが、自分ながら自分の聲に驚いて四邊を見廻した。

電車は小川町迄て、其先は雨の中を歩いて戻つた。

家内中寐しづまつて居た。濡れた外套を勝手元の板の間に掛けやうとして、障子を開ける音が耳へ這入つたのか、お仙はうつゝて手探りにさぐつて見て、良人が自分の側に居ないのに氣が附くと、吃驚して飛び起きた。

「貴方、其處にいらしたの、何していらつしやるの。」

久造は思はず呼吸を詰めた。

「まアお歸りなさい」と、お仙は始めて正氣が附いた樣に、「何時お歸りなすつたの、寒かつたてせう。」目をこすり〳〵片膝立てゝ起上らうとしたが、

「あ――」と、口を開いて呻欠をしたかと思ふと、又ぐんにやりと蒲團の上へ倒れて仕舞つた。

久造は長火鉢の側へ戻つて來た。鐵瓶を釜敷きの上へ卸して置いて、火箸て豆の樣に成つた埋火を掻起しながら、雨にこゞへだ兩手をかざした。

「今、今火をおこして上げますよ。」

から云ふかと思ふと、又其後から微かな鼾聲が聞へた。

あゝ、この女。何處から來た。何處から來て、俺の生活の中へ割込んで、何處迄くつ附いて行くのだらう。他人と他人が寄つて、過去も知らず、未來も知らず、或時期の間、離れられない約束でもある樣に、共同生活をする。それが當り前の樣にわれも人も怪しまぬ。分らない。

久造は夜が明けたら直ぐに立つて、京都へ行つてお仙の身元を取調べて來やうと決した。

「最う寢ませう。早く此處へ來てお休みなさいな。」

お仙は突伏したまゝ、片手を上げて招くやうな手附をした。

それを見ると、久造はわれにもあらず身内が戰いた。

五

明くる日は朝から雨が降つた。

其後二日經ち三日經ち、十日の餘も過ぎた。又一箇月經つた。

久造は未だ京都へ行かない。（をはり）

和歌

尾上柴舟選

三浦曉村

○

仰ぎ見ていたく心のかわきをばおぼえぬ更けし町のともし灯

しみ〴〵とつめたき秋を感じけりひとり來て泣く月光の下

かわきたる夜のかなしみを月光の中に落葉のむれは泣き入る

ほのあかり木の間に見えぬなつかしき人の瞳の如くさびしく

わが泣けるみにくき顏のいづれにかうつりてさびし透明の空

秋の日のくるめき落つる大海の前にさびしき身をば泣くかな

ふと海のとよみ聞えぬ高原の黄なる草葉の中に眠れば

山の夜を落葉ちりしくそこここにさびしき音の絶えず聞えて

冷やかに葬りはてし若き日をかへり見る夜は涙流るゝ

涙落つしらけし午後の日光をそびらにうけて森を歩めば

飛川晶爵

○

思ふ子もあらで淋しきこの命このうら若さ如何すべけむ

煙青きマニラ煙草をふかく吸ふときにつと湧く淡きかなしみ

灰色に濁れる冬の空のもと雜木林に來てひとり泣く

安けきは眼閉ぢ無心にあるの時深夜野寺の鐘聞くの時

どよめきて自働車來り電車去る銀座通りの白晝のかなしみ

一室の光まばゆき灯にむかふたそがれ時のうら佗しさよ

何となう威あるがごとき夜のしじまわれと君とは物も語らず

○　　　　　　　　　下村淳

甘く淡く我が少年の悲しみは二月の野べにたゞよひてあり
冬の午後故なく胸のさびしさにうす日に照られ野を一人行く
冬の午後湯槽の中に心よく一人ひたりて眼をとぢてあり
冬の風落葉の森にさわげるを窓に眺むる胸のつめたさ
何ものかやはらかきものたゞ一つ與へよ我れの孤獨の胸に
落葉する林の中へ迷ひ行かむ行きてさめざめ一人嘆かむ
春の山澄みたる空にやはらかき光をあびてしづかに立てり
默し立つ群集の中に我れもまた默して遠き山の火を見る
やはらかき光しづかにゆるやかに空に流れて四月と成れり

○　　　　　　　　　岩谷莫哀

山上にみなし兒たてり青空にほしひまゝなる雲漂へり
みなし兒も今日の一日は春風に吹かれて何の思ふことなし
物なべてたらへる春の日の下にわれのみ一人うち嘆く哉
やはらかき夜の姿よ南國の小さき町に春の月照る
まろらかに月はてらせりあら磯のこごしき巖の一つ一つを
春の野べ戀する人もせぬ人も共に花など摘みかへるなり
春生れぬ若さといへるよろこびの底に悲しき影をいだきて

○　　　　　　　　　村田光烈

あゝ月はまたも浮びぬどう／＼とどよめく海の上に青みて
いさゝかのほてりえし夜のわれゆゑに安さこゝちに君を見しかな
疲れてはつよき日のさす窓に倚りたゞ徒らに午後の街見る
わが心疲れはてゝは山を見つ海見つたゞにほう

として立つ

わが道をわれ靜やかに歩みゆく知らず前なる子も後の子も

わが君はよく日曜の一日をうたふがゆゑにさびしまぬかな

○　眞崎白城

黝める海に向へば知らず〳〵「死」などを思ひ心おびゆる

音もなく大天地は暮れてゆくその靜けさに默して立てり

靜かなるさふらん色の夕空の底にひそめるその哀愁よ

母にわかれ泣くより外に何事も知らず嘆きし日を思ひ出ぬ

柔らかに春の日は照る野に臥して思ふ事なく空を見つめぬ

すが〳〵し若草の香をなづかしみしづけき丘に今日も來りぬ

○　天野謙二郎

眞晝の日白くちりくるほの匂ふ林檎の花に虻うたふ時

シグナルの赤き野を越え豆みのる岡にのぼれば海は吐息す

たそがれの湯槽のふちに頭をばもたせて今日の安さを思ふ

青き霧あるかなきかにたゞよへる野のはて遠し雜木の列

座蒲團のほとりに投げし卷煙草とらむともせず日を浴びてゐぬ

○　小澤紫紘

朧ろ夜の柔らかき風通ひくる花の木かげに泪おぼえぬ

我が生れし佐原は悲し小野川のにごれる水に家鴨泳げる

おぼろ夜や絶えて久しく忘れゐし人の名なども呼びぬほのかに

海棠の花はなつかし柔かき春の大氣の中にうるほふ

さくらちる春くれがたよ心なく犯せる罪にさめ〴〵と泣く

○　水上おぼろ

初夏の日光を吸ひ高調の歌をうたはん心ゆくま

○ 下村淳

甘く淡く我が少年の悲しみは二月の野べにたゞよひてあり

冬の午後故なく胸のさびしさにうす日に照られ野を一人行く

冬の午後湯槽の中に心よく一人ひたりて眼をとぢてあり

冬の風落葉の森にさわげるを窓に眺むる胸のつめたさ

何ものかやはらかきものたゞ一つ與へよ我れの孤獨の胸に

落葉する林の中へ迷ひ行かむ行きてさめざめ一人嘆かむ

春の山澄みたる空にやはらかき光をあびてしづかに立てり

默し立つ群集の中に我れもまた默して遠き山の火を見る

やはらかき光しづかにゆるやかに空に流れて四月と成れり

○ 岩谷莫哀

山上にみなし兒たてり青空にほしひまゝなる雲漂へり

みなし兒も今日の一日は春風に吹かれて何の思ふことなし

物なべてたらへる春の日の下にわれのみ一人うち嘆く哉

やはらかき夜の姿よ南國の小さき町に春の月照る

まろらかに月はてらせりあら磯のこごしき巖の一つ一つを

春の野べ戀する人もせぬ人も共に花など摘みかへるなり

春生れぬ若さといへるよろこびの底に悲しき影をいだきて

○ 村田光烈

あゝ月はまたも浮びぬどう／＼とどよめく海の上に青みて

いさゝかのほてりえし夜のわれゆゑに安きこゝちに君を見しかな

疲れてはつよき日のさす窓に倚りたゞ徒らに午後の街見る

わが心疲れはてゝは山を見つ海見つたゞに眠ら

とし て立つ

わが道をわれ靜やかに歩みゆく知らず前なる子も後の子も

わが君はよく日曜の一日をうたふがゆゑにさびしまぬかな

○ 眞崎白城

黝める海に向へば知らず〳〵「死」などを思ひ心おびゆる

音もなく大天地は暮れてゆくその靜けさに默して立てり

靜かなるさふらん色の夕空の底にひそめるその哀愁よ

母にわかれ泣くより外に何事も知らず嘆きし日を思ひ出ぬ

柔らかに春の日は照る野に臥して思ふ事なく空を見つめぬ

すが〳〵し若草の香をなづかしみしづけき丘に今日も來りぬ

○ 天野謙二郎

眞晝の日白くちりくるほの匂ふ林檎の花に虻うたふ時

シグナルの赤き野を越え豆みのる岡にのぼれば海は吐息す

たそがれの湯槽のふちに頭をばもたせて今日の安さを思ふ

靑き霧あるかなきかにたゞよへる野のはて遠し雜木の列

座蒲團のほとりに投げし卷煙草とらむともせず日を浴びてゐぬ

○ 小澤紫紘

朧ろ夜の柔らかき風通ひくる花の木かげに泪おぼえぬ

我が生れし佐原は悲し小野川のにごれる水に家鴨泳げる

おぼろ夜や絶えて久しく忘れゐし人の名なども呼びぬほのかに

海棠の花はなつかし柔かき春の大氣の中にうるほふ

さくらちる春くれがたよ心なく犯せる罪にさめ〴〵と泣く

○ 水上おぼろ

初夏の日光を吸ひ高調の歌をうたはん心ゆくま

て

何物か心よりして落ちしごと白椿散る晝のさびしさ

思ひ出は山櫻咲く温泉(ゆ)の街に別れ來にける少女の瞳

少さき頃獨樂落しける河に來て佇む癖のつきにけるかな

○　　山地信

むさし野の黒土の畑靑きもの少なくなりしころの日のそら

黒土にしをれし葱の黄なる葉を夕べの風の吹くぞさびしき

いやはての沈丁の香をもちてくる五月の風のこゝろよきかな

芽をふきし街の柳をかさかさと二月の午の風吹きてゆく

製紙場のをかしき形の煙突は靑田の上に陰を伸しぬ

○　　若林星骨

茫として思ふことなく春海に鴎とぶ見て今日も暮らしつ

夕月よ櫻の花よましろなる君が面輪よ黒髪の香よ

午後の日にそびらを向けてわが前に落ちたる淡き影をながむる

君が頰の涙のあとのほのかにも見ゆばかりにも春の月照る

窓により夜の花愛づる君が頰にやはらかに照る春の月かな

○　　皆川やすの

多言する君を戀しみ華やかに物語して夜を別れにき

ふる里のわが上總までほとゝぎす啼けよ旦(あした)な君やきくらん

酷熱の日は晴れやかに靑服搖れど室を皆消風に貸す

○　　佐藤飛鳥

思ふさま泣きだにしなば慰まむ此の悲みの人事らしき

人の事に泣きける心今は我が爲めにも泣かず氷の如し

○　　小野寺翠花

安からず人にはぐれて一人行く四月八日の花草のみち

野につゝく牧場は濁し山背に吾が十七の天つちのごと

○　尾崎渡水

近頃はいとふくらなる日光に思ひ静かに身をひたし居り

口笛もふかず静に楠の木の下によりつゝ鳥の聲きく

○　小川原素山

世に生くる道具の一つへつらひの言葉なりとていふを咎めず

ほの暗き室に語りしことのはのうしろめたなき瓦斯のあかるみ

○　藤　三千緒

けだものゝごとく白歯をあらはして笑むをよしとすこの女ども

しみ〲とものおもはむとのびし髪に鋏ふれしめずひと月あまり

○　正木哲夫

春の雨しめじめじめと地をぬらしもの思ふべく上なき日かな

かかる夜は君をおもへりはたまた我思ふらむ月おぼろなり

○　江上魚梁

松の木の赤き肌にわがもてる哀しみばかり雪のつもれる

北國や雪に埋るゝ夕ぐれの山など思ひ粟殻を焼く

○　足立笑也

雪にる雲つぎ〲に紫のかすみとなりて春は來にけり

あらかじめわれ等を罪したまふ日を靜にあみて玉はれよ神

○　平山静子

そことなく街の嘆きのたゞよへる橋のほとりの夕暮に立つ

無花果のあるかなしかの香など嗅ぎ物思ふ夜となりにけるかな

○　赤松星卿

君がためただしき性を欺むきて罪つくる事を多く覺えぬ

灯にむかひ涙ぐまるる事どもを數ふる程にこころ老いにき

○　大塚任天

春の雨すればらつくし町の子の白足袋に泌む排鼻緒のあと

○　澁谷せゝらぎ

何が故とことはり知らずあゝけふも生をつゞけぬ不安のうちに

○　法月紫星

相對し口をつぐみていはむこと待ちつかれたりすねたる子等は

○　青山竹影

野を行けば物皆生きぬ春をえしこの喜びをいかに歌はむ

○　大岡綠雨

けだもの丶春などせる天井の雨の染み見て淋しさに居り

原稿輻輳につき大半は次號に廻せり諒せられよ
和歌原稿は小石川區原町一三三尾上柴舟宛中央公論歌稿と表記ありたし

俳句

木瓜の花　高田蝶衣選

投げ纜(つな)に癖瘠の木瓜が咲きにけり　芹雨
御宗旨や木瓜を佛花にせぬ小村　同
木瓜の花鋏置けば映りけり　同
木瓜赤し遠退く素車の轍より　同
(妙義)四石門析に咲く木瓜飽かず見し　同
尾根の木瓜咲いて巣を急ぐ雀かな　同
木瓜咲いてよき宿なりし娘ゐし　へき生
子分ヶ牛預る木瓜の小家かな　同
戀は昔木瓜に思へばある女　同
妹乞へば姉をくれけり木瓜の宿　同
射損じし白雉猶眼に木瓜の花　同
木瓜も咲く透垣を帆の大きさよ　夢筆
漁區爭ひの主唱が庭に木瓜咲けり　同
君臣を合祀す城址木瓜白し　同
酒倉の窓の高さよ木瓜茂る　同

荒磯と校庭と界す木瓜の花　同
軸を出て白雲木瓜を繞るかな　寒泉
奇僧泊めて心もとなし木瓜の雨　同
湖越して嵐氣來るや木瓜の花　同
魔の業が駕の聖の木瓜に無し　同
快偶得し朗ら心に木瓜を見る　同
花木瓜や妻帶もして富む住持　不寐庵
濃漑を踏査の杭や野木瓜咲く　同
變り花咲く木瓜や灰も降る野來て　同
花木瓜の影はありけり瀬魚突く　螳郎
花木瓜に焚火消えゆく雨輕し　同
木瓜咲くやもの追ふ鷄の高埃り　同
畑人の簑掛け松や木瓜の土手　春溪
毛蟲早蠢めきにけり木瓜の枝　同
花木瓜や小笹まじりに沼のへり　同
飛石の池まで足らず木瓜の花　易川
屠牛場の血を汲ふ土や木瓜の花　同
赤木瓜の一株宛や社宅住　同
花木瓜やもめつぶれたる馬の講　ふせつ
雨男晴れ言ひ立つや木瓜の花　同
寃罪を詩にいふ主や木瓜の花　同

鷄籠の世の木瓜開墾に絶えにけん　朱字樓
花木瓜や野火の布令も今はなき　同
牧の家の洗場淺し木瓜の花　同
荷おろして賣れぬ眠さや木瓜の花　耳山
尼の親僧にてわびし木瓜の花　同
木瓜さくや伸びし芽の蓼と知る程に　不器
木瓜もえて溪流の飛沫汲ふなめり　同
鼬來て鷄叫びけり木瓜霞む　卯月
木瓜の花廢坑の道をふさぎけり　同
木瓜折るや逃水のこと思ひつゝ　狠子
草餅にかび生ふ日なり木瓜の花　同
木瓜咲くや村治の忙に家事を見ず　蛙念子
小藩の城の堤や木瓜の花　同
木瓜の花散て此國雨期に入る　瑚仙
沼の上に落陽長し木瓜の花　同
木瓜咲くや學園の規を新たにす　素水
事毎に我意に反くを木瓜の咲く　同
藏引けば後淋しさや木瓜の花　江洲
鳥籠かけて鳥呼ぶ人や木瓜の垣　同
禁厭に缺きし墓石や木瓜の花　倨人
井の祟り僧封じけり木瓜の花　同

馬炙の脚縛り杭や木瓜の花　冬城
里紺屋干場擴げに木瓜も切る　同
星孕む月の大暈木瓜白し　明分
凹み砥を石に磨る庭木瓜の咲く　同
又移轉家付の木爪枯れさうな　寛錢子
職辭して野人心や木瓜開く　同
阪の上の茶屋のやもめや木瓜の花　白雀
木瓜の花を貰へば惜む農夫かな　同
點心の鐘木瓜の花ゆるゝ哉　不知老
なつかしき木瓜や菜摘川の邊に　同
接木して拔穴ふさぐ木瓜の垣　紫郎
木瓜垣や凪に寐て居る講の旗　同
白木瓜や繋ぎし牛の顔暮れて　血苦醜
木瓜に殘す進路符號や驚辻　同
木瓜垣に晝中乾く釣瓶かな　塘午庵
河原溫泉に建て添ふ家や木瓜の花　同
戀ふ宿に人知るまじき木瓜咲きぬ　唐辛子
馬も人も緋木瓜も醉ひぬ酒肆の晝　空蒼々
葭棚細む竹籬む庭や木瓜盛り　弓里
木瓜咲くや拔毛に痒き犬の背　瘦骨
開墾の小屋に犬あり木瓜の花　夕影

燒せんを髪結ひ合ふや木瓜の花　赤呂
伏種の藁干す木瓜の梢かな　月精
川もあれば風呂たつ庭や木瓜の花　保赤
木瓜活けて神社合併淋しがる　天唖郎
木瓜の花に木蓮の白散りかゝる　水馬
木瓜の花此根地軸に逆するや　鯨醉海
緋袴に侏儒立ち舞ふと木瓜の花　木屑
蔦藤も女櫃の家や木瓜の花　翠雲
眼するどき放參僧や木瓜赤し　琴星
女馬のみ使ふ習ひや木瓜の村　幽堂
野仕事に堪えぬ妻去る木瓜の花　寸江
花木瓜や山に土葬す郷の俗　鹿の子
此島に燃ゆる水あり木瓜の花　一得
野の寺や梵天立てし木瓜の花　牛丸生
樂燒の翁久しや木瓜の花　茅柯
木瓜の花落つる時ある地震かな　葉江
木瓜咲くや園生の苣も渡り種　玉一

募集課題

粽　五月十日〆切
蠅　六月十日〆切

規定
△應募句は淡路國假屋在高田蝶衣宛
△一人三十句以下△用紙半紙の事

評論

曾禰統監の辭職

韓國の現閣臣等は、曾禰統監の無能を侮ると其の極に達するも、合邦の反對意見を懷くを便として、寧ろ統監の歸任を歡迎する傾向ありといふ。

曾禰統監辭職の説屢々傳はりて而して打消さる、統監の病症今に至て明確ならざるも、頗ぶる衰憊せるは事實也、○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○、○○○、○○○○○○○○○○○○、○○○○○○○○○○○○○○○○○○○。曾禰統監假令廟議の決定に一致するも、病軀竟に廟議の實行に堪えざるべし、吾人は未だ合邦實行後統監府の組織の變ずるや否やを知る能はずと雖も、曾禰子が永く現職に在らざると丈けは疑ふの餘地を有せず、曾禰子は夫れ竟に樞密顧問として老を全くするにも至らん乎。

學制改革案の發表

前内閣以來の宿題として、議論多かりし學制改革案は、竟に文部省より發表せらる。案の骨子は、大學及び小學制を現在のまゝとし、中學制を二種に分ち、第一種を普通中學として現在の如く五ヶ年とし、第二種を大學の豫備の中學とし、其の學年を七ヶ年と爲し、七ヶ年の内四ヶ年を普通科、三ヶ年を高等科とす、即ち現制の八ヶ年に比して一ヶ年を減ずる也。

之に對する可否の論紛々として大に喧しきも、攻究の餘地は十分にあり、否、十分に有らしめざる可らず、未だ世論の攻究をも經ずして咄嗟に之を實行するが、

きことは、必らず之を慎むを要す。

今の弊は試驗制度を以て學生を苦むるに在り、而して學生をして及第を主とし、實地應用の智惠と常識とを缺如せしむるに在り、即ち佛國的にして英國的ならざるに在り、吾人は學制改革に於て、先づ根本的に之を一掃せんとを望む、文部省の學制改革案の未だ玆に及ばざるは遺憾と謂ふべし。

海軍の不幸に光輝發す

呉に於て潜航水雷艇第六號沈降して浮ばず、艇長以下乘組の將士が悉く窒死せしは慘の極也。

然れども艇長佐久間大尉が、死に瀕して從容亂れず、筆を執て艇の沈降せる原因と成行とを詳記し、併せて其の罪を謝して、部下の遺族保護を求めたるは、啻だに當局をして沈降の原因攻究に勞するの苦を省けるに止まらず、用意周匠にして、後の潜航艇に對する誤想を排するにまで努めたる沈毅と忠烈とは、實に我が海軍の花とも稱すべし。

斯の如き沈勇、義烈にして而して縝密の將校あればこそ、我が帝國の精强世界に雄視するに足る、嗚呼此の志、一日も軍人に缺く可らざる也、艇の末路詢に悲むべしと雖も、其の死に由て胎されし教訓は、千載に渉りて永く範と爲すに足る。

鐵道院の服制

鐵道院の服制海軍々人に酷似したるを非議するもの有り、曰く其の大黑帽子と、肩章と而して短劍と、甚だしく海軍將校に似たるが爲め、水兵等往々にして敬禮するに至るとあり、甚だ紛はしきは嗤ふべしと。

然れども服制の一定は、間接に官紀を嚴明にする效果あり、若し海陸軍人及び警察官にして、一定の服裝を要すとせば、鐵道吏員然らざるの理有らんや、若し出來得べくんば總ての官吏また一定の服裝を爲して可也。

税務官吏、山林官吏にも亦服制あり、天下之を論ぜずして獨り鐵道官吏のみを嗤ふ、亦是れ國有鐵道を憎

んで其の袈裟に及べる也、断じて公平の見にあらず。

老伯と少女の結婚

田中光顯伯が宮相たりし時、美人小林某嬢と結婚せんとするや、時論囂々として之を不倫なりと罵りたりき。今や伯の野に下りて竟に彼女と婚するや、世は恰かも忘れたるが如し、何ぞ前に酷にして後に寛なるや。

伯今年實に六十八歳、某嬢は乃ち僅かに二十二三歳に過ぎず、恰かも祖父と孫女との結婚の如し、歐米に在ては素より常と爲すも、我が國に在ては實に異數たり、然れども伯や孫の如き美人を妾として弄せず、迎へて以て公然たる正室とす、威力若くは金權を以て強ひて美人の意思を枉屈せしめざる限り、何人も之を非議す可らず、之を妾として妄りに其の貞操を弄するを咎めず、却つて正室とするの理ありて而して正しきを難ず、難者の心實に解す可らず。

或は某嬢が年若くして而して顏好き男子を擇ばず、殊に自から進んで富める老貴族に嫁せるを難じて、徒らに虚榮の犠牲となれるをいふものあり、然れども古今東西孰れの婦人か虚榮の犠牲たらざる、多くの婦人は綿繍綾羅金銀珠玉の奴隷たるにあらずや、一筋の帶を得るに狂喜して、其の代價の出處の善惡如何を伺はざるは、天下總ての婦人の常情ならずや、若し婦人の虚榮心に捉はるゝを難せば、何ぞ獨り小林某嬢のみを責む可んや。

試みに田中伯を看よ、其の顏に光澤あり、言語動作活潑にして、殆んど壯者を凌ぐ、到底六十餘の老爺とは視る可らざる也、某嬢の之を擇べる、毫も怪むに足らざるのみ。

宮内大臣の更迭

岩倉公宮内大臣となりて未だ期年ならざるに、胃潰瘍を以て薨去し、次官渡邊子即日宮内大臣に任じ、次て樞院書記官長河村金五郎氏宮内次官に任ず、書記官長を兼ぬる故の如し。

きとは、必らず之に慎むを要す。

今の弊は試驗制度を以て學生を苦むるに在り、而して學生をして及第を主とし、實地應用の智惠と常識とを缺如せしむるに在り、即ち佛國的にして英國的ならざるに在り、吾人は學制改革に於て、先づ根本的に之を一掃せんことを望む、文部省の學制改革案の未だ玆に及ばざるは遺憾と謂ふべし。

海軍の不幸に光輝發す

吳に於て潛航水雷艇第六號沈降して浮ばず、艇長以下乘組の將士が悉く窒死せしは慘の極也。

然れども艇長佐久間大尉が、死に瀕して從容亂れず、筆を執て艇の沈降せる原因と成行とを詳記し、併せて其の罪を謝して、部下の遺族保護を求めたるは、啻だに當局をして沈降の原因攻究に勞するの苦を省けるに止まらず、用意周匝にして、後の潛航艇に對する誤想を排するにまで努めたる沈毅と忠烈とは、實に我が海軍の花とも稱すべし。

斯の如き沈勇、義烈にして而して縝密の將校あればこそ、我が帝國の精强世界に雄視するに足る、嗚呼此の志、一日も軍人に缺く可らざる也、艇の末路詢に悲むべしと雖も、其の死に由て胎されし敎訓は、千載に渉りて永く範と爲すに足る。

鐵道院の服制

鐵道院の服制海軍々人に酷似したるを非議するもの有り、曰く其の大黑帽子と、肩章と而して短劍と、甚だしく海軍將校に似たるが爲め、水兵等往々にして敬禮するに至ると有り、甚だ紛はしきは嗤ふべしと。

然れども服制の一定は、間接に官紀を嚴明にする效果あり、若し海陸軍人及び警察官にして、一定の服裝を要すとせば、鐵道吏員然らざるの理有らんや、若し出來得べくんば總ての官吏また一定の服裝を爲して可也。

稅務官吏、山林官吏にも亦服制あり、天下之を論ぜずして獨り鐵道官吏のみを嗤ふ、亦是れ國有鐵道を嘗

んで其の袈裟に及べる也、斷じて公平の見にあらず。

老伯と少女の結婚

田中光顯伯が宮相たりし時、美人小林某孃と結婚せんとするや、時論囂々として之を不倫なりと罵りたりき。

今や伯の野に下りて竟に彼女と婚するや、世は恰かも忘れたるが如し、何ぞ前に酷にして後に寛なるや。

伯今年實に六十八歳、某孃は乃ち僅かに二十二三歳に過ぎず、恰かも祖父と孫女との結婚の如し、歐米に在ては素より常と爲すも、我が國に在ては實に異數たり、然れども伯や孫の如き美人を妾として弄せず、迎へて以て公然たる正室とす、威力若くは金權を以て強ひて美人の意思を枉屈せしめざる限り、何人も之を非議す可らず、之を妾として簒りに其の貞操を弄するを咎めず、却つて正室とするの理ありて而して正しきを難ず、難者の心實に解す可らず。

或は某孃が年若くして而して顏好き男子を擇ばず、殊に自から進んで富める老貴族に嫁せるを難じて、徒らに虚榮の犧牲となれるをいふものあり、然れども古今東西孰れの婦人か虚榮の犧牲たらざる、多くの婦人は綿繡綾羅金銀珠玉の奴隷たるにあらずや、一筋の帶を得るに狂喜して、其の代價の出處の善惡如何を伺はざるは、天下總ての婦人の常情ならずや、若し婦人の虚榮心に捉はるゝを難せば、何ぞ獨り小林某孃のみを責む可んや。

試みに田中伯を看よ、其の顏に光澤あり、言語動作活潑にして、殆んど壯者を凌ぐ、到底六十餘の老爺とは視る可らざる也、某孃の之を擇べる、毫も怪むに足らざるのみ。

宮内大臣の更迭

岩倉公宮内大臣となりて未だ期年ならざるに、胃潰瘍を以て薨去し、次官渡邊子即日宮内大臣に任じ、次て樞院書記官長河村金五郎氏宮内次官に任ず、書記官長を兼ぬる故の如し。

渡邊子は敏腕家也、岩倉公微つせば、直ちに田中伯に繼ぎて宮内大臣たるべかりし人也、即日の昇任未だ必らずしも異とするには足らず。

松方伯は寧ろ牧野伸顯氏を推擧する意思なりしと謂へり、或る人曰く、渡邊子河村氏の任命に由て、以て山縣系全盛の一斑をトすべしと、或は然らん、然かも渡邊子を推輓したりしものは實に故伊藤公なりしとを忘る可らず。

第三次内債借換

第二回の内債借換一億圓に對し、應募額は實に一億五千萬圓に上りたりき。

第三次の借換には殘存の内債約一億六千萬圓あるも、之は悉く募集せずして國庫金より償還し、國庫金の足らざる分丈け銀行シンヂゲートに於て之を引受くるに決し、政府同意して五月上旬之を實行すといふ。

茲に於て内國債三億六千萬圓の處分は全く終れる也、是れ亦現内閣の一成功と稱しても可なるもの也。

奉天觀光團來朝

奉天の官民二十餘人、觀光のため來朝す、我が官民の之を歡迎するや、幾んど到らざる莫く、彼等は應さに歡迎に忙殺、殺、醉疲殺されんとす、想ふに其の目的たる調査事項の如きは、其の參考すべき書類を蒐集するに留めて、歸國後徐ろに之を攻究すべし、百聞一見に如かざるの確實なる効果……優に之を收め得たるべし、而して其の結果の著大なる、啻だ日清の交情を温むるに止まらざるや言なきのみ。

實業家の清國觀光

我が實業家一團となり、五月二日程を發し、韓國より滿洲に入り、北京に據りて漢口に出て、南京に於ける清國初度の博覽會を視、上海を經て六月下旬歸朝せんとす。

其の最も力を致すは、素より北京及び漢口、南京に在り、彼の商工業者と親しく臂を把りて交歡し、由て

以て日清通商の發展に資せんとするは、其の主要目的にして、併せて之に由て日清交際の改善を謀るに在りとす。

吾人は彼等の勞を多とせざる可らず、南清地方に於ては、今尙ほ公然日本人を排斥するもの多し、此の間に往いて斡旋す、啻だに其の財嚢を傾くるに止まらざる、何ぞ多言を要せんや。

聯合共進會

何々府縣聯合共進會といふもの、恰かも近時の流行物たり、現に今春三月より開催されしもの東に名古屋あり、西に福岡あり、共に人を吸收するに全力を傾けて、幾んど到らざる處なし。

吾人は共進會を以て全く有害無益のものとは爲さじ、然れども左程に利益あるものとも思ふ能はず、眞に府縣の物産を比較研究して、以て改良進歩を競ふが如きは、其の主要の目的たるべくして而して必らずしも然らず、實際の主たる目的は、其の開催地に多くの人を吸集して、一面には其の土地に多く金錢を撒布せしめ、兼て其の土地を廣告するにあり、極端にいへば、主催地の宿引業のみ。

斯の如き宿引的、御祭騷ぎ的のものは、甚だ賞揚するに足らず、近時博覧會を以て、單に御祭騷ぎに止まるものと爲すの論、最も獨逸に盛ん也、我が政府の如き亦年々若くは隔年に共進會を催ふさしめず、少くも五年乃至七年の間隔を置かしむるを要せずや、地方の官民をして共進會開催の競爭に熱狂せしむる、亦甚だ見苦しからずや。

炭鑛汽船の破綻

資本金二千七百萬圓と號する北海道炭鑛汽船會社は、僅々七十萬圓の約束手形書替に際して、債權者たる三井銀行より拒絶せられ、相次て各債權者より返金を迫られ、借入金總額三百四十萬圓を調達する能はずして筆頭の重役井上角五郎氏先づ辭職し、各重役亦總辭職を爲し、其の破綻全く暴露せんとす。

重役の一人たる雨宮敬次郎氏は、會社の資本二千七百萬圓と、社債六百萬圓と、借入金三百四十萬圓と、合計三千六百四十萬圓に對し、會社の資産額三千七百八十五萬圓に及び、其の基礎鞏固なるも、唯だ製鋼所に投入せる五百六十二萬五千圓未だ利益を得るに至らず、却つて炭鑛を掌裏に占有せんとする三井家の陰謀に陷れるなりといひ、而して同會社監査役の一人にして且つ三井銀行の理事たる波多野承五郎氏は、會社の現資産に未拂込金を除き、三千六百三十五萬圓と記しあるも、其の實鐵道買上の際全資本高に對して割當を爲したるため、六百萬圓の缺陷を生じたるに止まらず、資産に對する負債は、外債六百萬圓、借入金三百四十萬圓、製鋼所拂込金百八十七萬圓、合計千百二十七萬圓、差引千九百八萬圓に過ぎずといへり。

吾人の聞く所によれば、彼の製鋼所の如きは、其の原料たる銑鐵豫想の如く北海道に産出せず、爲めに器械あるも運轉する能はずして、全部將さに見込なきものと爲らんとすといへり、果して然らば會社の破綻まだ止むを得ざるべき乎。

井上角五郎氏は、曾て澁澤榮一氏が多くの會社に重役たるを非難したるとありき、而して氏亦日露戰役の後、株式熱の勃興に乘じて多くの泡沫會社を發起し、始め自から重役となりながら、成立の見込なきを暴露せんとするに方り、早く其の所有株を賣飛して重役たるとを辭せりといへり、不德斯の如くして漸く信用を失墜し、竟に破綻を生じて、其の後を汚さんとする亦素より其の所乎、吾人は敢て玆に之を指摘して、以て他の會社の重役たる者を戒めんと欲す。

但し裏には日糖事件あり、今また此の會社の破綻あり。會社に對する危惧心を長じて、益々一般の企業心を挫かんとするは、國のため慨嘆すべき也。

逸事逸説

▲四月十二日は舊三月三日て、然かも水藩の有志が櫻田門外に井伊大老を刺した歳から、滿五十年目に當るといふので、やまと新聞社の主催て、靖國神社て大祭

を擧行した▲ヤレ偕行社ての園遊會だ、相撲だ、擊劍だ、能樂だ、神樂だ、手品だ、活動寫眞だ、藝妓の手踊だ、壯俳の芝居だ、狂言だ、俄かだ、甚だしいのは相馬の武者行裝だと、丸て湧返るやうな騷ぎて有るが此のため、やまと新聞社の費した處、六萬圓と號するが其の實四萬圓に餘つたといふ▲最も世を駭がしたのは、井伊大老を違勅の姦臣だと斷言し、之を斃した刺客は忠烈の士だといつて、天下の諸新聞にデコ〳〵と大きな廣告をしたとだ、然かも駭くべきは、斯くまて激烈な廣告が、土方伯や、三好中將や、長谷場衆議院長の名義と、而して前宮相田中伯始め、土佐、薩摩、長州の諸名士や、貴衆兩院議員などの委員贊助員の名義て堂々と吹聽せられたとてある▲宮內省からは祭資料が下りる、閑院、久邇、竹田、北白川、朝香の五宮殿下が御參拜になる、而して鏡餅を御供へになる、島津兩公爵、毛利公爵並びに男爵や、水戸の德川侯爵は申すに及ばず、舊越前藩の松平侯爵、舊土佐藩の山內侯爵などからも其れ〳〵神前へ供へ物をしたといふとてある▲我等の耳にする所によると、やまと新聞社ては、素より希望したてあらうが、併し宮內省筋や、宮家などへは毛頭運動などせなんだ、而して政府筋の大臣は申すに及ばず、警視廳邊ては、寧ろ抑止の體度を執つたといふとてある、然るにも拘らず、祭資料の御下賜や宮殿下の御參拜まて有たのは、强ち土方伯や田中伯が黑幕たる爲めばかりてもあるまい▲去年井伊大老の銅像が橫濱に建てられて、其の七月一日に橫濱開港五十年紀念祭を行ひ、併せて銅像の除幕式が行はれた時、兎角の異論が或る方面から起つて、到頭除幕式を延期したとや、元老大臣等が伊藤公の渡韓を見送るといつてゾロ〳〵大磯や國府津まて出掛け、一人も橫濱へ出席せぬので、大隈伯が妙な啖呵を切たとがある、彼此思ひ合せると、中〳〵意味が有るらしい▲井伊大老の忠姦とか、開國に効があるとか無いとかいふとは、恐らく史家の研究問題てあらう、我等は此の點に於て帝國大學邊の近世史てオーソリチーたるべき諸博士の斷案を聽きたいと思ふ▲島田三郎氏の開國始末に、山

縣公は言を極めて井伊大老を賞賛した自筆の序文が載せてある、聞けば此の序文は秋月種樹翁の作つたもので、西村捨三氏から山縣公へ依頼に及んだので、公も何氣なしに署名して筆を揮つたが、後に井伊家から御禮といつて、傳家の重寶たる釜を贈つて來たので、公もハテナと氣が付いて、釜の御禮丈けは突返したといふとである、公は今でも此の序文を出されると、酷く恐縮するさうである。（以上ＸＹ生）

英國總選擧近し

英國議會は又々解散の外無かる可き歟、蓋し上院改革問題は之に依らずして解決するの途なければ也。試みに自由黨政府の改革案を見よ、曰く財政案に關する否認權を上院より撤廢す可し、曰く三會期に亘り下院を通過せる議案は上院の同意を俟たずして法律たらしむ可しと、是則ち光彩ある歷史を有する同院をして全然有名無實の立法機關に終らしめんとするもの也、翻つてロオスベリー卿の改革案を見よ、曰く現在の世襲主義を廢して、一、世襲貴族より互選の上若干名を出し、二、國家に效勞あり又特殊の資格ある貴族を入れ、三、貴族ならざる議員をも加ふ可しと、是則ち同院をして却て今日以上の鞏固團體たらしめんとするもの也。前者は下院を打破せんとし、後者は上院を防護せんとす、前者にして上院の議に上らば直ちに否決の運に會す可く、後者にして下院に移さるゝことあらんか、亦生命を保ち難かる可し。

斯くの如き境遇に際す、再度解散以て英國不文憲法の義に從ひ之を國民の判斷に委するも眞に止み難き所也、況んや最近愛蘭黨の態度曖昧を極め、アスキス氏の執政も爲めに殆んど噴火山上に舞踏するの感なきにあらざるをや、否な々々自由黨内にも硬軟兩派の暗鬪あり、寧ろ一擲、事を國民に問ふを優れりとする事情あるに於てをや。

蘇士運河讓許延長否認

埃及立法會議は蘇士運河會社讓許期限延長を否決

し、爲めに英人側の怨を買へり、然かも國民黨一派は埃及獨立の前驅として大に之を喝采せり。

抑も蘇士運河は一八六九年十一月開通し、會社の讓許權は一百年に亘り即ち一九六九年を以て終了す可き約定なりき、今回の延長案は更に之を二〇〇九年迄延ばさんとするに在り、從つて其拒絕が直ちに何等直接の影響を生ずるものにあらざるは論を俟たず、然れども根本的に評すれば、こは容易ならざる事件也、少くとも埃及の歷史に一紀元を劃し得可き現象也、何ぞや是「エヂプト、フオア、エヂプチヤン」(埃及人の爲めの埃及)運動が勢力を得來りたる確證に外ならざれば也。

夫れ和蘭の殖民政策は民を愚にするに在りき、ジヤワの實例是也、英國の殖民政策は之に反して民知の發達に力めたり、印度、埃及皆是也、而して此民知啓發の殖民策は到る所、獨立熱、排英熱を釀生し、殊に此種運動の首領は多く倫敦遊學のハイカラなるを見る、思ふに民知啓發策にして放棄す可からざらんか、埃及の事實的獨立も遂に來らざる可き也。

米國政界難

近來米國政界を說くもの、皆「大統領タフト氏の勢力失墜」を言はざるは無し、然かも飜つて想へば是毫も怪むに足らざる也。

タフト氏は聰明の人也、理性の人也、感情の一たび激して、長風紫瀾を捲くの大演說をなすが如きは彼の長所にあらざる也、彼は到底民庶の師にして、民庶の長にあらざる也、是に於て乎彼は八千萬の米國民を後援として、上下兩院と對立し、各派を屈服し、融和することを得ざる也、昨夏關稅改革の不始末も之が爲のみ、將た今春一揆派をして下院議長排斥に成効せしめたるも之が爲のみ。

左るにても容易ならざるものは今の米國政界也、中西部共和黨員の離反、民主黨の勢力回復、世は漸く多事ならんとす、ロオスエルト氏歸來すと雖も、時期遂に遲かる可きを奈何。

獨帝ロ氏會見

報ずるもの曰く、四月十六日ロオスエルト氏、維也納に入り、フランツ、ヨセフ皇帝に謁見すと、又曰く獨帝維廉（ウヰリアム）、帝王的禮過を以て米前統領を待たんとすと、是蓋しラフライダー將軍得意の時代也。

而して吾人は特に注意す可きもの一あるを見る、何ぞや、米獨接近の機會を造り得可きこと是、

蓋し米獨接近は獨帝の理想とする所たり、帝や先きに英佛協商を妨げんとして成らず、英露接近を防いで成らず、僅かに三國同盟の舊壘を維持するのみ、此際西半球の大國を誘致して同盟に至らざる迄もせめて相互の接近を期せんことは其熱望措かざる所也、況んや米國人口の割合を見るも、東部以外に於ては獨逸人の血統寧ろ遙かに英人を凌駕するの觀あるをや。

但し其成否如何は別問題也。

伊太利內閣更迭

不幸短命は顏淵と伊太利內閣との附物なる乎、ソンニノ內閣は又々在職三箇月にして仆れたり。

其理由に曰く海軍卿ベットロ氏の航路補助案否決略ぼ判明し、最早や存續の途なきを見たれば也と、航路補助問題の爲め內閣更迭を來せる如き現象は、先づ伊太利特殊の產物なる可し。

然かも吾人は之に對して轉た「己れに出でたるものは己れに還る」てふ箴言の眞理を想起せずんばあらず、蓋し昨夏ジヨリチー內閣藏相シヤンセル氏の航海獎勵案を邪魔したるものは實にソンニノ男其人なりしを以てなり。

後を繼ひで內閣を成すものは誰、曰く前農相ルサチ氏、氏は第二流の政治家、恐らくは其命脈長からずして遂に復たジヨリチー氏を起たしむるに至る可き也。

露國下院議長辭職

露國下院議長ホミヤコフ辭職し、クチユコフ之に代る、夫れホミヤコフと第三期議會とは普通ならぬ關係

ありて、其責任と運命とを双肩に擔へるかと思はれたるも實に彼なりき、然るに彼は卒爾として辭せり、蓋し彼や言甲斐なき議會の現狀に飽きたる歟。

昨年六月、ホミヤコフの口より出でたる露國議會理想談は洵に麗はしかりき、曰く

世上露國憲政の不完全を說くの徒多し、然かも憲政は今や唯デユマ(下院)に在るのみ、國民も憲政を知らず、政府も憲政を知らず、聊か之を知るは唯議會のみ、吾人は議會に依りて官民を敎育せんとす。

何ぞ其抱負と理想の高遠なるや、然かも顧みて所謂憲政の師表たる可き下院の實情を見ば果して如何、彼今や曰く、

院內には十數箇の黨派あり、紛々たる小爭を事として議長を煩はすのみ、是議長の職をして「忍び難き」ものたらしむるも、猶可也、若しそれ過去三年間益小黨分立の弊を增長し、殊に最近「右側の革命黨」が議會の面目を毀損する行動をなすに至つては眞に耐え能はざる所也。

吁嗟斯くの如くにして彼の理想は殆んど粉碎、跡無からんとす、況んや政府も此議會を蔑視し始めて大臣の出席さえ漸く稀れなりと言ふに於てをや、是に至つて彼は遂に其榮職を拋つこと弊履の如くなりし也、吾人は今更ら彼の先見の明無かりしを咎むる勇氣も出でざる也。

新任議長グチユコフは、ホミヤコフと同じく十月黨に屬す、久しく院內總理たり、意思の堅固にして雄腕卓拔、聲望亦隆々たり、然かも吾人は彼亦ホミヤコフの跡を追ふが如きこと無きやを恐る、吁嗟憲政を解せざる議會の「ピロツト」も難いかな。

佛國總選擧

佛國代議院總選擧は四月二十四日を以て行はれ、更らに五月八日未決定の分(即ち絕對的多數票を得たる候補無かりし區)の選擧を行ふ可しと傳へらる。

然かも今回の選擧は重きをなさゞる也、何となれば佛國の政界は重大の論爭問題なければ也、政敎分離

題と言ふが如きも、羅馬教徒の勢力微々たる今日、別に政府の憂懼を促すものにらあざる也。

而してブリアン首相の執政は、孰れにするも先づ以て安泰無事なりと言ふを得ん乎。

獨逸と波斯

傳ふるもの曰く獨逸、彼斯よりウルミア湖航業獨占を得んとすと、ウ湖は是一九〇七年英露協約に於て露國の勢力範圍に置かれたる所、以てカイゼルの眼中列強無きを見る可き也。

之と同時に波斯政府の英露借款拒絶通告あり、又伯林新紙上波斯に財政的補助をなすの議をなすもの多し、蓋し亦自ら天機を洩らすの類か、露紙の憤慨も尤も千萬也。

米國會社税と日本

米國檢事總長ウヰカアシヤム氏、新米國會社税法の解釋を試みて曰く、外國汽船會社と雖も米國內に於て乘客、荷物の積卸をなす以上は本法の適用を避●る能はずと。

是則ち我日本郵船（シヤトル航路）、東洋汽船（桑港航路）、大坂商船（ポートランド航路）にも所得一分の課税を斷行せんとするものたるや明か也、之のみならば猶可也、然かも所謂所得とは純收益を意味し、純收益の幾許なりやは會社全部の會計を知らでは分らず、然らば則ち米國政府は日本郵船、東洋汽船、大坂商船に對しても帳簿檢査を企つるに至る可し、知らず三汽船會社は果して此不當なる要求に默從するの覺悟ある乎。

備考、米國會社税は由來內國ツラストの監督方法の一として採用せらるものにて、即ち帳簿檢査を目的とするものたり、然るに日本の諸汽船會社に就ても之を適用することゝなりたるが、米國政府は之が爲め之等會社の會計全體を檢査す可しと傳へらる、蓋し米國に於ける收益如何は矢張り全體收益を知るにあらざれば分明せざれば也。

モオレー卿の罪

印度人對回教徒の衝突激烈を加へ、今や回教徒に對

するボイコット成る、是抑も誰の罪ぞ。

吁嗟英國印度事務大臣モオレイ卿が回教徒に特殊の恩寵を與へたる不公平なる立法參議院選擧法は、今や却て回教徒を呪咀するの具に終らんとす、吾人は善美なる印度政治改革が一過失の結果端なくも惡果を衆民に及ぼしつゝあるを惜む。（以上懷沙隱客）

新刊批評

▲**經濟策論**　天野爲之著　實業之日本社發行

天野博士が過去十年間に於て、時事問題に對して平素の主張を披瀝する經濟論策を蒐集せるものにして、斯界の老大家の堅實着實なる意見、何人にとつても極めて有益なるもの少からず。（定價二圓五十錢）

▲**學問と生活**　尾崎愕堂著　大日本國民中學會發行

敎育ある無職業者の次第に增加するは國家の爲め深慨すべき現象なりとし、之が救濟策として學問と生活とを調和するの途を講じたる、極めて有益なる著述也。（定價四十錢）

▲**新古文範**　田山、前田二氏編　博文館發行

一度「文章世界」に載せられたるを集めたるものにして我國の古今に亘り、模範とすべき文章を集め之に評釋を附したるものなり、其選擇慨して當を得たれど、中には北村透谷の「富嶽の詩神」の如き幼稚なるものもなきにあらず。（定價七十錢）

▲**澁柿叢書**　塚原澁柿著　博文館發行

澁柿園の歷史小說中、餘り長からざる廿四篇を集めたり。「五月女阪」「脫走兵」等當時の文壇に好評ありしものも亦收めらる。吾人は氏の長編よりも比較的短き此等の篇に於て却て文學的價値の豐かなるものを見る。（定價二圓）

▲**柳浪叢書**（前編）　廣津柳浪著　博文館發行

明治廿七八年頃の小說壇に於ては所謂小說家として柳浪氏に及ぶもの殆んど一人もなかりき、其暢達なる筆を以て、眼前に事物を活躍せしむる手腕は決して凡なるものにあらざりき。此篇多く當時の作を集めて漫ろに文壇推移の跡を偲ばしむ。「骨ぬすみ」「今戶心中」「畜生腹」等皆吾人の愛讀措かざりしもの、今此篇を披いて、十數年前の幼友達にめぐり逢ひし感を禁ずる能はず。（定價金二圓）

▲**日本情史**　佐々醒雪著　新潮社出版

男女の戀愛を中心として神代の上古より近く現代に相接する[illegible]の我日

本の歴史を通觀し、審に人情世態の變遷を示したもの、著者は日本文學史の專門學者として知名の士である事とて材を集むる豐富、之を姿態頗る横生の文章で書きこなしてあるから興味極めて津々たるものだ、上古、中古は紙數少く、三分の二は近古を以て占領して居るが其尤も讀むに値する點も亦此處に存する。卷末に於ける著者が現代に對する私見、是れ將た至極穩健にして公平なる考と思ふ、人生の波は常に生活慾と性慾とて働いて居る、而して戀愛は其後者の上に咲いたる花である、然るに從來の歴史は徒に前者をのみ主臺とした社會の變遷をのみ叙述するに勉めて奇麗好みかは知らぬが常に後者に疎てあるのは遺憾だ隻輪を以て如何に車を行るべき。爲政者たるものは心を人情の機微に潛めて波瀾重疊の人生の底を深く探らなければならず探れば自ら眼の此處に至るべきであるのに、從來政治に利用せられて來た歴史が此方面を欠いて來たのは譯が分らぬ。兎に角多大の興趣を以て之を讀了した。(定價金八十錢)

▲玄耳小品　澁川玄耳著　隆文館發兌

才思横溢更に飄逸不羈の想と相助けて文に甚だ面白き姿致を生ずる、收むる處の紀行文、箱根、富士山、長たすき、鴨川、垣見せる北京孰れも面白い、卷末の望郷歳事記又見逃すべからざる文字だ。(定價金五十錢)

▲バンカラ日記　前篇　松田尋星著
▲同　上　後篇　千代田書房發行

日記文の模範を示し併せて女學生の生活狀態から學生間相互の感化力制裁力の偉大とを示すを目的に作つたもの、文章も相應に暢達である。(定價各五拾錢)

▲錦嚢論語　誠之堂書店發行

論語中の處世上に必要な文の文句を抄出して一わたり通俗の注解を施し、更に適解と稱して具象的の事實に當て箝め説明したものだ、一握の中に收まる小冊子だから行住坐臥に身を離さぬ便利がある。(定價四十錢)

▲靈か肉か　赤司繁太郎著　警醒社發行

道徳、宗教上の感想を記したもの、靈肉の爭に惱む者の机上に還きて益する所多かるべき説が多量に含まれて居る。(定價金四十錢)

▲二宮尊徳　佐野天聲著　警醒社書店

天保飢饉に於ける下野烏山の出來事を材にして脚本に仕組んだもの、圓熟の文章感興を以て卒讀し了らせる力がある、此種の者は單に讀み物としても家庭に歡迎されるであらう。(定價三十錢)

▲和譯老子和譯莊子　田岡嶺雲譯註　玄黃社藏版

支那哲學は宋に於て最も發達した大小兩程子より朱陸の二派といふ如き

きがあつたけれど、思想の深玄にして且つ雄大なるものは夙に先秦の周時代に於て大に現はれたもの、そして老子と莊子とに於て止めを指すものである、孔丘は聖と稱すれども到底形而上の說に於ては燭火の太陽に向ふが如く光を二子と爭ふ事は出來ぬ、然るに後世永く孔門の徒よりして異端の惡名を負はせられたが爲に、眞價の埋沒したのは二子の爲に甚だ惜むべきであつた、田岡氏が今此兩著を集めて一卷とし、從來難解の聞こえある其文字を一々平安に和譯したのは普及に與つて多大の力ある事と思ふ、間に略註が挿んであるから少しく心を潜めれば何人にも理解が行かう。（定價壹圓）

▲健腦法　坂田實著　文明堂藏版

讀んで字の如く健腦法を九項に分つて論じたものだ、附錄に腦の疾病の原因と療法やら四項がある。（金廿錢）

▲驕樂　近藤元著　光華書房發行

著者の短歌集にして秀逸と思はるゝ詠も少けれど、槪して惡歌も亦少きは喜ぶべし。（定價四十錢）

▲當世良人氣質　佐々木邦譯　內外出版協會發行

無名氏の著「ザット、ハスバンド、オブ、マイン」を譯述せるものにして、滑稽の中に諷刺を寓せるものにして輕快なる讀み物也。（定價四十錢）

▲イートン學校及其校風　本田增次郎著　內外出版協會發行

極めて眞面目なるものにして、イートン學校及校風を紹介せり。學風の參考となる節少からず。（定價廿錢）

▲文壇無駄話　德田秋江著　光華書房發行

無駄話庵主人德田秋江氏の著也。通讀したる處、氏の說は斷片的にして又常に矛盾に充つるが如くなるも、其長所も亦こゝにありて、時に人の氣附かざる所、若くは氣附いても言ひ得ざりし所を鋭く言ひ放ちたる所に面白味あり。（定價六十錢）

▲小品二十一篇　水野葉舟著　易風社發行

先きに「惡夢」と題して發行したるものより卷頭の「惡夢」を拔き、其他の二十一篇を收めたるものにして何れの篇にも氏一流の觀察と感情とがフレッシュに心持よくあらはれて居る。（定價五十錢）

▲收穫　前田夕暮著　易風社發行

前田夕暮氏の短歌集にして技巧よりも眞情を歌ひ出さんとしたる氏の努力は明かに窺ふを得べし。（定價五十錢）

▲アナトールフランス短篇傑作集　若月紫蘭著　三教書院發行

本の歴史を通觀し、當に人情世態の變遷を示したもの、著者は日本文學史の專門學者として知名の士である事とて材を集むる豐富、之を姿態頗る横生の文章で書きこなしてあるから興味極めて津々たるものだ、上古、中古は紙數少く、三分の二は近古を以て占領して居るが其尤も讀むに値する點も亦此處に存する。卷末に於ける著者が現代に對する私見、是れ將た至極穩健にして公平なる考と思ふ、人生の波は常に生活慾と性慾とて働いて居る、而して戀愛は其後者の上に咲いたる花である、然るに從來の歴史は徒に前者のみ主體とした社會の變遷をのみ叙述するに勉めて奇麗好みかは知らぬが常に後者に疎てあるのは遺憾だ隻輪を以て如何に車を行るべき。爲政者たるものは心を人情の機微に潜めて波瀾重疊の人生の底を深く探らなければならず探れば自ら眼の此處に至るべきであるのに、從來政治に利用せられて來た歴史が此方面を欠いて來たのは譯が分らぬ。兎に角多大の興趣を以て之を讀了した。(定價金八十錢)

▲玄耳小品

澁川玄耳著
隆文館發兌

才思横溢更に飄逸不羈の想と相助けて文に甚だ面白き姿致を生ずる、收むる處の紀行文、箱根、富士山、長たすき、鴨川、瞥見せる北京孰れも面白い、卷末の望郷歳事記又見逃すべからざる文字だ。(定價金五十錢)

▲バンカラ日記　前篇
▲同　上　後篇

松田毒星著
千代田書房發行

日記文の模範を示し併せて女學生の生活狀態やら學生間相互の感化制裁力の偉大とを示すを目的に作つたもの、文章も相應に暢達である。(定價各五拾錢)

▲錦嚢論語

誠之堂書店發行

論語中の處世上に必要な文の文句を抄出して一わたり通俗の義解を施し、更に適解と稱して具象的の事實に當て嵌め説明したものだ、一握の中に收まる小冊子だから行住坐臥に身を離さぬ便利がある。(定價四十錢)

▲靈か肉か

赤司繁太郎著
警醒社發行

道德、宗教上の感想を記したもの、靈肉の爭に惱む者の机上に置きて益する所多かるべき説が多量に含まれて居る。(定價金四十錢)

▲二宮尊德

佐野天聲著
警醒社書店

天保飢饉に於ける下野烏山の出來事を材にして脚本に仕組んだもの、圓熟の文章感興を以て卒讀し了らせる力がある、此種の者は單に讀み物としても家庭に歡迎されるであらう。(定價三十錢)

▲和譯老子和譯莊子

田岡嶺雲譯註
玄黃社藏版

支那哲學は宋に於て最も榮えた大小兩程子より朱陸の二派といふが如

きがあつたけれど、思想の深玄にして且つ雄大なるものは夙に先秦の周時代に於て大に現はれたもの、そして老子と莊子とに於て止めを指すものである、孔丘は聖と稱すれども到底形而上の說に於ては爝火の太陽に向ふが如く光を二子と爭ふ事は出來ぬ、然るに後世永く孔門の徒よりして異端の惡名を負はせられたが爲に、眞價の埋沒したのは二子の爲に甚だ惜むべきであつた、田岡氏が今此兩著を集めて一卷とし、從來難解の聞こえある其文字を一々平安に和譯したのは普及に與つて多大の力ある事と思ふ、間に略註が挿んであるから少しく心を潜めれば何人にも理解が行かう。（定價壹圓）

▲健腦法　坂田實著　文明堂藏版

讀んで字の如く健腦法を九項に分つて論じたものだ、附錄に腦の疾病の原因と療法やら四項がある。（金廿錢）

▲驕樂　近藤元著　光華書房發行

著者の短歌集にして秀逸と思はるゝ詠も少けれど、概して惡歌も亦少きは喜ぶべし。（定價四十錢）

▲當世良人氣質　佐々木邦譯　內外出版協會發行

無名氏の著「ザット、ハスバンド、オブ、マイン」を譯述せるものにして、滑稽の中に諷刺を寓せるものにして輕快なる讀み物也。（定價四十錢）

▲イートン學校及其校風　本田增次郎著　內外出版協會發行

極めて眞面目なるものにして、イートン學校及校風を紹介せり。學風の參考となる節少からず。（定價廿錢）

▲文壇無駄話　德田秋江著　光華書房發行

無駄話庵主人德田秋江氏の著也。通讀したる處、氏の說は斷片的にして又常に矛盾に充つるが如くなるも、其長所も亦こゝにありて、時に人の氣附かざる所、若くは氣附いても言ひ得ざりし所を銳く言ひ放ちたる所に面白味あり。（定價六十錢）

▲小品二十一篇　水野葉舟著　易風社發行

先きに「惡夢」と題して發行したるものより卷頭の「惡夢」を拔き、其他の二十一篇を收めたるものにして何れの篇にも氏一流の觀察と感情とがフレッシユに心持よくあらはれて居る。（定價五十錢）

▲收穫　前田夕暮著　易風社發行

前田夕暮氏の短歌集にして技巧よりも眞情を歌ひ出さんとしたる氏の努力は明かに窺ふを得べし。（定價五十錢）

▲アナトールフランス短篇傑作集　若月紫蘭譯　三教書院發行

アナトール、フランスの短篇數種を譯したるものにして、現代の一般の傾向とは餘程かけ離れた一種の面白味は確かにあるが、こういふ作者及び作は一つあれば澤山なので、之を眞似やうなどゝいふ愚な考を抱く人のなからんことを希望する。（定價五十五錢）

▲別離　若山牧水著　東雲堂發行

著者が近數年間の詠草中より一千首を拔萃したるものにして、多感なる若き詩人の情的內面史を讀むが如き心地す。（定價七十五錢）



○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅拾錢但淸、韓兩國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一 郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一 弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一 郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一 前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一 領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年四月廿六日印刷
明治四十三年五月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

